東洋通史

第拾一巻

11

220
Ku745t
S

003379-011-4

220-Ku745t

東洋通史

久保　天随／著

M36-37

ACC-1898

文學士久保天隨著

東洋通史

第十一卷

東京博文館藏版

220.Ku745t

東洋通史　分本第十一卷　目次

第四編　近世期　歐人東漸時代

(四)　清の初世

第三二章　滿州の興起……二八三頁
第三三章　太祖の建業……二九一
第三四章　太宗の紹述(上)……三〇二
第三五章　太宗の紹述(下)……三一四
第三六章　明の滅亡(上)……三二四
第三七章　明の滅亡(中)……三三六
第三八章　明の滅亡(下)……三五六
第三九章　三藩の叛亂……三七七
第四〇章　臺灣の鄭氏……三九四

32843

(五) 清の盛世と疆外經略

第四一章　露國東方侵略の權輿……四〇五
第四二章　準噶爾の征定(上)……四一九
第四三章　準噶爾の征定(下)……四四〇
第四四章　苗疆の剿治……四五四
第四五章　東南亞細亞の形勢……四六八
第四六章　廓爾喀の歸服……四八二

(六) 英人の東漸

第四七章　莫臥兒帝國の盛衰……四九一
第四八章　英人の印度侵略……四九九
第四九章　嘉道間各地の叛亂(上)……五一五
第五〇章　嘉道間各地の叛亂(下)……五二九
第五一章　鴉片戰爭(上)……五四四

第五二章　鴉片戰爭(下)……五六一

(七) 明清間の人文

第五三章　學術……五七四
第五四章　宗教……五九〇
第五五章　技藝……五九三
第五六章　社會事態の一班……五九七

第十一卷目次 終

東洋通史　略目次

上卷

第一冊　太古より春秋の終に至る
第二冊　漢族生育時代　戰國より楚漢に至る
第三冊　前漢
第四冊　後漢・三國・西晉
第五冊　漢族繁榮時代　東晉・南北朝
第六冊　隋・唐

中卷

第七冊　唐・五代
第八冊　蒙古優勢時代　宋
第九冊　蒙古

下卷

第十冊　明
第十一冊　歐人東漸時代　清
第十二冊　清

注意

この卷中に載する崇古の人名・地名等は、重要なるものに限りて、發音の假名を附す。恐るゝところ、體裁の冗雜に在ればなり。他は皆類推すべし。

又索引に於て、或は別に一表を設し、詳細に諸書に見ゆる異同を互校考證して、その國を補ふことあるべし。

(四) 清の初世

第三十二章　滿洲の興起

ツングス族は、女眞の完顏氏、その祀を絶ちて後、久しく沈淪して振はざりしが、朱明その政を失ふに及び、長白山下より發祥し、漸次膨大して、遂に現存せる東亞老帝國の基礎を定むるに至れり。長白山は、高さ二百餘里、縣亘千餘里、山上に潭あり、闥門といふ、周八十里、鴨綠・混同・愛滹の三江出づ、望氣者言ふ、その地、時に聖人を生じ、諸國を統一せむとす、と。山の東に布庫里山あり、山下に池あり、布爾瑚理といふ、相傳ふ、天女三あり、長を恩固倫といひ、次は正固倫、季は佛固倫、池に浴し浴し畢るや、神鵲あり、朱果を銜みて、季女の衣袂に置く、季女之を呑んで、遂に身むあり、寧いて、一男を生む、生れて能く言ひ、體貌奇異、長ずるに及び、母之に故を告げ、因つて之に命じて曰く、天、汝を生じ、以て亂國を定む、其れ愛親覺羅を以て姓と爲し、布庫里雍順を名と爲せ、と。母空を凌いて去り、子は小船に乘じ、流に順つて、河に至り、步して岸に登り、柳枝及び野蒿を折つて坐具となし、その上に端趺す。その地、三姓あ

り、雄長を爭ひ、兵を構へて、仇殺す、水を取るものあり、その狀貌を奇なりとし、歸つて、衆に告げて、走り問へば、語るに姓名を以てし、且つ曰く、我は天女佛固倫の生むところ、天、命じて、汝等の亂を定めしむ、と。衆驚いて曰く、天、聖人を生ずるなり、と。舁して歸り、奉りて主となし、長白山の東、俄漠惠の野、鄂多里城に居り、國を滿州と號す。城は瑚爾珞河の源、勒福善河の西岸に在り、寧古塔を去ること西南三百餘里、金の上京の地に近し。その後、數傳して、國人の叛に遭ひ、族戚を戮せられ、幼子范察、わづかに身を以て免れ、野に遁る。國人之を追ふ、鵲あり、其首に止る、追ふ者、以て枯木となし、因つて脫するを得たり。數傳して、肇祖に至る、名は都督孟特穆、虎欄哈達山下の赫圖阿拉に居る、その地、西、盛京を去ること二百七十里、東、寧古塔を去ること千二百里、今の興京、是れなり。肇祖、智略あり、計つて、先世仇人の後四十餘人を執らへ、半は之を誅し、半は之を釋るし、盡く故地を復す、子充善を生み、充善、錫賓齊篇古を生み、錫賓齊篇古、興祖都督福滿を生み、興祖、景祖覺昌安を生み、景祖、顯祖塔克世を生み、顯祖、太祖高皇帝を生む、名は努爾哈赤、これを清室の祖となす。肇興景顯の間、なほ赫圖阿拉に宅し、滿州の勢、漸く强大ならむとす。乾隆帝の上諭に據るに、金の先は靺鞨部に出て、古しへの肅愼の地、清室肇興の時、舊都を滿珠と稱し、所屬を珠申といひ後に漢字に相沿ふや、訛して、滿州となすも、その實、又古しへの肅愼にして、珠申の轉音なり。國語に金を愛親といふ、而して、清室の姓は、愛親覺羅、これ金清同派の證となすべし、といへり。清の始祖が、靺鞨の後裔にして、渤海及び金と同種族たること、こゝに至りて、愈ま明かなり。若し夫れ、その年次に至りては、審かにし難きものあるも、太祖の生年より逆算するとき、肇祖は明の正統景泰の際に當るべく、長白發祥の始祖は、當に遼金の末造に在るべしといふ。

太祖の復讐

太祖は、顯祖の長子、母は嫡妃喜塔喇氏、明の嘉靖三十八年を以て生る。天表非常、偉軀大耳、聲は洪鐘の如く、長じて勇略世を蓋ふ、號して聰明貝勒となす。時に諸帝爭奪已まず、太祖恩威並び用ひ、漸次削平す。これより先、蘇克素護河部の圖倫城に尼堪外蘭といふものあり、明の總兵寧遠伯李成梁に構へ、兵を引いて、古吟城主阿泰章京を攻む。阿泰の妻は、景祖の長子禮敦巴圖魯の女なり。景祖警を聞いて、女孫の陷られむことを恐れ、顯祖と偕に往いて救ふ。成梁克つ能はず。尼堪外蘭城に至り、大呼して、給いて曰く、能く阿泰を殺して、來り降る者は、即ち此城の主となさむ、

と。城中の人、遂に阿泰を殺して降る。成梁盡く之を屠る。尼堪外蘭、復た明兵を構へ、幷せて景祖顯祖を害す。太祖之を聞いて、赫然震怒、往いて明の邊吏を詰責す、明人尋いて二祖の喪を歸へす。明の萬曆十一年、太祖年二十有五、祖父の讐を報ゐむを思ひ、乃ち顯祖の遺甲十五副を以て兵を起し、尼堪外蘭を圖倫城に攻む。尼堪外蘭、嘉班に遁る。遂に其城に克つて歸り、すでにして、復た進んで、嘉班城を攻む。尼堪外蘭、乃ち鄂勒歡に遁れ、城を築いて居る。太祖、尋いで復た進んで、鄂勒歡城に克つや、尼堪外蘭、遁れて邊に入る。太祖、齋薩を遣し、四十人を率ゐて、之を索めしむ、邊吏執らへて齋薩に卑へ、遂に之を斬つて歸り、これより歲に銀幣八百兩を輸し、和好を明に通ず。太祖兵を用ふる、實に此に始まる。

滿州四境の形勢

はじめ、景祖の兄弟五人、各城を築いて、赫圖阿拉を環つて居り、遠きものは二十里、近きものは五六里、皆寧古塔貝勒と稱す。この時、諸國分裂し、盛京の東北滿州國に、蘇克素護河・渾河・完顏・棟鄂・哲陳の五部あり。朝鮮の北境に接したる長白山國に、訥殷・鳴綠の二部あり。これを明の建州衛の地となす。その北、寧古塔の東北、日本海沿岸たる東海國に渥集・瓦爾喀・庫爾喀の三部あり。これを野人衛の地となす。その西北、黑龍江の流域より、吉林・奉天に至るまでの間、扈倫國には、葉赫・哈達・輝發・烏拉の四部あり。これを海西衛の地となす。皆金代部落の遺、城郭土著射獵の國、蒙古行國の比に非ず。各その地に主となり、爭つて相雄長し、強は弱を凌ぎ、衆は寡を暴す。而して、扈倫四部、最も強くして、滿州の北に在り、皆居るところの河を以て名を得たり。烏拉・輝發の二河は、松花江に入り、哈達・葉赫の二河は遼河に入る。海西衛、又南北二關に分れ、南關は哈達、北關は葉赫、開原鐵嶺に偪處し、乃ち明の邊外衛なり。諸國すでに相仇視し、能く之を統一するなし。太祖乃ち近部より始む。

古呼山の戰

萬曆十五年、遂に哲陳部及び完顏部に克つや、滿州環境の五部、皆服し、仍つて建西衛を全有し、遂に海西部と敵となる。時に東珠の人參紫貂玄狐珍異の物を以て、撫順・清河・寬甸・鐵陽の四關口に於て互市し、以て財源を開き、兵食益す富む。十九年、又兵を出して、長白の鳴綠部を征服せしより、遠近太祖の志小ならざるを見、害の已に及ばむことを惧れ、力を戮せて之を剪滅せむことを謀り、萬曆二十一年、扈倫四部・蒙古三部・長白二部、相合し、九國の師三萬、路を分つて來侵し、渾河の北岸に營

し、軍士夜襲するや、火密にして星の如く、國人皆惧る。太祖酣寢、旦に達し、詰朝諸貝勒を率ゐ、堂子を拜して啓行し、古呼山に至り、險に據つて陣し、將士を諭して曰く、烏合の衆、その心、一ならず、その前なるものを殪せば、餘必ず反り走らむ。走つて之に乘ぜば、必ず大に克たむ、と。兵を遣して、戰を挑む。葉赫來り戰ふや、之を敗り、敵稍や却く。葉赫の布塞貝勒及び蒙古科爾沁の二貝勒、復た力を幷せて、來り攻め、布塞貝勒、直に前んで衝き入る、乘ずるところの馬、木に觸れて躓る。我が兵、奔つて前み、その身に踞して之を刺す。敵兵大に敗れ、烏拉貝勒の弟布占泰を擒にす。この役、斬級四千、鎧冑千餘副を得たり。これより、軍威大に震ひ、遐邇懾服す。この年、又珠舍哩・訥殷の二部を滅す。二十五年、葉赫・哈達・輝發・烏拉の四部、使を遣して、復た前好を締し、重ねるに婚媾を以てせむことを乞ひ、葉赫の布揚古貝勒は、妹を以て、太祖に進め、金台石貝勒は、女を以て、太祖の次子に妻はせむことを願ふ。太祖之を許し、鞍馬鎧冑を具へて、聘となし、更に烏牛白馬を椎して天を祀り、巵酒塊土及び肉血骨各一器を設け、四國相繼誓し、誓して曰く、すでに盟ふの後、もし婚姻を棄て、盟好に背けば、それ此土の如く、此骨の如く、此血の如く、永く其命を墜さむ。もし終始渝らざれば、此酒を飲み、此肉を食ひ、福祿永昌ならむ、と。

哈達の降服

はじめ、扈倫の四部、哈達の萬千、最も強く、その子蒙格布祿に傳へしが、兄弟内に鬩ぐや、遂に葉赫の乘ずるところとなり、援を明に乞ひしが許されず、乃ちその一子を質とし來つて急を告ぐ。太祖兵三千を遣して、之を助く。すでにして、哈達・葉赫に誣かれ、却つて、我が援軍の帥を執らへむとし、襲うて我が軍を攻む。こゝに於て、太祖兵を擧げて、之を克ち、盡くその城寨を降す。時に萬曆二十七年なり。明使抗議するところあり。因つて、復た哈達の貝勒を立てしも、歲饑え、且つ明の恃むに足らざるを見るや、復た我に降る。こゝに至りて、明は南關を失ひ、この後、明の貢を絕ちしも、唯だ互市は舊に仍る。

烏拉の滅亡

萬曆三十五年、輝發の貝勒、約に背きしを以て、伐つて、之を平らぐ。これより先、烏拉の布占泰を陣獲するや、留養四年の後、釋るして、國に還して王たらしむ。すでにして、布占泰、盟に背き、太祖聘するところの葉赫布塞貝勒の女を娶らむと欲し、又鳴鏑を以て、要りしところの太祖の女を射る。太祖之を聞いて、大に怒り、四十年、大兵を率ゐて、之を征し、その五城に克ち、六城を毀つて師を班せしが、その翌四十一

年、又親征し、伏爾哈城に戰つて、大捷を得、布占泰、遁れて葉赫に入り、烏拉遂に亡ぶ。太祖葉赫に諭し、布占泰を獻ぜしむ。聽かず、この年九月、兵四萬を率ゐて、之を征し、兀蘇城を降して回る。葉赫、明に告げて曰く、哈達・輝發・烏拉の三國、滿州すでに盡く之を取る、今復た我を侵す、その意、諸國を削平し、然る後、明を侵し、遂東を取り、以て國都となし、開原・鐵嶺、牧馬の場となさむとするなり、と。明乃ち遊擊馬時楠・周木敍を遣し、火器に錬習するもの千人を率ゐて、葉赫の二城を守衛せしむ。太祖、屢ば明の邊將を諭解すれども、應ぜず。これより、我が疆土を侵し、因つて、戰端を開くに至る。

太祖の治

太祖征戍の間に於て、又文治を忽にせず。蒙古字を以て、國語に合し、聯綴して句を成し、滿州文を創立し、翠いて、十二字、頭に圈點なく、上下の字、雷同別なきを以て、因つて圈點を加へて、之を分析す。又、佛寺及び玉皇廟を建て、凡そ七大廟、三年乃ち成る。太祖諸國を削平して以來、三百人ごとに、一の牛祿額眞を設け、五の牛祿額眞に一の甲喇額眞を設け、五の甲喇額眞に一の固山額眞を設け、每固山額眞、左右に兩梅勒額眞を設く。これより先、止だ黃白藍紅の四旗あり。こゝに至りて、四旗を以て、之を鑲して、八旗となし、行軍地廣ければ八旗並列し、分れて八路となり、地狹ければ八旗合して一路となり、接戰には堅甲利兵の者をして前鋒たらしめ、輕甲善射の者をして後より衝擊せしめ、精騎他處に立ち、勢を觀て接應し、預め勝負の方略を籌り、戰へば必ず勝つ。又理政聽訟の大臣五人、札爾齊十人を置き、臣下敢て欺隱せず、民情皆上聞を得せしむ。太祖德を明かにし、刑を詳かにし、老を敬し、賢を尊び、忠直を擧げ、讒佞を遠ざけ、孤寡を恤み、貧乏を養ひ、國政に勤勞し、晝夜あるなく、國內大に治り、奸宄生ぜず、これに由つて、帝業すでに成る。

太祖の即位

第三十三章　太祖の建業

明の萬曆四十四年、衆貝勒大臣等、成な表を奉じて勸進し、正月壬申朔を以て、太祖を尊んで覆育列國英明皇帝となし、元を建てゝ天命といふ。太祖年五十有八、海西四國、すでに其三を平らげ、唯だ葉赫、明の援を恃み、嶇を肘腋に負ふ。明亦た之に倚つて、北關の固となし、重兵を開原に屯して犄角に備ふ。太祖議して云ふ、我が都遼瀋に偪る、先づ葉赫を圖らむとすれば、明兵の我が虛を擣かむことを患ふ。大に

七大恨の誓

明兵を挫き、その氣を奪ふに非ざれば不可なり、と。因つて兵を按じて、休止すること二歲、天命三年（明の萬曆四十六年）に至り、師を興して明を伐たむとし、行くに臨み、七大恨を以て天地に誓ふ。その誓に曰く、我の祖父、未だ嘗て明邊の一草寸土を損せざるなり、明、端なく釁を邊陲に起し、我が祖父を害す、その恨、一なり。明、釁を起すと雖も、我、尙ほ好を修めむと欲し、碑を設け、誓を勒す。凡そ滿漢人、疆圉を越ゆる毋れ、敢て越ゆるものあらむか、見れば即ち之を誅さむ、見て故らに縱てば、殃、縱ちしものに及ばむ、詎ぞ明復た誓言を渝え、兵を遣うして、界を越えて、葉赫を衛助するや、恨二なり。明人、清河以南、江岸以北に於て、每歲竊に疆塲を偷み、其據を肆にす、我誓に遵ひ、誅を行ふ。明、前盟に背いて、我が擅に殺せしを責め、我が廣寧の使臣綱吉里方吉納を拘らへ、十人を挾取し、之を邊境に殺す、恨三なり。明、境を越え兵を以て葉赫を助け、我が已に聘せし女をして、改めて蒙古に適かしむ、恨四なり。柴河・三岔・撫安の三路、我が累世疆土を分守するの飛田を耕し、穀を藝ゆ、明、刈穫を許さず、兵を遣して驅逐す、恨五なり。邊外葉赫、罪を天に獲たり、明乃ち偏に其言を信じ、特に使臣を遣し、書を遺つて詬罵し、肆行凌侮す、恨六なり。むかし哈達、葉赫を助け、二次來り侵し、我自ら之に報ず。天すでに我に哈達國を授く、明又之に黨し、我を挾んで以て其國を復し、すでにして、哈達の人、數ば葉赫に侵掠せらる。夫れ列國の相征伐するや、天心に順ふものは勝つて存し、天意に逆ふものは敗れて亡ぶ。何ぞ能く兵に死するものをして、更に生き、其地を得るものをして、更に還らしむるや。天、大國の君を建つ、即ち天下の共主たり、豈に獨り予一人を主とするのみならむや。はじめ、扈倫諸國、合して我を侵すや、天、扈倫を厭うて、釁を開き、惟だ我を是れ眷す。今明、天誡の葉赫を助けて、天意に抗し、是非を倒置し、妄りに剖斷を爲す、恨七なり。欺凌日に甚しく、情塡へ難きところ、この七大恨の故を以て、是が故に、之を征す、と。太祖天を拜し畢りて、其書を焚き、諸貝勒及び統兵諸將を率ゐて、鼓を鳴らし、樂を奏し、堂子に謁し、步騎二萬を以て、興京を發し、撫順に趨き、その城を圍み、人を遣し、書を以て、遊擊李永芳を諭さしむ、永芳降り、撫順・東州・瑪哈丹の三城、及び臺堡、悉く下る。廣寧總兵張承廕、師を率ゐて、往いて援けしも、大に敗れ、士卒逃れ歸るもの十に一二なし。秋に至り、太祖、清河城・撫安堡・蘇場堡に克ち、全遼爲に震動す。明主、前に日本を禦ぐの將楊鎬を起して、遼東を經略せしむ。

明の大敗

その翌天命四年、太祖自ら大兵に將として、深く葉赫に入り、二十餘寨に克つ。葉赫急を明に告ぐ、明主、我が國兵日に盛なるを見、大に兵を出して、我が國を攻覆せむと欲す。楊鎬、兵を瀋陽に集め、朝鮮宣祖の子光海君、さきに明の後援を得たるを德とし又兵を發して來り會し、大兵二十四萬と號し、三月一日を期して、撫順關・鴉鶻關・三岔口・寬甸口より出て、四路深く入り。我が國都城を取らむとす。大學士方從哲、兵部尚書黃嘉善、日に紅旗を發して、進兵を促す。二月二十一日、師を出す。明將杜松、首功を立てむと欲し、先つて進み、薩爾滸谷口に駐まる。太祖親ら六旗の兵四萬五千を統べて、その大營を攻め、大に之を敗り、杜松流矢に中つて死し、北ぐるを逐ふこと二十餘里、漂尸及び旌旗器仗、渾河を蔽うて下る。明の北路の兵、又尚間崖に潰え、其將馬林、殘卒を收めて、開原に走り、葉赫の兵、中途より遁れ還る。こゝに於て、兩路皆破る。楊鎬之を聞いて、急に檄して、李如栢・劉綎の二軍を留む。如栢は、檄を得て還りしも、綎の軍は、ずて。に險を涉りて深く入り、都城を去ること三百里餘、尚ほ西北兩軍の敗信を知らず、衆を整へ、進んで阿布達哩岡に登る。太祖軍を移して之を禦ぎ、兵四千を留めて都城を守らしめ、反間を縱ち、之を促して、速に進ましめ、兵を以て、其上に出て、高より奮擊す、綎、遂に戰死し、士卒脫するもの幾もなし。時に康應乾の兵、及び朝鮮の軍、富察の野に營す。戰ふに方つて、大風石を走らし、沙塵を揚げ、目、開くを得ず、火器皆反擊す。我が軍、勢に乘じて衝入し、大に之を敗り、應乾わづかに數百騎を以て免る。朝鮮の元帥姜功烈、遂に五千の兵を以て降る。この役や、明は天下の力を傾け、盡く宿衛の猛士及び朝鮮葉赫の精銳を徵し、同日に深く入り、我をして、兼顧する能はざらしむ。我が軍、四五萬に過ぎず、力を併せて、その一路を破り、五日を閱して、三路皆破れ、士卒わづかに數百人を損するのみ、而して、明は文武將吏、前後死するもの三百一十餘、馬駝甲仗を失ふこと算なし。敗報聞するや、京師大に震ひ、言官交章して鎬を劾し、尋いで逮せられ、詔して獄に下つて論死す。明清の興亡、實にこの一戰に肇る。

明北關を失ふ

四月、太祖開原に克ち、士卒を界藩城に休め、七月鐵嶺に克ち、葉赫の背を拊き、遂にその東城を圍む。その貝勒錦台什、自ら焚死し、布揚古、西城を以て降る。こゝに於て、明塞復た北關を失ふ。滿州の版圖、西は遼に至り、南は朝鮮に至り、北は黑龍江に至り、語言相同じきの國、盡く我が有となる。

熊廷弼

明、すでに楊鎬を逮して、罪を治するや、熊廷弼、かつて遼を按じ、邊事に熟するを以て、擧げて、兵部尚書兼右僉都御史となし、之に代らしむ。時に遼瀋大に震ひ、諸城堡盡く竄れ、數百里、人跡なく、中外必ず遼なからむといふ。廷弼、乘程雪を冒し、徧ねく形勢を關し、守備を繕し、軍令を肅にし、固守して浪戰せず。兵十八萬を集めて、諸堡に分布し、小警は自ら禦ぎ、大警は互に援け、更に精銳を選びて、遊徼となし、間に乘じて零騎を掠め、耕牧を擾し、更番迭に出て、以て窺會を徼つ。我が軍、亦た兵を按じて攻めざるもの歲餘。明の廷臣、廷弼を忌むもの、爭つてその罪はざるを劾す。廷弼乞うて罷め、袁應泰を以て之に代らしむ。應泰、吏事は敏錬なれども、然かも、將材に非ず。蒙古の饑人數萬を招降し、分つて遼瀋二城に處らしむ。我が國、亦た厚く遼人を撫す。こゝに於て、降人と、遼人と、皆我が耳目となる。

袁應泰の敗

この間、明の神宗殂し、光宗を經て、熹宗に至る。天命六年(明の天啓元年)袁應泰、三路兵を出し、清河撫順を復さむことを議し、未だ行かず。太祖兵を擧げて、瀋陽を攻めて、之を陷る。總兵董仲揆・陳策、兵を以て、來り援け、師渾河に次す。我が兵、之を圍むこと數重、營中火器を發して、殺傷多し。すでにして、火藥盡き、短刀接するや、我が兵、萬矢環集す。策・仲揆等、猶ほ刀を揮つて衝突し、各數十人を殺して死す。この役や、明は萬餘人を以て、我が數萬の衆に當り、兵力屈して覆る。遼左兵を用ひて以來、第一の血戰となす。我が兵、遂に勝に乘じて、遼陽を攻む。袁應泰、力を併せて城守し、水を引いて濠に注ぎ、濠を環つて火器を列す。太祖命じて、その水源を塞がしめ、右翼の兵、土石を運びて、水を壅ぎ、遂に濠を越えて鏖戰し、左翼の兵、奮つて橋を奪つて、城に登り、その一隅に據る。城中大に亂る。この夜、明兵猶ほ炬を列し、拒戰して旦に達す。我が右翼の兵、亦た城に登る。應泰、戰を城樓に督し、劍印を佩び自經して死し、御史張銓、執らへられて屈せず、北向闕を拜し、遂に父母に辭し、乃ち縊死す。太祖命じて之を禮葬せしむ。その餘、逃るものは逃れ、殉するものは殉す。城中の民、皆采を結び、香を焚いて、太祖を迎へ、鼓吹導引して入る。遼陽すでに下り、遼東の三河等五十塞、河東大小七十餘城、皆風を望んで降る。こゝに於て、議を定めて、都を遼陽に遷す。

遼瀋すでに失ひ、明大に震ふ。明主、盡く前に廷弼を劾せし諸臣を譴し、廷弼を家より起し、乃ち三方布置の策を建て、廣寧・登萊には各巡撫を設け、而して、經略は山

王化貞の敗

海關に駐まり、三方を節制す。はじめ、廷弼の未だ至らざるや、廣寧巡撫王化貞、先づ軍事を部置し、遼河に沿うて六營を置き、又分つて諸要害を戍らしむ。廷弼の至るに及び、化貞節度を奉ぜず、議合はざるを以て、務めて大言をなす。兵部尚書張鶴鳴篤く之を信じ、言として從はざるなく、廣東は十四萬、廷弼關上一卒なく、徒に經略の虛號を擁するのみ。十月氷合するに至り、滿州の兵、將に南せむとす。張鶴鳴、廷議して、廷弼を去り、專ら化貞に任ぜむと欲す。而して、滿州の兵、すでに西平堡を陷る。化貞、孫得功を信じ、深く廣寧の兵を發して得功に與ふ。滿州の兵、沙嶺に次して進まず、得功すでに陰に內應をなし、誘つて、敵騎すでに廣寧に薄るといふ。化貞城を棄て、單騎走り、廷弼に大凌河に遇ふ。化貞は哭し、廷弼は笑ひ且つ憤るのみ。乃ち率ゆるところの五千人を以て、化貞に授けて殿たらしめ、盡く積聚を焚き、難民數十萬を誘して、關に入る。得功我が兵を迎へて、廣寧に入り、錦州・濟河等の城堡、皆降る。

孫承宗

天命七年（明の天啓二年）正月、明主王化貞を逮し、併せて、熊廷弼を逮し、王在晉を以て遼東を經略せしめ、薊遼總督王象乾とともに邊を籌る。在晉、專ら關門を守り、關外を棄つるを主とす。大學士孫承宗、自ら往いて、之を決せむことを請ふ。明主之を許し、尙方劍を賜ひ、門に御し、臨遣して、其行を寵す。承宗、才、廷弼に及ばず、而かも器度之に過ぐ。すでに關に至るや、軍制を定め、職守を中明し、馬世龍を以て總兵官となし、遊擊祖大壽等をして覺華島を守らしめ、副將趙率教をして前屯を守らしめ、前後城堡を築くこと數十、兵を練ること十一萬、鎧仗を造ること數百萬、屯田を開くこと五千頃。滿州の兵、深く入らず。而して、承宗防守嚴にして、亦た敗衂を致さず、軍聲頗る振ふ。遼河以西の舊地、幾んど復せられむとす。

太祖の遷都

この年、太祖議して曰く、遼陽大半、久しく、すでに傾圮す。東南には朝鮮あり、北には蒙古あり、ともに貼服せず、必ず更に堅城を築き、兵を分つて守禦せば、庶くは意を安くして出征するを得むと。遂に城を遼陽の東五里、太子河邊に築き、宮闕の制を備へ、遷つて之に居り、名づけて、東京といふ。後三年、瀋陽更に形勝の地たるを以て、復た遷つて、之に都す。これを盛京となす。孫承宗、將に、遼西を克復せむとす。我が國、都を營むに因り、兵を按して、四歲攻めず。而して、太監魏忠賢の黨、日夜承宗を排

し、遂に之を去らしめ、高第を以て之に代らしむ。第、素より恇怯、關外守るべからざるを以て、盡く錦州・凌河、諸城の守具を撤して、關内に移らむと欲す。袁崇煥、力爭して謂ふ、兵法に進むありて退くなし、錦右動搖すれば、寧前震恐し、關内亦た保障を失はむと。第の意堅く、且つ併せて寧前二城を撤せむと欲す。崇煥死を以て誓ひ、守つて去らず。第、奪ふ能はず。乃ち錦州・右屯・大小凌河及び松山・杏山・塔山の守具を撤し、盡く驅つて關に入り、米粟十餘萬を委棄し、軍民死亡、途に載せ、哭聲野に震ふ、民怨んで、軍益す振はず。

袁崇煥の防守

天命十二年、太祖經略興し易きを以て大擧し、凡そ兵十三萬、二十萬と號し、山海關の大路を横截して軍し、寧遠を圍む。高第、總兵楊麒と兵を擁して救はず。寧前參政袁崇煥、大將滿雄等と血を刺して、誓を書し、將士死守、盡く城外の民居を焚き、守具を携へて城に入り、前屯及び山海關に檄し、凡そ將士逃れ至るものは悉く斬る。こゝに於て、人心はじめて固し。明日大軍進み攻む。矢石雨下、崇煥、圍卒羅立をして西洋巨礮を發せしめ、數百人を傷く。三日再び攻めて、再び却き、圍遂に解け、軍餉及び舟二千餘隻を焚いて還る。二月瀋陽に至る。太祖二十五歲、兵を起して以來、戰つて捷たざるなく、攻めて克たざるなし。惟だ寧遠城のみ下らず、これが爲に怪ばざること數日。明主、崇煥を擢んでゝ、僉都御史となし、高第・楊麒の職を削り、王之臣を以て第に代らしめ、前屯總兵趙率教を以て麒に代つて關門に鎮せしめ、尋いで崇煥に命じて遼東に巡撫し、寧遠に駐らしむ。

太祖の殂落

この年八月十一日、太祖崩ず。年六十八。これより先、孝慈皇后殂し、烏拉國王滿大貝勒の女を以て大福金となす。丰姿美にして、心未だ純善ならず。太祖その後亂を國に爲さむことを恐れ、遺詔して殉たらしむ。第八子皇太極、位に即く、これを太宗文皇帝となす。

太祖の征伐

太祖征伐ある毎に、諸貝勒と野に適き、地に畫して議し、馬に上つて令を傳へ、上下等夷、甚だ異ならず。五大臣を以て、政を議し、十大臣、事を理し、反獄なく、壅情なく令簡にして速なり。故に事舉らざるなし。敵に臨んで、一旗拒戰すれば、即ち七旗佐領の丁を以て一旗に給し、一旗却走し七旗拒戰するも、亦た此の如くし、一旗の内半ば却走し半ば拒戰するも、亦た此の如くす。罪は親も貸さず、功は疏も遺さず、令信にして必なり。これを以て、諸國を統一し、明の遼陽・瀋陽の諸地及び蒙古諸部落

に克つ。興京の內城は、宗室勳戚を居らしめ、外城は宿衛親兵萬餘を居らしめ、この外、遼近十餘萬戶、遼河の東西に散處し、事なければ耕獵し、事あれば徵調し、戰勝てば、俘を分つて賞を受け、人自ら兵を爲り、人自ら饟を爲り、兵を養ふの費なし、故に用足らざるなく、兵を起して二十載にして、國基建ち、又十載にして王業大に定まる。

太宗の即位

第三十四章　太宗の紹述（上）

太宗狀貌奇偉、面は赤日の如く、仁孝聰睿、深謀遠慮、兵を用ふること神の如く、性典籍を嗜み、七歲以後、太祖委ねるに家事を以てし指示を煩さず。太祖の崩ずるや大貝勒代善の二子、岳託・薩哈廉、その父に謂つて曰く、皇太極、才德世に冠たり、速に大位を繼ぐべし、と。次日、代善、大貝勒阿敏・莽古爾泰及び諸貝勒と集議し、請うて位に即かしむ。時に年三十五。詔を頒つて大赦し、明年を以て天聰元年となす。明の遼東巡撫袁崇煥、使を遣して、即位を來賀し、我が虛實を覘はしむ。太宗亦た書を以て之に報ず。これを明と和を議し戰を議するの始となす。その書に曰く、山海關以西は、漢人に聽かせ、遼河以東は、我之を制せむと欲す。滿漢各自國を爲し、原と中原を爭ふの心なし。もし疆を畫し、約を定め、好を修め、兵を息めむと欲せば、その尊卑の稱呼、我當に爾の主に一格を遜るべし。その幣、我は東珠・貂を以てし、明は金銀・緞子各若干を以てせよ、と。はじめ、關外の四城、兵六萬を屯して轉餉に艱む。故に孫承宗、錦州・凌河の諸城を復し、屯を開いて、食を足らしむ。高第、盡く寧遠を撤去してより外障なく、崇煥陰に之を復せむと欲し、我が朝鮮に事あるに乘じ、陽に使を遣して和を議し、暇を以て、舊疆を修し、屯守の計を爲さむと欲す。我が朝、之を知る。故に和議遂に要領を得ずして止む。

朝鮮の征討

日本朝鮮の媾和

太宗即位、首として朝鮮を伐つの擧あり。論者或は袁崇煥將略あるを以て、しばらく、その銳を避くるが爲にせしものとなせども、實は武を耀し、紹述の夙志を世に知らしめしものに外ならず。次に壬辰亂後、朝鮮の狀況より始めて、此に及ぶべし。

七年の攻戰、漸く終を告げ、我が征韓の諸將、凱旋するや、德川家康、朝鮮の舊交を思ひ、宗義智をして、書を奉じて、朝鮮に至らしむ。宣祖、我が將士の侵掠を恐にした

るを憤り、復た通信和睦を欲せず。宗氏その間に處して、頗る周旋するところあり、遂に金繼信・孫文或・呂祐吉等をして、國書を持し、我が國に來り、和好の事を議し、兩國の信を通ぜしむ。時に宣祖即位の四十一年、丙午の歳に當るを以て、半島史に之を稱して丙午の通信といふ。後一年にして、宣祖昭敬王薨じ、その子琿、繼いで立つこれを光海君となす。德川氏、復た宗義智に命じ、僧玄蘇・柳川景直をして、國書を齎らし、來年の使聘に報ぜしめ、後復た使を遣し、館を釜山に設け、歳船貿易條例を約す。こゝに於て、通商貿易、はじめて舊に復し、使聘往來絶えず。時に光海君即位の二年乙酉に當るを以て、これを己酉の條約と稱す。後數年を經、吳元謙・朴梓・李景稷等、一行四百餘人、我が國に來聘し、德川氏大坂の戡定を賀す。

光海君の虐政

壬辰亂後、朝鮮八道、頗る疲弊し、流氓街衢に滿ち、盜賊山谷に據る。光海君、政を爲す不德、賦斂を重くし、屢ば大獄を起し、苛法峻刑を以て、民を苦しめ、又賣官贖刑の科を設け、母后王氏を幽し、正妃を廢し、嬖姬侯豎、朝に在り、綱紀、地に墜つ。清の太祖の天命元年、明軍四路來侵するや、光海君、その將姜功烈を遣し、兵を以て、明を助けしめ、合せて富察の野に營す。天、風を反して疾雨、火器却焚し、姜功烈、遂に兵五千を以て降る。太祖その部將十餘を歸し、書を以て、光海君に諭して、曰く、むかし、明、兵を以て、爾の大艱を救ふ、故に爾の國、亦た兵を以て明に勤む。勢已むを得ず、我に於て怨あるに非ざるなり。今禽にするところの將吏、王の故を以て釋るして國に還らしむ、王其れ自ら去就を審にせよ、と。光海君報謝せず。

憲文王の即位

すでにして、光海君、その下の爲に廢せられ、恭良王の長子琮立つ、これを憲文王となす。王、前朝の弊政を革めむと欲し、王氏及び正妃の位號を復し、廢朝の僞勳を削り、事將に成らむとするや、平安兵使李适の亂あり、王、難を公州に避く。すでにして亂平らいで、都に還り、新に南漢に築く。

朝鮮の降服

これより先、朝鮮未だ滿州に通ぜず、太祖の軍、瓦爾哈を攻むるや、兵を出して之を拒ぎ、屢ば烏拉部の貝勒布泉泰と兵を構へ、太祖の上賓するや、使を遣して弔問せず。明將毛文龍、遼の遺民數萬を招いて、皮島を守る。その地、亦た東江と名づけ、鴨綠江口に在り、朝鮮の東境及び滿州の東境を去ること、各八十里、屢ば師を出して沿海の城寨を襲ひ、滿州を牽制して、朝鮮と犄角す。會ま朝鮮の叛人韓潤・鄭梅、亡げ

て滿州に入り、鄉導となりて、兵を構へむことを請ふ。時に太宗の天聰元年、明の天啓七年に當り、朝鮮の憲文王李倧嗣立の三年なり。貝勒阿敏等、師を率ゐて、鴨綠江を渡り、先づ文龍の兵を鐵山に敗り、遁れて皮島に還らしめ、遂に義州・定州及び淺山城に克ち、その軍民數萬を屠り、糧百餘萬を焚き、長驅して進む。この月、靑泉江を渡り、安州に克ち、師を平壤に進む。城中の官民、悉く遁る。遂に大同江を渡り、中和に次し、二月黃州に次す。國中震恐し、援を明に求め、又成を我に求むるの使絡繹たり。明の袁崇煥、舟師を遣し、皮島を援け、又精兵九千を遣し、三岔河に逼りて、牽制を圖る。而して、太宗亦た明が國內の虛實を窺はむことを恐れ、親ら出でゝ邊を巡り、兵を遼河の岸に糧して備を爲す。時に朝鮮を征するの師、すでに國都に倡り、憲文王、妻子を挈へて、江華島に遁れ、復た使を遣して、軍に詣り、罪を謝す。江華島は、開州南海の中に在り、我が軍、舟なく、渡る能はず。乃ち使を遣して、島に赴いて宣諭せしめ、而して、軍を平山に駐めて、待つ。憲文王、族弟原昌君李覺等を遣し、馬百、虎豹の皮百、綿綢苧布萬有五千を獻ず。こゝに於て、使を遣し、江華島に往いて、盟せしめ、約して、兄弟の國となる。

阿敏

はじめ朝鮮の成を求むるや、諸貝勒等議す、明と蒙古と、兩敵環視す、國兵久しく出づべからず、且つ俘獲すでに慊たるを以て、願はくは、宜しく其成を許すべし、と。而して、阿敏、朝鮮の城郭宮殿の壯なるを羨うて、肯へて師を旋へさず。こゝに於て、貝勒濟爾哈朗及び岳託碩託、乃ち密議して、阿敏をして、平山に軍せしめ、而して、先づ朝鮮と盟ひ、事成るや、乃ち阿敏に告ぐ。阿敏謂ふ、己は盟に預らずと。乃ち兵を縱つて、四に掠む。因つて、李覺をして、復た阿敏と平壤に盟はしむ。太宗、亦た阿敏に諭し復た秋毫掠るなからしめ、乃ち兵三千を分ち、義州を戍せしめ、振旅して還る。四月李覺、大軍に隨つて入朝す。この秋、憲文王の請に從ひ、義州の兵を召還し、並に俘にせしところの人民を贖ひ、議を定め、春秋に歲幣を輸し、中江に互市す。

朝鮮、すでに滿州の正朔を奉じて屬國の禮を取り、全くその東藩となれり。然れども、その後、なほ兵を用ひ、後明室の滅ぶるに及ぶや、爲に羈束愈よ甚しく、事大の思想は、今に至りて、長く變ぜざるなり。

朝鮮の師、凱旋するや、その年五月、太宗親ら兵を督して、大凌河に至り、遂に進ん

て錦州を圍み、別に兵を分つて、寧遠を攻む。袁崇煥、將士を督して、陣に登り、營を濠内に列し、礮を用ひて拒擊す。天方に暑、太宗遂に大小二城を毀つて還る。はじめ太祖兵を起してより、明軍風を望んで潰竄し、敢て戰守を議するなし、その之を議する、實に崇煥より始まる。魏忠賢、猶ほ其黨をして、崇煥の錦州を救はざりしを効せしむ。崇煥力めて退を乞ひ、王之臣を以て之に代らしめ、又錦州を撤して、寧遠を守らむことを議す。この年、明の熹宗崩し、毅宗莊烈帝位に即き、首として、魏忠賢を誅するや、復た崇煥を用ひて、師を督せしむ。これより先、毛文龍、皮島に據り、富民をして、皆毛姓を冒さしめ、その子弟裔孫となし、民逃奔するものあれば、輒ち首を斬つて、假りに陣獲と稱し、誑いて、明朝に報ず。明、之を信じ、陞して大都督となし、凡そ島中の黜陟生殺、便宜事を行はしむ。崇煥、その滿州と私に通ずるを疑ひ、之を殺す。諸島の兵、これより主なく、部將等皆明の命を奉ぜず。後數年ならずして、登州の參將孔有德、耿仲明、廣鹿島の副將尙可喜等、相率いて、舟師を以て滿州に降り、明の兵威、大に衰ふ。

毛文龍の死

天聰三年、冬大舉して明を伐つ、兵十餘萬、道を分つて深く入り、師、青城に次す。太宗、袁崇煥を惡み、之を去らむと欲し、計を決し、喜峰口より邊牆を毀つて入り、遵化を圍む。巡撫王元雅、城中の兵四百を汰す、その汰兵、即ち門を開いて、我が師を延き之を陷れ、總兵趙率教、戰死す。明主、薊遼總督劉策に命じ、石門を扼し、以て西軼を防がしむ。我が兵、すでに薊州に趨く。而して、明の督師袁崇煥、祖大壽、何可綱を率ゐ、山海關より兼程入つて援く。明主命じて、盡く諸援軍を統べしむ。我が軍、反間を縱つて言ふ、太宗の深く入るは、崇煥と成約あるに因る、と。獲るところの太監をして、之を知らしめ、陰に縱つて去る。明主、さきに崇煥擅に毛文龍を殺せしを疑ふ。こゝに至り、即ち崇煥を召して城に入らしめ、之を獄に下す。こゝに於て、祖大壽、何可綱、兵萬五千を率ゐて、山海關を出づ。明主乃ち大同總兵滿桂に命じて、武經略となし、故の督師孫承宗を起し、通州より移つて關門に鎮せしむ。滿桂戰死す。太宗、武を究むるを欲せず、乃ち和を議する書を爲り、分つて、永定門、德勝門に置き、軍を移し、薊を略して東す。

袁崇煥獄に下る

その翌四年正月、永平に克ち、遷安に克ち、灤州に克ち、二月師を班して、瀋湯に臨る。時に明の各路の援軍二十萬、馬世龍、之を統べ、孫承宗、關門の軍と東西犄角し、我

吳襄宋偉の敗

が大軍の歸るに乘じ、五月十日、先づ瀋州を攻む。守將二貝勒阿敏、明軍の盛なるを見、重兵を擁し、永平に屯して援けず。尋いて、夜、城を棄てゝ遁れ、殿後を嚴にせざるを以て、明軍に襲はれ、士卒多く死す。太宗大に怒り、その罪を議し、特に死を免じて幽禁す。五年、はじめて紅夷の大礮を鑄り、秋復た大凌河城を攻む。時に孫承宗すでに關内の四城を復し、復た關外の舊疆を理し、力を幷せて、先づ大凌河城に城き、雉堞その半を完うす。我が兵四面長濠を堀り、軍を分つて、錦州の援を截つ。九月明の巡撫邱禾嘉、及び總兵吳襄・宋偉等、步騎四萬、小凌河を踰えて陣す。太宗軍を分つて、二となし、先づ其半を率ゐて進み、敵陣の整へるを見、その營を移すを俟つて、之を擊たむと欲し、乃ち引いて還る。明兵四鼓、大凌河に趨き、長山口に陣す。城を距ること十五里、太宗兵三萬を督して之を擊つ。敵、なほ陣を堅うして動かず。乃ち兩翼の勁騎を率ゐて、先づ宋偉の營を衝く。營中の火器、天に震ふ。我が左翼、鎗礮を避け、右翼の後に隨つて進む。宋偉殊死して戰ひ、營破る能はず。我が前鋒、多く死す。復た左翼の兵を麾いて、吳襄の營東に趨かしめ、大礮火箭を發して、之を攻む。時に黑雲起り、風、西より來り、襄の軍、勢に乘じて、火を縱ち、我が軍に偪らむとす。忽にして、大雨

大凌河城陷る

風を反し、襄の營、燬けて先づ走る。我が右翼、宋偉の營を攻め、力戰して晡に至り、亦た衝いて、其營に入り、明軍大に奔る。我が伏兵、その歸路を截つて、之を殲くす。大壽の弟大弼、副總兵なり、萬人敵と號し、かつて五百騎を以て、我が軍を錦州に衝き、刃殆んど御馬の腹に及ばむとす。太宗稱して祖二風子となす。こゝに至り、死士百二十人、滿州語を能くするものを率ゐ、服を易へて辮髮し、夜、御營を白雲山に突き、火藥帳に偪つて起る。諸營驚擾、我が侍衛力戰し、黎明乃ち退く。

十月大凌河援盡き、糧絕え、人馬を殺して食ふ。城中の商民三萬、わづかに、三の一を存す。我が兵、礮を鳴らして、塵を揚げ、詭つて援兵となし、之を誘うて城を出でしめ、破つて還る。すでにして、錦州の援兵四萬、果して至る。城中礮を聞けども、疑うて敢て出でゝ夾擊せず。大壽、遂に降る。すでにして、妻子錦州に在るを以て、詭り往いて內應せむといひ、縱たれて歸るや、復た明の爲に守る。太宗城を毀つ、然れども明の諸將前後相踵いで、降るもの、頗る多し。

この時に方り、漠南蒙古の察哈爾（插漢兒）部に林丹汗あり、明之に賂して、滿州を

林丹汗

額哲の降服

牽制せむとせしを以て、太宗直に兵を移して、その剿平に從事せり。

はじめ、韃靼の可汗、すでに衰微し、威令わづかに察哈爾に行はるゝに過ぎず。赤汗の孫薩克圖可汗の時、地を東に拓きて、扈倫部を征服して、稍や勢を張りしも、未だ大ならず。その後、林丹汗、明の萬曆三十二年を以て立ち、胡土克圖可汗と號するに及び、士馬精強にして、漠南を横行し、屢ば遼東に侵入し、土默特部の衰へたるに乘じて、之を奪ひしを以て、諸部東して、科爾沁部に走らざれば、北して喀爾喀に投じ、科爾沁部も亦た敵する能はず、漠南蒙古の諸部とともに、滿州に歸附して、其援を乞ひ、天聰三年、喀爾喀部、亦た滿州に歸附し、太宗因つて兵を發して、連に察哈爾を討たしむ、而して、明は林丹汗に賂して、滿州に抗敵せしめしも、歲賞を要挾して終に成効なし。天聰八年六月、太宗大軍を統べ、盡く各部蒙古の兵を發して、察哈爾を征す。時に遼河夏漲り、晝夜潦を冒して、その不意に出て、內興安嶺を踰え、千三百里、その庭に至る。林丹汗、拒戰せむとせしも、所部解體して收拾すべからず、遂にその人畜十餘萬衆を徙し、歸化城より、河を渡つて、西に奔り、沿途離散するもの、十の七八。林丹汗、走つて、青海の大草灘に死す。滿州の軍、乃ち歸化城に至り、その部落數萬を收めて還る。明年に至り、林丹汗の子孔果爾額哲、所部を率ゐ、傳國の璽を奉じて來り降る。これを滿州受命の始となす。太宗、額哲が元の嫡裔なるを以て、親王に封じ、位四十九旗貝勒の上に冠たり。その衆編旗、義州に安置す。こゝに於て、和碩貝勒及び外藩蒙古四十九貝勒、土默特兩部、合して尊號を上らむを乞ふ。太宗曰く、朝鮮は兄弟の國、與に共に議すべし、と。因つて書を齎らし、英俄爾泰を遣し、その國に至り、王に見えむことを請はしむ、竟に接見せず、又兵を設けて、晝夜防守す。こゝに於て、英俄爾泰、馬を奪ひ、之に乘じ、門を突いて出てゝ歸る。太宗、朝鮮の意を決して決絕するを知る。諸貝勒大臣、請うて之を殲滅せむと欲す、太宗許さず。

太宗の尊號

すでにして、禮部、吉を四月十一日乙酉に擇び、群臣尊號を上る。太宗固辭して允さず、諸臣再三陳請し、乃ち寬溫仁聖皇帝の尊號を受け、崇德と改元し、國を大淸と號す、時に年四十八。詔を頒つて大赦し、太祖を尊んで武皇帝といひ、以上四王を追封し、功臣扈英東に追加して直義公となし、額宜都を弘毅公といひ、太祖に配食せしめ、大貝勒代善を封じて禮親王となし、濟爾哈貝勒を鄭親王となし、多爾袞を睿親王となし、多鐸を豫親王となし、豪格を肅親王となし、岳託を成親王となし、異姓

の功臣孔有德・耿仲明・尚可喜及び外藩蒙古各部に王爵を賜ふ。惟だ朝鮮は、肯て推戴せず、且つ違言あり、故に及ばず。諸兄弟子姪を封じて王貝勒となし、親王多羅郡王多羅貝勒に命じ、門前に下馬榜を立てしめ、軍功を分叙し、封賜差あり。元年五月、希福に命じて、內弘文院大學士となし、范文程・鮑承先を內秘書院大學士となし、剛林を內國史院大學士となし、八月官を遣して孔子を祭らしむ。

朝鮮を征す

第三十五章　太宗の紹述（下）

朝鮮和好を破りしは、太宗が漠南蒙古と兵を構ふるに乘じ、明と通じて、遼東を夾擊せむと欲して然るなり。太宗將に朝鮮を親征せむと欲し、先づ明を伐つて其援を挫く。この年秋、武英郡王阿濟格等に命じ、路を分つて、獨石口を踰えて居庸に入らしめ、昌平に克ち、燕京に偪り、保定を過ぎ、十二城に克ち、五十六戰して皆捷ち人畜十有八萬を俘す。明の兵部尚書張鳳翼・宣大總督梁廷棟、皆兵を按じて、敢て戰はず、清兵引いて還る。

二年春、太宗遂に朝鮮を親征して、之を降す。これより先、將に諸島を伐たむとし兵船を朝鮮に徵す、使、その國に至り、三日乃ち見る。朝鮮の憲文王曰く、明國は猶ほ吾が父のごときなり、人の吾が父の國を攻むるを助くる可ならむや、と。これより漸く成約を偷む。毛文龍所部の將孔有德・耿仲明・尚可喜・舟師二萬人を以て來り降るに及び、糧を朝鮮に徵す。曰く、爾の國、明を視ること猶ほ父のごとく、十たび其粟を輸す、我今すでに兄たり、ひとり與かる一次すべからざるか、と。憲文王從はず。すでにして、復た京畿等三道に十二城を築き、義州互市の約に負く。崇德改元の時、朝鮮の使李廓等、來つて朝賀せしも拜せず、書を賜うて質子を送らしめしも、復た報ぜず。この時、清室すでに蒙古を臣とし、明軍を破り、內顧の憂なし。崇德元年十一月親征し、檄を朝鮮に馳せ、その敗盟の罪を討ち、鄭親王濟爾哈に命じて、居守せしめ武英郡王阿濟格等に命じて、分つて遼河の海口に屯し、以て明に備へしめ、睿親王多爾袞・肅親王豪格に命じ、長山口に入り、豫親王多鐸等に命じて、先鋒千有五百を統べて、徑に國都を擣き、岳託等をして、兵三千を以て、之に繼がしめ、而して、太宗親ら代善等諸軍を率ゐて進發し、兵ともに十萬、進んで臨津江に次す。江は國都の北に在り、都南の漢江と、王城を夾拱するものなり。時に江氷未だ合せず、車駕の將に

至らむとするに及び、氷驟かに堅く、六師畢く濟る。而して、豫親王の前鋒馬福等、三百騎を以て、潛かに王京を襲ふ。憲文王、倉黄使を遣し、迎へて城外に勞し、兵を欺し而して、妻子を江華島に徙し、自ら親兵を率ゐて、江を踰えて南漢城を保つ。皆その門の天險なり。清軍その都城に入り、豫親王及び岳託、亦た平壤を定めて、王京に抵り、軍を合して、江を渡り、南漢山城を圍み使を遣し、勅を賚し、往いて朝鮮を責めしむ。はじめ、憲文王、使を遣して、急を明に告げ、幷せて國中の諸道に檄して、勤王せしめ、固守して外援を待たむと欲す。時に明國方に流寇に急にして、鄰を恤れむに暇あらず。登萊總兵陳洪範、舟師海に出で、風を守りて敢て渡らず。國中東南諸道の援兵、相繼いで奔潰し、西北の援兵は、峽内に逗撓して、進まず。城中食盡きむとす。我が軍四路、並に出で、諸道を分略すること、震霆烈焰の如し。憲文王、再び上書して、成を請ふ。太宗勅を降して切責し、城を出でゝ親覲せしめ、幷に倡議して、盟を敗りし人を縛獻せしむ。憲文王、はじめて書を奏して臣と稱し、出城を免るさむことを請ふ。適ま、その妻子及び大臣の家口、江華島に在りしもの、睿親王、島城に入つて、之を獲皆別室に客とす。憲文王、乃ち倡議盟を敗りし宏文館校理尹集修撰吳達濟及び臺諫洪翼漢を獻出す。太宗敕して、明の給せしところの誥命冊印を納れしめ、二子を質とし、正朔を奉じ、歲時に貢獻表賀すること、一に明室の舊制の如くし、征伐調兵あれば扈從し、擅に城垣を築くことなからしめ、擅に逃人を收むることなからしむ。憲文王李倧、頓首して命を受け、二月城を出でゝ地に伏し、罪を請ふ。詔を宣べて之を赦し、この月、振旅して西す。倧及び諸子群臣、跪いて十里の外に送り、朝鮮の臣民、三田渡壇下太宗駐蹕の處に碑を樹てゝ、德を頌す。

その四月、質子淫、淏、清廷に至る。後七年を經、世祖の順治元年、中原を平定するに及び、清廷質子を歸へす。これより、清韓の關係は、重大の變更を生ずることなく、羈屬舊の如く、以て最近我が明治二十七八年の戰役に及べり。

崇德三年九月、清の太宗、睿親王多爾袞、克勒郡王岳託等に命じて、兩路明を伐たしむ。勅遼總督吳阿衡、酒に醍して備を設けず、因つて敗死し、大兵遂に青山關に及び兩翼の兵、通州に會し、涿に至り、八道に分れ、一は山に沿ひ、一は運河に沿ひ、その間六道、並び進む。畿輔の城を下すこと四十八、前大學士高陽、孫承宗、一門節に殉し

盧象昇の戰死

て死し、山東の州縣下るもの、十有六。布政使張秉文等、之に死す。明主、盧象昇に詔し、兵を督して、勤王せしむ。象昇、兵部尚書楊嗣昌と合はざるを以て、兵二萬を領するに過ぎず、又陳新甲に其半を分つ。象昇、涿州より保定に進み、大に慶都に戰ひ、互に殺傷あり。進んで銀鹿に至るや、所部の兵、又潰ゆること半、五千の卒を以て、清兵數萬に遇ひ、圍まること三重。中官高起潛、關寧の重兵を擁し、相去ること五十里、遂に救はず。象昇血戰兩日、礮盡き、矢竭き、猶ほ十數人を手格して死す。清兵、大名等を蹂躪して、山東に至り、臨清州に運河を渡り、濟南を破り、懷王由樞を執らへ、凡そ城に克つこと五十、城を降すこと八、人口を俘にする四十六萬、白銀百餘萬兩を得たり。明年二月、清兵還つて天津衛に至り、運河の水漲るに値ひ、輜重綿亘、渡り難し。或はその飽いて歸るに乘じて、半ば濟るを擊てといふものあり。明の諸將相顧みて、敢て動かず。數日はじめて渡り畢つて、北に歸る。太宗親ら錦州を圍み、書を祖大壽に與へて降を勸め、明兵を牽制し、多爾袞等をして、退き易からしむ。四年四月、諸軍皆凱旋す。

太宗以爲へらく、大軍屢ば塞に入りて、明の尺寸の地を得ざるは、皆山海關の阻隔するに由る而して關を取らむと欲する、先づ關外の四城を取るに非ざれば、不可なり、と。六年、睿親王多爾袞・肅親王豪格等に命じて、錦州を攻め、必ず克つを以て期となす。多爾袞等、城を離るゝ三十里にして營し、又私に甲士を遣し、更番家に歸らしめ、敵の芻糧樵采、出入忌むなきを致す。太宗震怒詰責し、鄭親王濟爾哈朗に命じ、往いて代らしむ。城に偪つて、長圍を築いて、之を困しめ、幷に松山援師の路を扼す。錦州急を告ぐ。五月、明の薊遼總督洪承疇・巡撫邱民仰、王樸・唐通・曹變蛟・吳三桂・白廣恩・馬科・王廷臣・楊國柱、八總兵を率ゐて、軍十三萬、馬四萬、寧遠に集り、芻糧一年を支ふ。すでにして、兵部尚書陳新甲、師久しく餉匱しきを以て、職方司郎中張若麒を遣し、軍に赴き戰を趣かしむ。承疇等、敢て堅く前議を持せず、糧芻を寧遠杏山及び塔山外の筆架岡に留め、兵六萬を以て、先づ進み、諸軍之に繼ぎ、騎兵松山の三面を環り、步兵は城北乳峰の間に據り、兩山の間に七營を列ね、衛るに長濠を以てす。八月太宗之を聞き、親ら大軍を統べて、赴き援け、晝夜兼程六日にして、至り、山より海に至るまで、壘を大路に横へ、その杏山の餉を斷ち、幷せて軍を分つて、その塔山護餉の兵を敗り、遂に筆架岡の積粟を獲たり。明兵、すでに餉道を失ひ、また敢て野戰

松山明平の大敗

せず。遂にその歩兵七營を徹し、松山城に背いて陣し、夜、屢ば營を突いて利あらず太宗、明年寧遠より松山に至り、賚すところの行糧、五六日に過ぎず、勢必ず走るを知り、乃ち夜諸軍を布いて、塔山・杏山・小凌河の諸要隘に潜伏せしめ、その去路を邀へ、又兵を益して筆架岡の糧を守らしめ、而して、親ら大軍を督し、横列して待つ。次夜初更、吳三桂等六總兵、更番殿後、陣を嚴にして迭に退く。而して、王樸の所部、先づ遁れ、諸軍復た行列なく、爭つて、杏山に走る。我が追兵、その後を躡み、伏兵その前を邀ふ。明兵山に彌り、野に亘り、且つ戰ひ、且つ走り、六總兵、皆潰えて杏山に入り、曹變蛟、亦た兵を撤して、松山城に入り、洪承疇、邱民仰・王廷臣と困守し、圍を突くこと、五六次、皆遂げず。變蛟、又直に御營を突き、創に中つて遁れ還る。太宗又明の杏山の兵、必ず寧遠に奔るを料り、復た精兵を遣し、二伏を設けて、杏山の軍出づるを俟ち、險を扼して掩殺す。王樸・吳三桂等、身を以て僅に免る。張若麒、漁舟に匿れ、海道より遁れ還る。先後敵兵を殲する、五萬三千七百八十餘、杏山より南塔山に至るまで、死傷狼籍、海中の浮屍、鴈鶩の如し。清軍昏夜中、わづかに十人を傷くのみ、こゝに於て、松山城中、餉援皆絶ゆ、清軍復た外圍を堀つて之を困しむ、九月、盛京に還る。

祖可法の建策

七年二月松山の副將夏承德、密に質を送つて內應をなす。我が軍、城に入つて、洪承疇・祖大樂等を擒にして、盛京に送る。邱民仰・曹變蛟・王廷臣等、戰死す。祖大樂を縱つて錦州に還らしむ。錦州圍まるゝこと一載、松山の失するを聞いて、亦た降る。清兵旋つて塔山・杏山に克つ。こゝに於て、明國大に震ふ。莊烈帝、籤を奉先殿に祈り、はじめて和議を決し、官を遣して、錦州に至らしむ。賚すところは、敕諭といへども、兵部尚書陳新甲の詞にして、國書に非ず。故を以て、太宗報ぜず。明復た兵部員外郎馬紹愉・副將周維城及び僧性容等を遣し、寧遠に赴いて前議を申せしむ。五月盛京に至りて、召し見、宴餞禮の如く、明主に書を報ず。時に明主尚ほ和を諱み、惟だ陳新甲と之を密議するのみ。こゝに及びて、語泄れ、外廷交章して劾奏し、新甲譴を獲たり。和議遂に絶ゆ。明は流寇、未だ起らざる以前、止だ守を議するを可とし、而かも、必ずその職を貢む流寇大に熾なる以後、并に守る能はず、而して、清朝尚ほ和を望む。漢軍副都統祖可法言ふ、講和の事は明に利あるも、しかも、我に利あらず、明をして陰に戰備を修むるを得せしめ、而して、我が國、反つて逸を習ひ、勞を忘る。もし明の地

の廣く民の衆きを以て疑となさば、流寇四に起つて、中原すでに敵國とならむ。但だその通津の餉運、西山の煤路を斷てば、燕京立どころに困まむ。先づ山海關を取れば、關外の諸城、手に唾して取るべし、これ心を攻め吭を扼するの法なり、と。十月復た貝勒阿世泰に命じて、明を伐たしめ、左翼の軍、界山より邊牆を毀つて入り、右翼の兵は、鴈門關・黃崖口より入り薊州に會し、直に山東兗州に至つて還り、府に克つこと三、縣六十七、魯王を走らし、人民三十六萬九千口、牲畜五十五萬有奇を俘にし、金銀珠綴、之に稱ふ。大兵去冬、邊に入り、數月以來、兵甲を釋かず、馬鞍を解かず、乃ち八年三月を以て、はじめて、莒州に入り、士馬を休ましむ。時に春草山に被り、鞍を解いて脫牧す。南北驛路、我が軍の一騎に過はず、或は安りにすでに塞を出づと傳ふ。四月に及び、大兵反つて南より來り、天津より起りて、涿鹿に至り、車駝三百餘里に亘り、蘆溝橋を渡り、畿甸にして未だ畢らず、時に明の勤王の四鎭劉澤清・唐通・周遇吉・黃得功、勁兵猛將、皆通州に集る。督師大學士周延儒、敢て一たびも邀遏を議するなく、惟だ終日城を閉ぢて捷を報ず。大軍すでに險を度つて、將に邊に出でむとするに及び、唐通・白廣恩等はじめて兵を合して、密雲螺山に拒いて、潰え還る。而して、山海關內、並に二總督を建て、又た昌平・保定の二總督を置き、千里の內、督臣四あり。又寧遠・永平・順天・密雲・天津・保定の六巡撫、寧遠・山海・中脇・西脇・昌平・通州・天津・保定の八總兵あり。星羅基布、事權一ならず、又監督太監あり、重兵を握つて、之を牽制す。

明室の窘困

こゝに至りて、薊遼總督趙光抃・關外督師范志完・大學士督師周延儒、先後誅死す。萬曆より後、歲に遼餉六百六十萬を徵す。崇禎中、復た剿餉二百八十萬、練餉七百三十萬を加へ、先後ともに賦を增すこと、千有六百七十萬、天下兵餉の大半を竭くして關東を事とし、而して、中原盜賊蜂起、或は百萬、或は數十萬、至るところ、城を破り、藩を陷れ、東西交鬪、明の諸臣、流寇に于いては、多く撫を議し、清室に于いては、反つて和を諱み、又戰守するを圖らず。盈廷蜩螗、たゞ煩擾するのみ。清の諸王將帥、爭つて直に燕京を取らむことを請ふ、而して、太宗尙ほ之を早しとすること又久しく、以て天時を待つ。

太宗の崩殂

崇德八年八月、庚午の夜、太宗疾なく、南榻に坐して崩ず。壽五十有二。昭陵に葬り應天興德彰武寬溫仁聖睿孝文皇帝といひ、廟を太宗といふ。太宗學問を奬勵し、諸大臣の子弟八歲以上をして、皆書を讀ましめ、又金の世宗の事に感ずるあり、舊制

を存して、騎射を廢せず。幼にして聰慧、秉性寛弘、仁慈和惠、殺さずして威あり、善く人を養ひ、各國新附の人未だ馴服せざるあれば、精を勵して治を圖り、紹述の業、全く成る。第九子福臨立つ、これを世祖章皇帝となす。

第三十六章　明の滅亡（上）

清兵南下、諸將召し還されて、邊塞の防守に從事するや、流賊再び勢を得て、その熾なること舊日に倍せむとす。はじめ、張獻忠の穀城に反するや、李自成、亦た出て、餘衆を收め、往いて、之に依る。崇禎十二年八月、詔して、熊文燦を逮して論死し、左良玉、大將の才あるを以て、平賊將軍に拜して、賊を討つ。獻忠、屢ば興安に敗れ、撫を求むれども許さず。その黨、多く來り歸し、軍聲頗る振ふ。十三年二月、良玉大に獻忠を太平に敗り、賊渠十六人を斬る。その翌年正月、獻忠、羅汝才と合し、明軍を襲州に敗るに及び、賊勢大に張り、轉戰して、蜀中に入り、成都を越えて、瀘州を陷れ、巴州に入る。明軍追うて之を黄陵城に擊つや、賊密に精卒を遣し、箐谷中を行き、高きに乘じて、馳せ下る。良玉の軍、先づ潰え、參將劉士傑等戰死す。賊遂に席捲して、東、四川を

張獻忠再び叛す

出づ。二月、獻忠襄陽の備なきを偵ひ、自ら輕騎を率ゐ、一日夜馳すること三百里、將吏を殺し、軍符を奪ひ、給いて襄陽城に入り、夜半、中より起つて火を縱ち、城陷る。賊、襄王翊銘を縛して至り、酒を屬して曰く、吾、王の頭を借り、楊嗣昌をして、藩に陷るを以て法に伏せしめむとす、と。遂に貴陽王常法と同じく害に遇ふ。參議張克儉、遊擊黎民安等、之に死す。はじめ嗣昌、左良玉とともに師を督して、賊を討ち、熊文燦の故智を踵襲し、專ら招撫を主とす。賊勢益す張り、收拾すべからざるや、遂に兩親藩を喪ふに至る。時に嗣昌獨より師を旋して、荆州沙市に至り、城陷り、二王難に殉すと聞き、憂懼の餘、食はずして死す。八月に及び、獻忠、襄陽を棄て、樊城・當陽の諸州縣を連陷す。左良玉、南陽の間道より兵を進めて、大に之を信陽に敗り、その衆數萬を降す。獻忠重創を被り、東に遁る。時に羅汝才、すでに李自成に合す。自成河洛に踞して、衆五十萬あり、獻忠衆散じ且さに盡きむとするや、走つて、自成に依る。自成、之を殺さむと欲す。羅汝才、曰く、之を留めて、漢南を援し、官兵の力を分たしむるに如かず、と。乃ち給するに五百騎を以てし、遁れ去らしむ。獻忠東に馳せて、霍山に入る。その翌十五年五月に及び、獻忠復た出て、舒城を攻めて、之に據り、廬州六安等の諸州

李自成開封を陷る

縣を連陷し、南京大に震ふ。詔して、鳳陽總督高斗光を逮し、宣府巡撫馬士英を起して、廬鳳軍務を總督せしむ。

李自成、はじめ張獻忠に依りしが、すでに分れ、十四年正月、郟陽より洛陽を攻めて之を陷れ、福王常洵を殺す。これより先、援兵の洛を過ぐるもの、喧言して云ふ、先帝天下を困しめて王を肥す、今王府の金錢山積し、乃ち吾輩をして、枵腹して賊に死せしむと。尚書呂維祺、王に勸めて、財を散じて、士を餉せしむ。從はず。こゝに至りて、官軍賊を引いて城を陷る。維祺執らへられ、屈せずして死す。賊、王を殺し、其血を勺し、鹿肉に雜へて食し、福祿酒といふ。すでにして、王府を火し、金を散じて、饑民に賑はす。その十一月に至り、河南を敗りて、勢の大なるに乘じ、兵を移して、南陽を陷れ、唐王聿鍵を殺す。總兵官猛如虎、之に死す。賊再び開封を圍む。開封は、即ち宋の汴京にして、中土の要地なり。明主、左良玉に命じて、赴き援けしむ。良玉賊の盛なるを見、一夕營を拔いて襄陽に走り、諸軍悉く潰ゆ。巡撫高名衡、朱家寨口より河を決して賊を灌せむことを議す。賊偵して之を知り、遂に營を高阜に移し、難民數萬を驅りて、河を決す。河水北門より入り、東南門を貫いて出て、奔聲雷の如く、城中の百萬

李自成の僭號

戶皆蕩盡す。賊乃ち營を拔いて去る。明主、孫傳庭に詔して關中より往いて、之を援けしむ。至れば、開封すでに陷り、反つて賊の爲に破られ、走つて關に入る。時に河南郡邑、殘破せざるなく、朝廷復た官を設けず、遺黎多く寨を結んで、自ら保ち、或は賊に降り、或は朝命を受くるも、復た互に相呑併し、中原の禍亂、こゝに於て極まれりとなす。明年夏、明主乃ち詔を下して租を蠲き、罪を赦せしも、すでに復た爲すべからず。

こゝに於て、自成群賊を併合し、連營五百里、再び南陽を屠り、進んで、汝寧を攻む。總兵虎大威、礮に中つて死す。自成はじめ遠圖なく、得るところの城邑、輒ち焚燬して、棄て去る。こゝに至りて、衆百萬あり、はじめて侈然として、天下與に爭ふものなしとなし、名號を擅にせむことを思ひ、十六年正月、遂に承天を犯し、獻陵を焚き、傍近の州縣を下し、自ら順天倡義大元帥と稱し、羅汝才を稱して代天撫民威德大將軍となす。はじめ自成善く戰ひ、二人相須つこと左右の手の如し。こゝに及びて、自成兵强く、士附き、專制の心あり、汝才を忌んで、遂に之を殺し、悉く其衆を幷せ、荆襄を以て、根本となさむことを謀り、襄陽を改めて襄京といひ、襄王の

宮殿を修めて、之に居り、新順王と僭號し、又牛金星の言を以て、官爵名號を剏設し、五營二十二將、上相左輔右弼の六政府を置き、要地には防禦使を設け、府には尹といひ、州には牧といひ、縣には令といひ、さきに脅して軍に從はしめし崇王由榔等ともに伯に封じ、官吏降るもの並に僞職を授く。

張獻忠の僭號

左良玉、自成の東下せしを聞き、その鋭を避け、盡く湖廣の兵を撤す。こゝに於て張獻忠、その虛に乘じて、蘄黃武昌を重陷し、楚王華奎を執らへ、彼輿を以て、之を西湖に沈め、大に楚宗及び居人を殺し、浮屍江を蔽ひ、人脂累寸、魚鱉食ふべからず。獻忠遂に僭號し、武昌を改めて、天授府といひ、江夏を上江縣といひ、楚王の第に據り西王の寶を鑄り、尙書都督巡撫等の官を僞設し、科を開いて士を取り、楚邸の金を發して、饑民に賑はし、蘄黃等二十一州縣、悉く附く。

李自成、京師に向ふ

獻忠の僭號するや、李自成、書を貽つて之を責め、左良玉の師、復た西上す。こゝに於て、轉じて、湖南諸郡を陷れ、良玉、遂に武昌を復す。獻忠乃ち荆州より四川に趨く崇禎十七年正月、自成僭して王と稱し、名を自晟と改め、國を順と號し、永昌と改元し、その曾祖以下を追尊して、謚號を加へ、六政府尙書を增設し、弘文館以下の等官を設け、五等爵を復し、大に功臣を封ず。明主之を聞いて、大に驚く。李建泰、自ら請うて師を督し、賊を討つ。その二月、太原を陷れ、晉王求桂を執らへ、別に將を遣して畿南を犯し、眞定を陷る。明主詔を下して、己を罪し、帑金五千を發し、守具を修め、天下に詔して、勤王せしむ。左都御史李邦華、南遷及び太子の撫軍を請ふ、皆報ぜず。賊勢愈よ急なるや、復た內臣高起潛・杜勳等を遣し、邊鎭及び近畿の要害を分監せしむ。

周遇吉の殉節

これより先、薊遼總督王永吉、寧遠總兵吳三桂を關門に移し、士卒を選びて京師に策應せむことを請ふ。學士陳演等、持して可かず。賊逼るや、帝、計を決して、之を行ふ。而して、軍猝かに至る能はず。時に總兵官周遇吉、寧武關を守る。李自成、之に薄るや、遇吉大礮を發して、賊萬人を殺し、伏を城中に設け、賊を誘うて入れ、復た數千人を殺す。城毀つて復た完きもの再たび、自成力を悉くし、攻めて之を破る。遇吉馬厥いて、執らへられ、賊を罵つて死す。妻劉氏、婦女を率ゐ、屋に登つて賊を射る。自成火を縱つて之を焚き、闔家皆死す。城中の士民、降るものなし。自成衆に謂つて曰く、こゝを去つて、大同・陽和・宣府・居庸を經、皆重兵あり、もし盡く寧武の如くなれば、奈何

如かず且らく還つて再舉を俟たむにはと。すでにして、大同總兵姜瓖、宣府總兵王承允の降表、相繼いで至る。自成大に喜び、遂に長驅して東し、大同に至るや、代王傳燔を殺し、巡撫衛景瓊、自ら縊つて死す。宣府に至るや、杜勳・蟒玉鳴、郊迎三十里、巡撫朱之馮、縊死して節に殉す。時に李建泰、保定より上疏して、南遷せむことを請ふ。明主、廷臣を平臺に召し、諭して曰く、國君は社稷に殉す、朕將た焉くにか往かむと。

崇禎十七年三月、李自成、居庸關を犯す。守將唐通・大監杜之秩、關を以て降る。賊遂に關に入り、昌平を陷れ、十二陵を焚く。總兵官李守燦、力戰して死す。すでにして、賊騎闕に及び、九門を環攻す。門外さきに三大營を設く、賊至るや、悉く降り、陣を守るもの寥々たり。十八日、自成座を彰義城外に設く。降賊大監杜勳、城に縋して上り、内に入つて、盛に賊勢を稱し、帝に請うて、自ら計を爲さしむ。帝怒つて、之を叱す。杜勳出て、顧みて謂つて曰く、吾輩富貴固より在り、と。日晡に及び、太監曹化醇門を開いて降る。賊盡く入る。明主宮を出て、煤山に登り、烽火天に徹するを望み見、嘆息して曰く、我が民を苦しむのみ、と。徘徊之に久うして、宮に還り、命じて太子永定二王を周奎・田宏遇の第に分送せしめ、劍を以て、長平公主を斫り、嘆じて曰く、汝、何が故に

莊烈帝の崩殂

我が家に生る、と。皇后を趣して、自盡せしむ。后即ち旨を承けて、自經す。又妃嬪數人を斫殺す。翌十九日昧爽、内城亦た陷るや、鐘を鳴らして百官を集むるに、至るものなし。帝乃ち復た煤山に登り、衣襟に書し、遺詔を爲つて曰く、朕涼德、藐躬、上干天咎、致逆賊直逼京師、皆諸臣誤朕、朕死無面目見祖宗、自去冠冕、以髮覆面、任賊分裂、無傷百姓一人、と。遂に帛を以て、山亭に縊つて崩ず。太監王承恩、側に縊る。李自成、氈笠・縹衣・烏駁馬に乘じて、承天門に入り、僞丞相牛金星・尚書宋企郊等、騎して從ひ、皇極殿に下り、御座に據り、令を下して、大に帝后を索め、百官を期して、三日朝見せしむ。すでにして、帝后の崩ぜしを知り、自成命じて宮扉を以て、戟せて出て、柳棺に盛り、東華門外に置く。百姓過ぐるもの、皆掩泣す。時に群臣難に殉するもの、范景文・倪元璐・施邦曜・凌義渠・王家彥・孟兆祥・馮世奇・劉理順・吳麟徵・周鳳翔・王偉・吳甘來・王章・陳良謨・陳純德・趙譔・巡許直・成德・金鉉・于騰蛟・姚成・宋天顯・李邦華・縣之所・阮文貴・張應選・張世禧・李國楨・劉文炳・鞏永固・張慶臻・術時春・王國興・李若珪・高文采・陳貞達・毛維張・劉忠嗣・金毓峒・李守錄・蔡懋德・盛應時・徐有聲・李若英の輩數十人。越えて三日、昧爽、成國公朱純臣・大學士魏藻德・陳演等、百官を率ゐて、入つて賀し、演、首に勸進す。自成許さず、大

に官制を改め、朝官を召見し、大僚多く國を誤るを以て、概ね之を囚繫し、庶官は或は用ひ、或は否らず。純臣・藻・德演及び諸勳戚大臣等を繫いて、悉く劉宗敏の營に付し、拷掠して、賕賂を求め、肉を灼き脛を折るに至り、諸の慘毒を備へ、金足れば輒ち之を殺す。この時、畿內の府州縣、ともに降り、山東河南、亦た多く附く。自成眞に天命を得たりとなし、登極議を撰せしめ、吉日を諏ふ。自成座に升るに及び、忽ち神人あり、之を擊つものゝ如く、座下の龍の爪甃、ともに動く、自成恐れ、亟かに下る。金璽及び永昌錢を鑄る。皆就らず。すでにして、山海關吳三桂の兵起るを聞くや、益す大に沮喪して、西安に歸らむことを謀る。

吳三桂清に降り賊を擊つ

はじめ、吳三桂、詔を奉じて、入つて援け、寧遠の兵五十萬の衆を移して、西し、日に行くこと數十里、十六日、關に入り、二十日、豐潤に至る。京師すでに陷るを聞き、猶豫して進まず。自成その父襄を執らへ、書を作つて之を招かしむ。三桂降らむと欲して、灤州に至り、愛姬陳沅が劉宗敏に掠め去られしを聞き、憤ること甚しく、疾く山海關に歸り、襄うて賊將を破り、書を致して父と絕つ。自成怒り、賊十餘萬を部し、吳

襄を軍に執らへ、東、山海關を攻め、別將を以て、一片石より關外に越えしむ。これより先、清の世祖、攝政睿親王に命じて、奉命大將軍となし、師を率ゐて、關外の地を收め、並に中原を經略せしむ。こゝに於て、三桂使を遣し、降を納れ、師を乞うて、賊を討つ。睿親王、報書し、即日、兵を進め、遂に寧遠を踰えて、沙河に次す。山海關外を距ること十里、時に李自成、自ら精兵三十萬を將ゐて、東、三桂を擊ち、白廣恩をして、二萬騎を率ゐて、繞つて關外に出で、三桂を夾擊せしむ。三桂先づ礮を以て、關外の賊を轟開し、自ら五萬騎を將ゐて、礮路より突出し、攝政王に謁し、軍中に即いて、薙髮盟誓す。三桂の衙を進めて、西平王となす。英王阿濟格、豫王多鐸、各萬騎、東西水關より、道を分つて入り、而して自ら大兵を以て繼いて進み、賊鋒を關外に敗る。王、乃ち三桂の兵に命じ、白布を繫いで識となし、之をして先驅せしむ。四月二十二日、三桂關を開いて出でゝ擊ち、賊を嘗み、殺傷相當る。翌日大戰、賊衆北山より橫亘して、海に至る。我が兩軍、賊に對して陣し、三桂の軍、その右に軍し、清軍その左に軍し、尙ほ未だ賊陣の半に及ばず。王、賊衆多く戰陣を經、殊に慓悍輕んずべからざるを以て、乃ち三桂に命じて、先づ戰つて、その中堅を衝かしめ、清軍兵士鱗次布列、銳を蓄へて待

山海關の大戰

ち、その氣の衰ふに乘じて、之を奮擊せしめ、且つ戒めて伍を越えて躁進し、節度に違ふことなからしむ。この日、自成は明の太子諸王を平山に挾み、攝政王は英豫二王子を東山に率ゐ、各馬を立てゝ戰を觀る。洪承疇・祖大壽・孔有德・尙可喜、畢く從ふ。賊、兩翼を張つて、三桂を圍むこと數重、三桂の軍、人々血戰、衝盪數十合、萬馬奔騰、飛矢雨墮、呼聲海嶠に震ふ。午に及びて、天大風、塵沙山起、怒ること雷鳴の如く、賊を擊つこと雹の如し。我が軍大呼するもの三たび、風止むや、英豫二王、鐵騎二萬を率ゐ、横より躍つて陣に入り、向ふところ、札を洞して摧陷す。俄にして塵開く。賊、甲して辮髮するを見、驚いて曰く、滿洲の兵なり、と。陣遂に動く。自成麾蓋、先づ走り、賊衆之を望んで、遂に土崩し、自ら相踐蹈して、死者算なく、僵屍野に遍ねく、溝水盡く赤し。北ぐるを逐ふこと四十里、賊數萬を斬り、令を關內に下して、兵民皆薙髮せしめ、三桂に命じて、前驅して賊を追はしむ。自成奔つて、永平に至り、降臣王則堯・張若麒をして、三桂の軍に詣つて和を議せしめ、僞つて、太子を還へす。眞に非ざるなり。三桂益す兵を進む。自成、吳襄を殺し、走つて、京師に還り、乃ち悉く拷索せしところの金及び宮中の帑藏器皿を鎔して、餅となし、每餅千金、約數萬餅、騾車載せて西安に還らしめ、二十九日、帝號を武英殿に僭し、七代を追尊して、皆帝后となし、妻高氏を立てゝ皇后となす。自成冠冕を被り、列仗して朝を受け、金星代つて郊天の禮を行ひ、この夕、宮殿及び九門城樓を焚き、詰旦、太子二王を挾んで西走し、而して、僞將軍左光先・谷可成をして後衛たらしむ。

燕京の遷都

攝政王、三桂及び英豫二王に檄して、衆程賊を追はしめ、京に入るなからしむ。五月朔、蘆溝を渡り、次日賊に擬都に及ぶ。賊盡くその輜重を盡して、先行せしめ、精兵を以て拒戰し、死を誓つて勝負を決す。忽にして、復た狂風沙を簸し、天地を晦うし、旌旗皆折れ、人馬倒に退く。我が軍、風に乘じて、奮擊し、復た大に之を敗る。賊山西に走り、師を班す。攝政王、五月朔、燕京に入り、捷を盛京に奏し、朝鮮蒙古に頒示す。時に百姓山谷に竄匿せしもの、悉く鄕里に還つて迎降し、後るゝを恐る。王兵を整へて、京城に入るや、故の明の諸臣、五里外に迎ふ。令を下して、百姓を安輯し、民間安堵、故の如くし、命じて、禮を以て崇禎帝后を改葬し、碑亭殿廡を建つる、悉く典制の如くし、並に帝妃袁氏兩公主及び熹宗の后張氏・神宗の妃劉氏を葬ること、禮の如くし臣民をして、服喪三日ならしめ、尋いて議し、謚を加へて、莊烈愍皇帝といひ、陵を思

陵といふ。十日ならずして、事を竣る。王、示を京城に出し、官民をして、服を除いて頭を剃らしめ、衣冠悉く清の制に從はしむ。この年九月、車駕盛京を發し、十月朔、都を燕京に定め、天地社稷に祭告して、皇帝の位に即き、詔を中外に頒つて大赦し、時憲書を頒つ。

福王の即位

第三十七章　明の滅亡(中)

はじめ、攝政王の燕京に入るや、京北京東の諸府、皆降りしも、惟だ京南、保定・大名・眞定等の府は、潰賊土寇、蜂起するあり、而して、山東・河南は、自成の敗竄を聞いて、諸州縣、並にその僞防禦使收令を殺して、復た明の爲にす。福王常洵の子由崧、賊を避けて、舟淮安に次す、南京府の部科道等の官、會議推戴して、賊を討たむとし、遂に立てゝ帝となし、宏光と改元し、先帝を謚して毅宗烈皇帝といひ、周皇后を孝節皇后といひ、兵部尚書史可法・戶部尚書高弘圖・鳳陽總督馬士英等を召し、閣に入つて、事を辨ぜしめ、その他、官を進むること差あり。可法請うて師を江北に督し、士英專ら國に當る。攝政王、肅親王豪格を遣して、往いて、山東河南を定めしめ、都統葉臣等を

李自成の死

して、往いて、山西を定めしめ、又書を明の督師史可法に致す。可法報書して屈せず。福王亦た其臣左懋第を遣し、書幣を具し、米十萬石、銀五萬兩を具して、吳三桂の軍を犒はしむ。並に之を却く。

世祖の燕京に入るや、諸官を任じて、封賜差あり、又諸王以下の俸祿を定め、尋いで、盡く明季加派稅餉廠衛の弊政を除き、その文武の衣冠は、しばらく明制に從ひ、吳三桂に平西王の敕印を授け、大舉して流賊を討たむことを議し、その關を阻して固守せむことを恐れ、又その西して甘肅に竄せむことを恐れ、乃ち英親王阿濟格を以て、靖遠大將軍として、三桂・尙可喜等とともに、大同邊外より、諸蒙古を會して榆林・延安に赴き、陝西の背に出て、又豫親王多鐸を以て、定國大將軍となし、孔有德等を率ゐて河南より潼關を夾攻せしめ、約して、西安に會す。この冬、葉臣等、固關より出で、至るところ、迎降し、山西悉く平らぐ、尋いで、眞定・大名、山寨の寇を削平し、畿南はじめて定る、肅親王、軍を濟南に駐め、又滿家洞の賊を平らげ、山東の諸郡悉く官吏を置く。豫親王の軍は、十二月孟津を渡つてより、賊將張有聲を洛陽に走らし、陝州に進み、盡く關外の地を收む。李自成、兵を潼關に盛にし、その將劉宗敏をし

て、山に據つて陣を爲さしむ。その翌二年正月、清師大に至る。自成亦た關を出て、逆へ戰ふ。清軍の前鋒三千騎、中より出て、表裏夾攻、大に之を破り、遂に進んで潼關に偪る。この時、英王三桂邊外の軍すでに河を渡つて、西安の北に偪る。自成、腹背敵を受け、遂に關を棄て、遁れて西安に回り、關を守る。賊將馬世堯、降り、遂に潼關に克つ。自成宮室を焚き、武關を出でゝ、湖廣に走る。十八日、豫王、西安に至る。こゝに於て豫王に命じ、師を移して、江南を征せしめ、流賊を以て、英王及び三桂に附して、追剿せしむ。時に賊衆なほ三十餘萬あり。南京を取らむと聲言す。清兵水陸後を蹤み、賊を破るもの七、部衆多く降り、或は逃散す。自成延寧に走り、蒲圻より通城に至り、九宮山に竄し、二十騎を率ゐて山中に略食し、村民の困しむところとなり、自ら縊つて死す。或は曰く、泥淖中に陷り、村民之を擊ち、腦、鉏に中てられて死す、と。その餘衆なほ二十餘萬、明の湖廣總督何騰蛟に降る。英王盡く湖北を收め、閏六月を以て師を班へす。

張獻忠の死

張獻忠、さきに荆州より四州に入りしが、幾もなくして、成都を陷れ蜀王至澍を殺し、すでにして全蜀を有し、遂に僭號して大西國王といひ、大順元年と僞稱し、蜀王の府を治めて之に居り、丞相尚書五軍都督等の官を設け、諸僞將を遣し、分つて、各府州縣を居らしめ、將卒人を殺すの多少を以て功を叙し、ともに男女六萬を殺す。曾て諸郡の義兵、並び起るや、獻忠憤怒、誅殺益す毒、川中人跡殆んど絶え、列城の內、雜樹拱を成すといふ。自成亡ぶその翌順治三年、獻忠盡く成都の宮室を焚き、その城に鏇し、衆を率ゐて、川北に出て、又盡く川兵を殺さむとす、僞將劉進忠、川兵を率ゐ、一軍盡く逃る。時に清兵漢中に至る、進忠迎へ降り、乞うて嚮導となり、盩厔の界に至る。大霧の日、獻忠曉行、猝に大兵に遇ひ、矢に中つて馬より墜ち、積薪の下に蒲伏す、兵士擒へて、之を斬る。

馬士英の專恣

流賊すでに平らぎ、清室早く江北の大半を奄有し、明は僅に江南半壁の地を擁するのみ。その衝突、固より避け得ず。而して、攻守興廢の決するところ、亦た豫め知るべきのみ。

明の馬士英、內に在りて權を專にし、魏忠賢の餘黨阮大鋮を薦め、冠帶を賜うて陛見す。舉朝大に驚く。高弘圖、請うて九卿に下して會議し、呂大器・詹兆恒等、連疏し

て糾ぜども、聽かれず。大鉞召對、旨に稱ひ、竟に用ひられて、江防兵部侍郎となる。左都御史劉宗周・御史李模等、疏して、時事の弊を論ず。その辭痛切、或は士英の爲に尼められて上るを得ず、或は聞すと報ずるのみ。湖廣巡按御史黃澍・承天守備大監何志孔と入朝して、召對を求め、ともに士英の奸貪不法を糾し、淚、語とともに下る。士英病と稱して直を出て、金幣を以て、福邸の舊閣田成張・張執中等に餽る。兩閣帝に向つて訴ふ。帝默然、即ち諭留を賜ふ。澍連りに十疏を上つて、之を爭ふ。帝數ば諭して、澍を趨して、楚に赴いて去らしむ。尋いで、奉化の布衣方翼明・何光顯等、抗疏して士英等を誅せむことを請ふや、詔して市に戮し、その家を籍し、遠近爲に寃を訟ふ。時に朝廷舉措、人を失し、賞罰乖ふ。章正宸・陳子龍等、諫疏荐りに上れども、ともに聽かず。すでにして、災異疊見し、廟門又災を告ぐ。帝深く禁中に居り、惟だ幼女を漁し、火酒を飲み、伶官を雜へ、演戲して樂を爲し、興寧宮を起し、慈寧殿を建て、大工の繁費、宴樂の賞賜、皆節を以てせず、國用匱乏、搜括殆んど盡く。而して、士英益す國政を濁亂し、邊警日に偪れども、主知らず、小人時に乘じて利を射る、識者すでに旦夕に堪へざるを知る。

明の守備

順治二年三月、豫王南下の師、三道歸德府に會す。時に明將劉洪起・商應訓・李際遇、各兵四五萬を擁す。而して、洪起最も忠勇、屢ば流賊を殄す。御史陳潛夫、帝に請ひ、洪起に印を挂けて將軍となし、河の南北を號召せしむ。許さず。山東兵部職方主事凌駟、兵を募つて、臨清濟寧を復し、德州の諸王、謝陛の義旅と相應じ、山東を收緝し、好を南北に通ぜむことを請ひ、水師を設けて、青齊の義旅を授けしめむとす。馬士英、江北を以て、淮揚徐泗・鳳壽滁和の四鎭に分ち、劉澤清・高傑・劉良佐・黃得功を以て、之を轄し、遠略に遑なし。傑は舊と賊將、得功と善からず。士英又降將張臧彥をして、河南山東の軍務を總督せしめ、その姻姬越其烝をして、河南を巡撫せしめ、並に陳潛夫を召還し、諸將解體す。士英疏して稱す、清兵河北に屯すと雖も、賊勢尙ほ張り、後盛なき能はず、豈に遂に鞭を投じて渡を問はむや、强弱何の常かあらむ。赤壁の三萬、淝水の八千、一戰して、江左以て定る。況んや、國家全盛、兵力前に萬倍す。廓清底定、願ふ諸臣、之を刻厲せよ、と。

すでにして、清兵檄を傳へて濟寧に至り、山東之に降り、李建泰・謝陛・馮銓等、皆內

院大學士となる。清兵、夏鎮に至り、別に濟寧より南下し、又維陽より河を渡つて、海州を攻め、邳州を圍む。史可法、高傑、劉澤清等、各急を告ぐれども、應ぜず。許定國、高傑と隙あり、之を殺し、李際遇とともに、欵を清に入れ、河南の諸郡、風を望んで悉く下る。惟だ劉洪起、汝寧の間に力戰し、七月に及びて、破斬せらる。凡そ明の諸鎮の中、黄得功、最も忠勇、而して、左良玉と高傑と、兵最も强し。良玉は、何騰蛟、袁繼咸の用ふるところにして、高傑は史可法の用ふるところなり。馬士英、阮大鋮の事を用ひてより、左良玉は、黄得功の兵と西に興ぎ、高傑は、許定國の兵と北に興ぐ。清兵二道より並び進み、一は淮北に出て、一は淮南に出て、無人の境に入るが如し。その淮北に出てしものは、都統準塔、山東の兵にして、李成棟を降し、劉澤清の兵を敗り、通州泰州、皆降る。その淮南に出てしものは、豫王自ら之に將とし、歸德より泗州に趨いて、淮を渡る。明の督師大學士史可法、去冬より所部標兵三萬を勒し、河上に次し、高傑の聲援をなし、傑の死するに及び、復た其兵十餘萬を揚州に收撫す。こゝに至りて、督して、泗を援けむとす。中途に至りて、維揚急を告ぐ、時に左良玉の兵を起すあり、明主手詔してその入援を促す。

明の將相睦からず

左良玉兵を起す

史可法の戰死

左良玉、固より馬士英に憤ること甚し。こゝ年四月、兵を舉げて東に下り、疏を馳せて、士英が奸邪、國政を亂るを上言し、その七大罪を列ねて、之を誅せむことを請ひ、又檄を傳へて、その罪を聲らす。中外驚然たり。士英大に懼れ、京師戒嚴す。良玉の兵、九江、安慶より建德に至り、流に順つて下るや、黄得功、劉良佐を調して、鎮を離れしめ、劉孔昭、阮大鋮等を遣して、同じく之を禦がしめ、劉澤清、亦た勤王に托し、兵を率ゐて南行し、揚泗徐碭、勢、鼎沸に同じ。すでにして、良玉數日ならずして死し、その子夢庚、東下して采石に至り、黄、得功等の敗るところとなり、尋いて、清兵の信を聞いて引いて還るや、可法はじめて揚州に回る。

時に所部防河の兵、皆外に在り、可法之を檄すれども、大半至らず。はじめ、高傑の死するや、衆十餘萬、屬するところなし。可法代つて其軍を統べむとするや、馬士英之を忌んで、掣肘せしが故に、衆潰えて揚州一空。又これより先、泗を援くるの甲仗火藥粮餉數十萬、皆猝かに返すを得ず。こゝに於て、ひとり、總兵劉肇基等の兵二萬及び吏民を督し、陣を守つて、拒守す。豫王の大軍、四月五日、歸德を發し、十三日、泗州を下し、夜淮水を渡り、十八日、揚州を距る、二十里にして營す、大礮未だ至らざるや

劉肇基、その備へざるに乘じ、城に背いて、一戰せむことを請ふ。可法謂ふ、野戰は城に憑るに如かず、と。或は高堰を決して、清軍に灌せむことを請ふ。可法曰く、民を貧しとなし、社稷之に次ぐ。敵軍を傷くること少くして、淮揚先づ魚鼈たらむ、と。許さず。豫王書を貽つて、招降すること再四、可法應ぜず。拒守七晝夜、礮を發して、城外の軍數百を傷く。豫王怒り、精兵をして、大礮を以て、專ら城の西北隅を攻めしむ。崩聲雷の如く、陴を守つて退かず。遂に陷る。可法自刎、殊せず。參將擁して、小東門を出て、執らへらる。可法大呼して曰く、我は史督師なり、と。遂に殺さる。劉肇基所部四百人を率ゐて、巷戰し、力支えず、將士皆死す。その他、諸生及び婦女、節に死するもの、勝げて紀すべからず。時に二十五日なり。清兵留ること十日、之を屠つて南す。

福王執らへる

五月五日、清兵江に至り、水を隔てゝ相持すること三日、すでにして、江を渡り、遂に鎮江を陷れ、十五日、南京に至る。はじめ十日、福王命じて京師各城門を閉づ。晝晦くして大風猛雨、午後なほ內に入つて演戲せしめ、諸內臣と雜坐酣飲し、二鼓出奔して太平に赴く。五鼓、馬士英、太后を奉じ、黔兵を召し、護衛して浙に走る。清軍の至るや、諸臣留るもの皆降る。劉良佐、清軍に降り、豫王の命を奉じて、帝を追ひ、蕪湖に

至る。黃得功、奮鬪中り、劇甚しく、自刎して、節に死す。總兵田雄、福王及び其妃を縛し、出でゝ降り、江南悉く平らぐ。

浙西の平定

この間、英王上游に流寇を追ふの兵、亦た九江に至り、左良玉の子夢庚、兵十萬を以て英王に降り、督師袁繼咸、執らへられしが、屈せずして死す。英王兵を遣し、分つて荊州武昌を守らしめ、盡く湖南を收めて、師を班へす。六月豫王又大兵の半を分ち、貝勒博洛等をして、明の魯王常淸を杭州に追はしめ、淮王常淸を降し、又周王の家屬を湖州に取り、浙西亦た略ぼ定まる。豫王制を承け、南京を改めて、江南省となし、その郡邑、城を以て降りしものは、即ち守たらしめ、江寧安慶巡撫以下の官三百七十三人を奏授し、七月福王を俘にして凱旋す。

唐王の即位

この年閏六月、明の唐王聿鍵、帝を福建に稱す。聿鍵は、太祖の後なり。南陽に封ぜられて、唐王となる。はじめ、父天し、愛を祖に失し、兩叔嫡を奪ふを謀るを以て、未だ名を請ふを得ず。祖端王薨ずるに及び、守道陳奇瑜、知府王之柱、之が爲に請うて嗣とす。後兵を統べて勤王し、擅に南陽を離れしを以て、高墻に幽せられしが、赦に遇

薙髮の亂

うて出づ。性率直にして、詩書を喜び、手づから傳檄を草す。五月、清兵の江を渡るや、南陽守らず、總兵官鄭鴻逵・鄭彩、師を撤して閩に回り、唐王の河南より來るに會し、之を奉じてともに南し、福州に至り、福建巡撫張肯堂・巡按御史吳春枝・禮部尚書黃道周・南安伯鄭芝龍と會議し、之を立てゝ、監國王となす。鴻逵、位を正さむことを請ひ、然らざれば以て衆心を壓して後起を杜ぐなしといふ。芝龍、意別に在るあり、固く諍うて不可となす。數日ならずして、議を定めて帝位に即き、福州を改めて天興府となし、隆武と改元す。これを福建の師となす。潞王の杭州を以て降るや、明の故の兵部尚書張國維等、兵を起して、魯王を迎請して、監國たらしめ、兵を江上に列し、地を畫して戍守し、西清兵を上游に扼す。これを浙東の師となす。

この時に當り、清廷薙髮令を下し、蘇州巡撫王國賓・松江提督吳兆勝・吳淞總兵李成棟、皆降兵を以て、勢に乘じて騷虐す。こゝに於て、明の故の給事中陳子龍、故の總督沈猶龍・故の吏部主事夏允彝・水師提督黃蜚・吳志葵に約し、兵を松江に起し、兵部主事吳易・舉人孫兆奎、兵を吳江に起し、行人盧象觀、兵を宜興に起し、中書葛麟・主事王期昇、兵を太湖に起し、主事荊本徹・員外郎沈廷楊、兵を崇明に起し、副總兵王佐才、兵を崑山に起し、通政使侯峒曾・進士黃淳耀、兵を嘉定に起し、吏部尚書徐石麒・總兵陳梧、兵を嘉興に起し、典史閻應元・陳明遇、兵を江陰に起し、僉都御史金聲・僧邱祖德・尹民興・吳應麒、兵を徽州・寧國に起し、並に表を唐王に通じ、遙にその拜除を受け、或は近く魯王の節制を受け、竿を揭げ、裳を裂く。その衆十餘萬、これを上下江士民の師となす。降將金聲桓、清主の詔を奏して、江西を招撫し、至るところ、屠殺威を立つ。こゝに於て、明の益王朱由本は、建昌に據り、永寧王朱慈炎は、撫州に據り、故の兵部侍郎楊廷麟は、贛州に據り、各五嶺の峒蠻數萬を招いて、大兵に抗す。これを江西の師となす。時に清軍すでに南京を下し、淮南を下し、兵合せて十餘萬、半ば南京に屯し、經略洪承疇等、之に將とし、半ば杭州に屯し、貝勒等、之に將たり。又招撫侍郎李延齡を分つて、蘇州に駐防せしめ、而して、降將吳兆勝・李成棟は、分つて、沿海を防ぐ。民兵四に起るに及び、聲勢中斷、烏合にして紀律なく、且つ甲伏糧饟乏しと雖も、しかも、先づ江左を清めざれば、浙閩未だ鼓行して西すべからず。閏六月、吳志貴の蘇州を犯すや、黃蜚、之に會す。清軍城を閉ぢ、嚴に督して、薙髮せしめ、違ふものは之を斬り、數日ならずして、城中髮皆薙、即ち之を驅つて、陣に登らしむ。內應すでに絕え、外

攻遂に潰ゆ。七月貝勒勒克德渾、江寧より兵を引いて南し、分つて諸將を遣し、各地旋つて平らぐ。惟だ吳江の吳易の一軍、江陰の閻應元の一軍は、紀律ありて、尙ほ固を負ふ、貝勒博託、潞王を俘にして、北上し、貝勒勒克德渾を留めて杭州を守らしめ、自ら率ゐて凱旋し、地を略して北し、振旅して、吳江に至り、大雨に乘じ、吳易の軍を蹙して、之を殲くす。徽州寧固は承疇、葉臣・張天祿を遣して、之を攻めしむ。金聲僧、徽寧の天險四塞せるを以て、各山に十三營を置き、守るに十三副將を以てし、惟だ績溪の一面、衝に當るを以て、自ら之を守り、而して、重兵叢山關を扼す。清兵關を攻め、兩月下らず、乃ち土人を購うて、嚮導となし、旌德新嶺の間道より入り、守兵十餘寨を潰し、遂に績溪城下に薄る。金聲僧、晝夜拒戰す。九月に至り、降將黃澍、未だ薙髮せざるを以て、故衣冠を服し、詭つて、援兵と稱して、城に入り、遂に內應を爲し、城陷る。この時、禁旅徧ねく及ぶ能はず、降將武夫、機に乘じて煽虐し、至るところ地毛洗ふが如し。惟だ張天祿は、故の史可法の部將にして、尙ほ承平の節制を有し、徽州の山上に營し、嚴に軍士の城に入るを戒め、次春淫雨浹旬、父老固く請ふも、山を下らず、三軍と暴露し、徽人感泣す。事聞ゆるや、詔を下して、嘉賞す。すでにして、洪承疇、兵を遣して樊山王常棨、高安王常淇を擒にし、益王等、敗竄し、各郡邑皆復し、上下江略ぼ定る。

張存仁の建議

この秋、浙省張存仁奏して言ふ、この頃、薙髮令の下るや、民心創喊して復た梗化を萌す。宜しく科を開いて、士を取り賦を減じ、逋を蠲し、以て人心を收め、反側を安んずべしと。因つて、並に吳兆勝・李成棟が兵を縱つて、民を擾すの罪を劾し、采釋施行せらる。

四川浙東の平定

この年五月、肅親王豪格、靖遠大將軍となり、吳三桂等とともに四川に入り、張獻忠を誅し、兵を分つて、賊營百三十を破り、蜀地略ぼ定まる。而して、浙東の師は、貝勒博託、三月を以て、杭州に至り、八月攻めて金華を破り、馬士英・方國安・阮大鋮を擒にし、衢州を破り、蜀王・樂安王を擒にし、浙東略ぼ定まり、遂に進んで福建を征す。

鄭芝龍の出身

はじめ、唐王の位に即くや、耆碩を敷求し、賢才を招選し、內外文武濟濟然、而して兵餉戰守の機宜は、專ら鄭芝龍に諉して、政を爲す。芝龍幼にして、海に習ひ、海情を知り、凡そ海盜は、皆故盟、或は門下に出づ。撫に就いてより後、海船鄭氏の令旗を得

ざれば、往來する能はず。一船ごとに、例三千金を入る。歳入千萬計。芝龍此を以て富、國に敵し、自ら城を安平鎮に築き、艦舳直に臥内に通じ、その守城の兵は、自ら餉を給して、官に取らず、旗幟鮮明、戈甲堅利、凡そ賊遁れて海に入りしもの、檄して芝龍に附せば、之を取ること寄の如し。故を以て、鄭氏の貴、七閩に振ふ。芝龍、弟芝虎あり、勇、軍に冠たり。さきに劉香を征して、海に沒す。次は鴻逵、次は芝豹、ともに侯伯、一門の聲勢、東南に烜赫たり。芝龍はじめ落魄して、我が日本に來り、平戸に居るや、田川氏の女を納れ、子森を生む。數歳にして、芝龍福建に歸り、撫に就き、劉香を收むるの功を以て、都督となる。こゝに於て、森、日本に在ること七歳、芝龍屢ば招いて之を致す。森、風儀整秀、俶儻にして、大志あり、毎に東に向つて、其母を望み、季父芝豹の窘むところとなる。叔父鴻逵、ひとり偉として、之を視る。讀書穎敏、章句を治めず。先輩王觀光、一たび見て、その父に謂つて曰く、この兒英物、而の及ぶところに非ざるなり、と。十五にして、弟子員に補す。こゝに至りて、年二十三、陛見す。明主之を奇とし、其背を撫して曰く、惜むらくは、一女の卿に配するなし、卿當に忠を吾が家に盡くすべし、相忘るゝことなかれ、と。因つて、姓朱を賜ひ、名を成功と改めしめ、御營中軍都督

朱成功

芝龍の專恣

に封じ、尚方の劍を賜ひ、儀、駙馬に同じ、これより、中外國姓爺と稱す。この年、田川氏、日本より至る。

この時に方り、芝龍府を福州に開き、坐して九卿を見、權勢朝に振ひ、宰相半ば門下に出で、廷臣を集めて、戰守の兵を議し、仙霞關より外、守るべきもの百七十處、毎處守兵の多寡等しからず、給餉足らず。芝龍、撫按以下をして、皆俸を捐てゝ餉を助けしめ、且つ次年の錢粮を借り、又大に官爵を鬻ぐ。こゝに於て、娼優廝隷も、盡く冠裳に列し、しかも猶ほ餉の足らざるに苦しみ、招くところ、關門の兵、疲羸數百人に過ぎざるのみ。時に廷臣關を出でむことを請ふもの、章、公車に滿つ。帝亦た躬ら行間を屢まむと欲す。而して、芝龍日に餉を缺くを以て辭となす。帝心にその恃むべからざるを知るも、卒に以て之を制するなし。幾もなくして、芝龍關を出でざれば、以て衆心を壓するなきを知り、兵を分つて二となし、萬人と聲言すれども實は千人に過ぎず。鄭鴻逵、鄭彩をして、浙東江西より出でしむ。帝、淮陰の故事に倣うて、壇を郊に築き、拜して、之を送る。すでにして、關を出づるや、疏して餉缺くと稱し、駐つて行かず。詔書切に責むるや、止むを得ずして、關を踰え、行くこと四五百里にして

遊る。

黄道周の死

鄭氏權を專にし、明主志を奮ひ、爲すあらむとするも、令、群下に行はれず。大學士黄道周、自ら請うて、兵を江西に募る。江西その子弟多く、ともに死を軍前に效さむことを請ふ。芝龍一錢を與へず。明主、空劄百函を給して、行資となすのみ。道周、劄を以て門下を號召して、百人を得、言安に居て、兵を徽州に出せしが、清兵の擒にするところとなり、械して江寧に送らるゝや、粒を絶つて食はず、十四日を積むも死せず。洪承疇、その才を惜み、疏して救ふ。清主允さず。尋いて、市に斫斬す。これに次いで、蔣德璟、自ら請うて、關に行き情形を察し、機を相て、戰を奮せむとす、明主之を許す。至る比、疲兵羸卒、朽甲鈍戈、一も爲すべきなし。德璟、病を告げて去る。戶部尚書李長倩、餉の繼がざるを以て、憂死し、泉州知府鄒式金、事の爲すべからざるを見るや、告ニを乎へて去る。吏部郎中趙五成、尚書張肯堂と同じく、江南に籍し、疏して、水師千人を以て、海道より直に君山に抵り、襲うて、南京を取り、以て明主を迎へむことを謂ふ。帝大に喜び、芝龍を促して、艘を造らしむ。芝龍笑つて諾せしが、事果さず。時に朱成功、忠孝伯に封ぜらる、成功一日帝の愁坐するを見、泣いて奏して曰く、陛下鬱鬱として、樂まざる、臣の父異志あるを以てするなきを得むや。臣國の厚恩を受く、義として反顧するなし。臣、死を以て、陛下を扞がむ、と。二月、明主意を決して親征し、建寧に駐まり、意、江右に往かむとし、猶豫して決せず。芝龍、固く請うて、省に回る。省中の人數萬、呼んで擁し、天下の望を絶つといひ、因つて、蹕を劍津に駐む。この時に方つて、明軍兵羸れ餉絶え、談の兵事に及ぶものなく、舉朝夢るが如く、醉ふが如く、識者を待たずして、その敗壞を知る。

何騰蛟

楊廷麟

これより先、明の湖廣總督何騰蛟、所部の兵三萬を領して、長繼に屯し、左良玉の舊部衆數萬を岳州に撫し、又李自成の舊部十餘萬を帝德に降す。こゝに於て、左兵・闖兵皆騰蛟の麾下に歸し、驟かに兵數十萬を增す。明主、騰蛟を大學士に進め、定興伯に封ず。騰蛟、降卒を部署し、參するに舊軍を以てし、張光璧・黄朝選・劉承胤・曹志建・董英・馬進忠・王允成・李錦・郝永忠・袁宗第・王進才・馬士秀・盧鼎に題授し、並に兵を總べて、分つて湖の南北を鎮せしめ、武昌・荆州の清軍と相持す。謂ゆる十三鎮是れなり。江西は、建昌・撫州破滅せしより、惟だ楊廷麟・數を守るのみ。民兵二萬・峒蠻四萬を募

り、又廣東入衛の兵數千及び胡一清等入援の兵五千を得、南昌の清軍と戰つて、屢ば捷ち、乘ねて吉安を陷れて、之を守り、軍大に振ふ。こゝに於て、騰蛟は明主に奏して湖南に幸せむことを請ひ、廷麟は江西に幸せむことを請ひ、浙中の諸將は衢州に幸せむことを請ふ。明主、芝龍の恃むに足らざるを以て、亦た閩を棄て、贛より楚に入りて、騰蛟に倚らむと欲す。この年六月、抗州の清兵、浙東を渡り、江西の降將金聲桓は、吉安撫州に克ち、鄭彩・鄭鴻逵は、廣信を棄て、奔つて關に入り、楊廷麟・萬元吉は、退いて贛を守り、浙東すでに定まる。

唐王殂す、

清の江南招撫使洪承疇・福建招撫黃熙胤、皆晉江の人にして、鄭芝龍と同里なり。芝龍、密に使を遣し、微行して欵を通じ、因つて、疏して、言を海寇に託し、馳せて安平に還り、盡く關隘水陸の諸防を撤し、仙霞嶺、虛にして人なし。こゝに於て、清兵、衢州廣信の兩路より長驅して、入り、大學士黃鳴俊を蒲城に斬り、建寧延平に克つ。時に贛すでに清兵に迫られ、閩を救ふに及ばず。何騰蛟の援師、韶州に在りて進まず。唐王倉皇、騎して奔り、從行するものは、何吾騶・郭維經・朱繼祚、數人のみ。清の前鋒統領努山、明軍の旗幟を冒し、馳すること七晝夜、追うて此に及び、並にその援二萬を敗り、遂に唐王を執らふ。王絕食して死す。金聲桓の師、吉安を破り、贛を圍みしが、報を得て、又陷る。九月福建すでに定まる。

鄭芝龍の降

さきに鄭芝龍の去つて、安平を保つや、軍容烜赫、戰艦齊しく備はる。前に遣りし洪黃の信、未だ通ぜざるを以て、猶豫して、未だ清軍を迎へず。又さきに關兵を撤して、一矢を加へず、清に大功あり、兩廣固より部下に屬するを以て、之を致せば、閩廣總督得べしとなす。貝勒博洛、泉紳・郭必昌、芝龍と最も厚きを以て、之を招かしむ。會ま清將韓固山の兵、安平に逼る。芝龍大に怒る。博洛聞いて、乃ち固山を退け、安平を離るゝこと三十里にして軍し、書を以て、之を招き、閩粵總督の印を鑄つて相待つといふ。芝龍書を得て、大に喜ぶ。その子弟、皆勸めて海に入らむとす。成功亦泣いて、諫めて曰く、父、子に忠を教ふ、貳を以てするを聞かず、且つ北虜何の信かあらむ、と。芝龍曰く、喪亂の天、一彼一此、誰か能く之を常にせむ。且つ若幼、惡んぞ人事を識らむ、と。遂に降表を進めて、福州に至る。博洛手を握つて甚だ歡び、矢を折つて誓をなし、酒を命じて、飲むこと三日、夜半忽ち營を拔いて起ち、遂に之を挾んで北す。從者五百人皆別營、見るを得ず、亦た家信を通ずるを許さず。芝龍すでに行く。朱成功、乃

朱成功海に逃る

ち所部を率ゐて海に入る。芝龍嘆じて曰く、成功來らず。清朝それ遂に敵せむか。君をして憂へしむるものは、必ず此子ならむ、と。これより先、成功主に遇せられ、爵に列すと雖も、實は未だ一日も兵柄に與らず。意氣狀貌、猶ほ儒生のごとし。こゝに至り、悲歌慷慨、著くるところの儒巾襴衫を携へ、文廟に赴いて、之を焚き、先師を拜して曰く、むかしは儒生たり、今は孤臣たり、向背去留、各作用あり、謹んで儒服を謝す、と。因つて、高揖して去り、善くするところの陳輝・張進・施琅・陳霸・洪旭等、從ふを願ふもの九十餘人と、二巨艦に乘じて去り、兵を南澳に收め、數千人を得たり。文移に忠孝伯招討大將軍罪臣國姓と稱す。鄭彩・鄭鴻逵、亦た所部を率ゐて、海に入る。清人の謂ゆる浙閩沿海の二寇、これを始となす。

桂王と唐王

第三十八章　明の滅亡（下）

明廷の末運こゝに至りて窮まり、勢すでに挽回すべからずと雖も、宗室の爲に勤むるもの、仍ほ跡を絶たず。桂王由榔は、神宗の嫡孫、はじめ衡陽に封ぜられ、寇亂を以て徙つて梧に寓す。福州すでに失するや、兩廣總督丁魁楚・廣西巡撫瞿式耜と、

桂王の勝敗

監國を會議し、兵部尚書呂大器等、閩より至り、ともに謀つて之を立て、永曆と改元し、肇慶府署を以て、行宮となし、僚署を推置すること差あり。魁楚・大器、ともに大學士となる。福建の舊相蘇觀生、素より魁楚と合はず、遁れて廣東に回り、布政使顧元鏡と、唐王の弟聿鍵を擁立して監國たらしめ、紹武と改元す。瞿式耜・蕭牆に起らむことを恐れ、兵科給事彭耀を遣し、廣州に往いて、觀生を見、倫序監國の前後、國家仇讎の利害を曉諭せしむ。觀生等、耀を市に殺し、日に兵を集めて、肇慶に向はむとす。

その十二月、清の總兵李成棟等、すでに惠潮を下し、師を潛して入り、遂に廣州を陷れ、唐王及び周益・遂諸王宗室世子二十餘人を殺し、蘇觀生を戮す。唐王旬日にして敗る。こゝに於て、遂に兵を發して、南韶に往き、親ら肇慶に下り、四年二月、平樂に克つ。桂林大に震ふ。丁魁楚・輜重四十艘を以て出でゝ、成棟に降る。成棟之を殺して、その帑貲を有す。桂王將に走つて、何騰蛟に湖南に依らむとす。瞿式耜・桂林の形勢を陳し、固く留むれども聽かず、自ら留守して城と存亡せむことを請ふ。桂王遂に總兵劉承胤に武岡に就き、岷王府を以て行宮となす。この月、成棟、桂林を攻む。秋に

至りて明の故の給事中陳邦彥、兵を高州に起し、故の兵部侍郎張家玉、兵を東莞に起し、故の大學士陳士壯、兵を端州に起し、兵を合せて、廣を襲ひ、以て牽制を圖る。清の總督佟養甲、その內應を斬り、成棟に檄して、軍を回して、東に救はしむ。廣東復た定る。而して、鑑式耜、清兵の返りたるに乘じ、その總兵焦璉・陳邦傅とともに、陽朔平樂を破り、廣西殆んど明に回復せらる。その順承郡王勒克德渾湖廣の兵は、この春李錦を荆州に破り、馬進忠・王進才を岳州に敗り、旋つて、召を奉じて、京に歸り、定南王孔有德を以て、定南大將軍となし、平南王尙可喜・靖南王耿仲明とともに進封せしむ。この月、師、岳州に出て、馬進才・黃朝宜を湘潭に敗る。明の督師何騰蛟、退いて衡州を保つ。五月、孔有德、進んで、之に薄り、耿仲明を遣して、水路より長州に還らしめ、兵を分つて、回擊し、八月進んで、武岡を攻め桂王廣西に走る。尙可喜、追うて、桂陽を拔き、黎平府に克ち、その岷王郡王等二十四人を降す。十一月に至り、何騰蛟、鑑式耜と諸將を桂林に會し、地を盡して分守し、騰蛟復た師を全州に視、粵將焦璉・滇將趙印選・胡一清及び己の所部十三家營を督し、路を分つて、拒戰し、營を連ぬる二三百里に亘り、式耜饋餉絕えず、清師遂に引いて還る。十二月、式耜その主を迎へて、桂林に還る。

金聲桓李成棟の叛

順治五年二月、清師復た辰州に克ち、湖南悉く定る。而して、金聲桓・李成棟の變作るに及び、廣西廣東、皆叛いて明に附く。清軍遂に退き、耿尙二王の軍を分つて江西に赴かしめ、孔有德、師を班して、京に回り、總兵徐勇を留めて、長沙を守らしむ。はじめ、金聲桓の江西を狥へ、李成棟の廣東を狥ふるや、遼瀋の舊臣章天于・佟養甲、ともに軍に在り、城を攻め地を略す、皆聲桓成棟の力なり。事平らぐに及び、章天于は江西に巡撫とし、佟養甲は廣東に總督たり。而して、聲桓成棟は、仍ほ總兵提督を以て節制を受け、皆怏々たり。こゝに於て、聲桓、遂に副將王得仁とともに巡按を殺し、明の故の大學士姜日皎・故の僉都御史揭重熙を迎へて、家より起し、江西を以て叛す。李成棟、之を聞き、亦た總督佟養甲を脅し、同時に廣東を以て叛し、並に髮を蓄へ、衣冠を易へ、檄を遠近に移し、表を桂王に通じ、永曆の年號を奉じ、各兵十餘萬を擁して、上游に據り、江寧震動す。之に次いで、湖南の何騰蛟、全州より焦璉・胡一清・張光璧等を遣し、永州を陷れ、王進をして、寶慶を陷れしめ、馬進忠をして、常德を陷れしめ、堵胤錫は李錦を率ゐて、清將線國安を敗り、衡陽を取り、進んで長沙を圍む。守將徐

明室の一掉

勇、兵三千を以て、敵數萬に當り、晝夜拒戰して遂に之を却け。急に人を遣し、敬謹親王の師を湖北に迎へしむ。これより先、四川は、三年冬、肅親王、川西川北を剿定し、四年分つて川南川東を徇へて、凱旋せしより、總兵李國英、巡撫となり、成都殘破せるを以て、しばらく保寧に駐り、吳三桂及び都統李國翰、關中を鎮守して、川北を聯絡す。すでにして、姜瓖叛をなし、秦晉并に漢中を搖し、兵、北して、陝に赴く。こゝに至りて、明の舊將李占春・譚洪・譚文・譚誼及び義勇楊大展等各兵數萬を以て、分つて川南川東に踞し、桂王に附き、封號を受け、官吏を請ふ。桂王乃ち錢邦芑をして、其地を巡撫せしめ、呂大器をして、諸軍を總制せしむ。こゝに於て、雲南・貴州・廣東・廣西・江西・四川・湖南、七省の地は、一時明室の有に復し、桂王因つて移つて肇慶に居り、且つ姜瓖は山陝に猖獗し、鄭成功張名振は、閩浙に出沒して、皆遙に相應じ、聲勢頗る張る。これを明末形勢最後の一掉となす。然れども幸にして、聲桓・成棟・姜瓖・李錦の輩は、皆盜賊の餘にして、遠略なし。清廷、譚泰に命じて、征南大將軍となし、江寧より九江に赴き、耿尙二王に會して、江西廣東の叛を討ち、鄭親王濟時哈朗・承順郡王勒克德渾に命じて、孔有德に會して、湖南廣西の寇を征せしめ、端重郡王博洛・敬謹郡王尼堪

金聲桓、李成棟の敗死

に命じて、姜瓖を大同に討たしめ、而して、吳三桂・李國翰は、分つて陝西の賊黨を剿し、洪承疇は仍ほ江寧に鎮して、沿海の餘寇を經略す。皆順治五六年の事に係る。

はじめ、金聲桓の叛せしとき、惟だ贛州亂に從はず。聲桓・王得仁とともに、すでに九江を陷るや、流に順つて、江寧を擣かむとせしが、其後に乘ぜられむことを恐れ、軍を回して、贛を攻む。三月下らず。清の江寧の大兵二十萬、水陸並び進み、九江を復し、南昌を擣く。聲桓回り救ひ、城に入つて拒守す。清兵、長濠を堀つて、之を困しむ。得仁兵二萬を引いて、直に九江に趨き、清軍の餉道を絕たむとす。姜日廣、之を召し一日九檄、得仁恚つて還り去る。十月に至り城中糧盡く、李成棟、復た大舉して、贛を攻めしが、敗れて、信豐に走る。六年正月、南昌西門の守將、潛に清兵に應じて、城陷り、明臣姜日廣、清の叛將金聲桓・王得仁、皆死し、肇慶の援師、亦た程鄉に敗る。李成棟の師又信豐に潰え、成棟大醉し馬に上り、河を渡らむとして、甲重く、人馬ともに沈んで死し、二賊皆滅し、江西復た定る。その大同の叛將姜瓖は、はじめ、英親王・睿親王、ともに討伐せしが、六年三月、豫親王の薨ずるや、二王相次いで京に歸り、敬謹王尼端端

重王博洛、之に代り、八月英親王、復た兵を督して、大同を圍むや、城兵俄に瓌を斬つて下る。これより先、明の廢官萬練、徧關に踞して、寧武・岢嵐・保德を陷れ、明の參將王永强、延安に據り、清の叛將劉登樓、榆林甘肅に據り、降將李建泰、亦た太平山に據り、遠きは澤潞に至るまで、同時に騷擾せしが、こゝに至りて、皆討平し、建泰は、誅せられ、山西陝西、皆定る。

盟式耜の死

鄭親王及び定南王の軍は、六年二月を以て、湖南に進みしが、明將相和せざるに由り、何騰蛟、ひとり湘潭の空城を守り、因つて、虜となり、長沙に斬らる。孔有德、兵を遣して曹志建を道州に攻めしが、克たず、馬蛟麟、亦た之を攻めて破れ、志建因つて永州に據りしが、十月に至り、有德攻めて之に克ち、七年一月、武岡靖州を復し、九月全州に薄るや、明の諸將、旋つて桂州に走る。十一月、有德、桂林に入りしが、守兵戰はずして、四に潰え、城中空うして人なし。盟式耜、衣冠を正うして、署中に危坐し、總督張尙敏と同じく執らへられて、殺さる。はじめ、式耜、蕞爾たる廣西を以て、大兵に抗し、その軍資、資するところ、正賦を除くの外、惟だ錢法・鹽政・屯田の三事のみ。餞局を開き、毎月二萬金を得、錢を以て東鹽に易へ、鹽を以て、民を招いて田を墾す。然れど

諸路清軍の大敗

も事理肘多く、又議して現兵を三分し、一軍を以て、全州を守り、一軍は鉴を衝いて奇を出し、一軍は屯田して餉に充てむとす。趙印選、之を難じ、郝永忠・陳邦傅、之を却け、以て亡ぶに訖る。

尙可喜の贛の圍を解くや、金聲桓・王得仁の潰卒、亡げて閩粵の山林に入り、揚玄熙・傅鼎銓、皆之に依り、粵兵亦た嚴に、庾嶺を守る。こゝに於て、兵を吉安に屯すること一歲ならむとす。すでにして、明の鎭將、欵を納れしに出り、遂に南雄に克ち、七年正月、韶州に克ち、二月廣州を圍む。桂王、李元胤・馬吉翔を留めて肇慶を守らしめ、難を避けて、梧州に走る。十月廣州城破るや、桂王、李元胤を率ゐて、南寧に走る。この年十二月、睿親王病んで薨じ、八年正月、英親王、罪あり、世祖はじめて政を親らす。この年、尙可喜・耿繼茂に詔して、廣東を鎭守せしめ、孔有德をして、廣西を鎭守せしむ。有德將を遣して梧州に克ち、明將陳邦傅・焦璉を殺し、潯州を以て來り降り、三路進取す。而して、吳三桂は、四川に入りて、李占春等を降して、成都重慶を復す。こゝに於て、湖南・江西・四川・廣西・廣東、復た清の有となり、桂王、土司の境に窮竄し、旦夕奏凱せむとす。而して、鄭成功・張名振等、謂ゆる浙閩海寇の外、新に孫可望・李定國の事作り、形

勢復た一頓せむとせり。

孫可望

はじめ、張獻忠の殄せらるゝや、その黨孫可望・李定國・劉文秀・艾能奇・白文選・馮雙禮、衆を川南に擁すること、各數萬、可望を推して、長となし、長慶を襲ひ、遵義を陷れ、雲南に入る、可望、欵を明の永曆帝に納れ、王封を求め、藉つて衆を服せむと欲し、屢ば使して之を求むれども決せず、清兵すでに迫るに及び、桂王已むを得ずして、可望を秦王に、定國を西寧王に、文秀を南康王に封じ、その出兵を趣し、川西・川東・川南、復た陷る。孔有德、桂林に在り、楚粵の寇氛、日に熾なるを以て、檄して、重兵を以て、沅州の門戸を守らしめ、南寧・梧州等を分守す。未だ幾ならずして、李定國、桂林を襲ひ、援師未だ至らざるに乘じて、之を陷れ、有德之に死し、柳州亦た叛し、廣西復た明の有となる。可望、白文選を率ゐ、獵猓の兵五萬を以て、象陣を列し、攻めて辰州を陷る。こゝに於て、敬親王尼堪、定遠大將軍となり、十一月、定國を衡州に破りしが、輕騎北ぐるを逐ふや、伏に迫うて陣殁し、貝勒屯齊、代つて軍を督し、十年二月、定國を永州に破りしが、三月寶慶に赴かむとして、岔路口に於て、孫可望・白文選・馮雙禮に遭ひ、

激戰して、交綏す。然れども、定國の湖南に在るに乘じて、清兵桂林を復し、廣西復た稍や定る。十一月、定國、廣東を攻めて、高州を陷れしが、尙可喜・耿繼茂等、連りに之を敗り、十二年春、遂に廣東を復す。劉文秀、さきに岳州武昌を犯せしが、大に常德に敗れて、貴陽に回り、可望の命を以て、雲南を守る。時に定國・文秀、兩軍皆衰弱、たゞ可望貴陽に踞して益す跋扈し、桂王を安隆に置き、自ら內閣六部を設け、太廟を立て、朝儀を制す。桂王惧るゝこと甚しく、密に定國を召して、入衛せしむ。可望微かに之を聞き、十三年春、關有才を遣して、定國を南寧に襲はしめ、又白文選をして、桂王を貴陽に遷さしめむとし、未だ道に就かず。定國すでに可望の兵を敗り、安隆に抵り、桂王を奉じて、文秀に雲南に赴く。可望大に怒り、十四年秋、大舉して桂王を攻む。兵十餘萬、定國・文秀と水を夾んで陣す。白文選・馮雙禮以下の諸將、皆可望を直とせず、陣を約して、戰はず。定國その精銳を悉くして、中堅を突くや、諸軍皆之を迎へ、可望因つて、大敗して湖南に走り、經略洪承疇の軍前に降り、召して、義王に封ぜらる。

はじめ、可望の未だ降らざる以前に方つてや、清の四川總督李國英は保寧に駐保し、經略洪承疇は長沙に駐保し、大將軍辰泰及び阿爾津、先後荆州に駐まり、尙可

三路貴州に會す

寧等、分つて肇慶廣州に駐まり、出て〻湖南川北廣東を犯すの寇に遇へば、擊つて之を却けしも、未だ境を出て〻窮追せず。諸賊皆百戰の餘、地險にして、兵悍なるが故に、しばらく雲貴及び川の東南を以て、その延臨地となす。可望の降に及び、諸寇の內訌を知るや、洪承疇・吳三桂、皆奏請し機に乘じて、大舉せむとす。こゝに於て、詔して、貝子洛託を以て、寧南靖寇大將軍となし、湖南より進み、吳三桂を平西大將軍となし、漢中四川より進み、卓布泰を征南將軍となし、廣西より進み、三路約して貴州に會せしむ。

十五年四月、承疇・洛託の軍、常德より、靖玩鎭を經て、貴陽に抵り、三桂の軍、漢中を發して、重慶を狥へ、遵義に克ち、七月に至りて、四川を復す。この年、豫親王の子信郡王、禁旅を以て、貴州平越府に抵り、十月三路より滇に入る。時に文秀すでに死せしを以て、定國、文選・雙禮等と部署を定めて、之に當り、各路皆潰ゆ。こゝに於て、順治十六年正月朔、大兵十萬三路より、滇城に入る。桂王すでに西・永昌に走る。定國、總兵靳統武をして、兵四千を以て、桂王に扈して、騰越に奔らしめ、自ら精兵六千を永昌の磨盤

磨盤山の伏兵

山に伏す。山は、西南第一の穹嶺にして、鳥道交霄、曲、一騎を通ずるのみ。定國、大兵累勝、窮追必ず戒めざるを度り、柵數重を其間に設け、竇名望は初伏、高文貴は二伏、王璽は三伏、每伏兵凡そ二千、約して清軍の三伏に至るを俟ち、山巔の號礮を以て起ち、首尾橫突、伐攻せよ、必ず一騎の返るなからむといふ。清軍北ぐるを逐ふこと、數百里、一夫の拒守するなく、定國逃竄、すでに遠しとなし、隊伍散亂して山に上る、すでに萬有二千。降官盧桂王來つて其謀を泄す。時に前驅すでに二伏に入る、諸帥急に退き、令を傳へ、騎を舍てゝ、步し、礮を以て其伏に發す、敵兵林箐中に死するもの、三の一、伏起るや、鏖鬪して死するもの、亦た三の一、定國山巔に坐し、信礮の序を失するを聞くとき、忽ち飛礮その前に落ち、土を擊つて面に滿ち、乃ち走る。竇名望・王璽皆戰死す。而して清軍亦た、都統以下を亡ひ、精卒數千を喪ひ、窮追して騰越の西に至ること、百二十里、中原の界盡く、瘴深く、餉盡きしに由り、磨盤山の役に懲りて、復た追はず。その閣臣侯伯以下數十、士馬數萬を降し、詔して、雲貴川廣湖の五省の蕩平を以て、中外に宣示し、吳三桂をして、雲南を鎭せしむ。

桂王緬甸に入る

桂王の騰越に走るや、遂に南甸に往き、緬界蠢木河に抵る。緬人、從官を勒し、盡く兵器を去つて、方に境に入るを許し、四舟を以て、之を迎ふ。從官皆自ら江舟を覓め、隨つて行くもの六百四十餘人、陸行するもの、故の岷王の子より以下九百餘人、期して緬甸に會せしむ。桂王、井亘に至り、復た舟を以て迎へられ、五月緬都阿瓦に至り、すでにして、赭徑に至る。その陸行せしものは、緬人に掠められて奴となり、多くは自殺し、惟だ岷王の子等八十餘人、流れて暹羅に入る。緬人、赭徑に於て、草屋を設き、桂王を居らしめ、竹を以て城となす。從行諸臣、或は短衣跣足、緬婦と相貿易して、笑樂をなし、大に緬人に嗤はる。李定國・白文選等、さきに分れて孟養木邦に竄す。順治十七年、文選兵を以て進んで阿瓦を攻め、桂王を索め、反つて緬人に敗られ、因つて、孟養に赴いて、定國と合す。二人屢ば桂王を迎へむとして成らず。十八年五月、兵を以て、緬甸に入りしが、初に勝つて、後敗る。時に緬酋の弟、兄を殺して自立し、因つて桂王の從官を誘うて、四十二人を殺し、復た兵を以て桂王の居るところを圍み、その左右、或は殺され、或は自ら縊りしもの、勝げて數ふべからず。唯だ桂王及びその昇隸二十五人を存するのみ。

桂王の崩殂

聖祖の即位

桂王の緬甸に入るや、清廷之を度外に置く。而して、吳三桂、頻に兵權を貪り、必ず桂王を俘にして、功を爲さむと欲し、上疏して、三難三患を述ぶ。こゝに於て、順治十八年八月、內大臣愛星阿に命じて、定西將軍となし、滇に赴いて、會剿せしむ。兵ともに十萬。十一月、師に木邦に會し、十二月蘭鳩江に抵る。緬甸王莽應時、桂王及びその妻子從官を執らへて獻じ、大兵凱旋す。明年四月、桂王雲南に殂す。六月、李定國、走つて景線に死し、その子嗣興、劉文秀の子劉震等とともに來り降る。はじめ定國の孫可望と並に賊たるや、蜀人金公趾といふものあり、軍中に在りて三國演義を說くや、每に可望を指して、董卓・曹操となし、而して定國に期するに諸葛を以てす。定國、感動して曰く、孔明は敢て望まず、關張・姜伯約は、敢て勉めずむばあらず、と。これより、遂に可望と左し、桂王の封爵を受くるに及び、自ら誓つて努力國に報じ、賊名を洗去し、百折回らず、遂に身を緬甸に殉し、有明三百年忠臣の殿となる。こゝに於て、桂藩の局結び、朱氏の裔、全く絕ゆ。明は太祖の洪武元年より、桂王の永曆十七年に至るまで、凡そ二十世、二百九十六年にして亡ぶ。

その翌、順治十八年正月七日、世祖崩ず。年わづかに二十有四、三子玄燁、位に即く

これを聖祖仁皇帝となす。

鄭成功と張名振

明社すでに亡びしと雖も、その餘孽は、仍ほ存し、鄭氏の勤王、三鎮の叛亂、その最たるものなり。はじめ、鄭成功の走つて海に入るや、厦門に據り、その姪鄭彩・鄭聯は張名振とともに、魯王を奉じて、閩に入り、順治四年、建寧・邵武・興化・福寧の三府一州を陷れしが、幾もなくして、閩浙總督陳錦等に克復せらるや、五年九月、舟山を取りて魯王を奉ず。而して、成功は、使を遣して、桂王に湖南に朝し、封を延平郡王に受く。こゝに於て、浙師は盡く張名振に幷せられ、閩師は盡く鄭成功に幷せられ、東南の海寇、皆その號令を聽く。

張名振の歿

張名振、忌んで、其將王得先を舟山に殺すや、得先の部將、清に降り、悉く虛實を得たり。八年、總督陳錦、金礪に命じて、山塞を剿せしめ、遂に大霧に乘じ海を渡つて螺頭門に至る。明人方に覺る。阮駿、火舟を以て、邀へ戰ひしが、風返つて人舟ともに焚け、清軍遂に其城を屠る。はじめ、名振、海島の險を恃み、大兵至るも必ず渡る能はずとなし、期に先つて魯王を奉じて、吳淞を擣き、以て清師を綴し、惟だ兵三千を留め、

駿をして舟山を守らしむ。こゝに至り、警を聞いて、回り救へば、城すでに破る、乃ち魯王を奉じて厦門に赴き、監國の號を去る。陳錦奏して兵三千を舟山に設く。成功閩に在り、清兵舟山を攻むるの隙に乘じ、大舉して、沿海に寇す。福建巡撫張學聖等、謀つて、成功の出でしに乘じ、安平の巢穴を擣き、その貲を擄む。成功還つて怒り、償を求むるを以て名となし、連りに諸縣を陷れ、進んで、漳州を圍むこと七閲月、詔して、張學聖を逮し、京に入つて罪を治む。

海澄の戰

順治九年三月、總督陳錦、同安に屯するや、その奴、之を帳中に殺し、首を以て成功に走る。成功賞し、斬つて狗ふ。十月都統金礪の援軍至り、屢ば勝つ。成功退いて海澄を保つ。清兵之を攻め、城壞るゝこと百餘丈、成功親ら雉堞に立ち、衆を督して、堵禦し、左右死するもの層積す。成功、諸將と敵樓に飲み、矢礮雨下するも、指揮自若、大に呼んで曰く、天尚くは我を贊け、吾が事を落す莫れと。須臾にして、下り息ふ。礮その座を碎く。一夕忽ち空砲遞發す。成功諸將に謂つて曰く、賊將に城に臨まむとす、と。兵を勒し、斧を持して、待つ。清兵壕を渡り、郭に入り、大に呼んで城に登る。衆斧を舉げて之を斫る。清兵死傷、壕を塡め、大敗して宵に遁る。而して、海澄の守、益す堅し。こ

の時、張名振・張煌言、亦た屢ば餘軍を以て長江に入り、金山燕子磯に登り、遙に孝陵を祭り、戰艦三百を吳淞江に掠む。時に成功始終桂王の爲にし、二張は始終魯王の爲にし、奉ずるところ、同じからざるも、しかも、その交、甚だ睦し。時に遺臣義旅、漸く亡び、ひとり、兩軍海上に犄角し、而して、成功尤も雄なり。

清廷令を下し、芝龍・鴻逵等を招撫し、皆侯伯に封じ、又成功を封じて、海澂公となし、芝龍の少子世忠をして、芝龍の書を持し、往いて之を招かしむ。芝豹・彩聯等、皆降りしが、ひとり成功受けず。數ば兵を出して、福興泉漳等の郡を縱橫す。清復た使を遣して之を招く、成功從はず。清主怒つて、芝龍を高廟に寘く。成功顧みず。漳州を攻め、清將劉國軒・朴世用を降し、屬縣十邑ともに下り、勝に乘じて、泉州の屬邑を略し、後、安平鎭・漳州及び惠安・南安・同安の三邑を取り、舟山を破つて、之に據る。

成功將に北略せむとし、その將黃梧を留めて、海澂を守らしむ。梧、成功法を用ふること嚴、かつて揭陽の敗を以て、大將蘇茂を斬りしを見、遂に懼れて、清に降り、封ぜられて海澂公となる。梧、則寇の五策を陳す。一は沿海に屯し、以て登岸を堵し、二は小舟を造つて中左を圍り、三は叛產を清めて招徠を裕にし、四は奸商を鋤いて接濟を絕ち、六は僞墳を剗して衆情を泄らす。成功の將甘輝、亂を聞いて進み攻むれども克たず。

黃梧

この年、桂王雲南に在り、使を遣し、海を航し、成功を封じて、延平郡王招討大將軍となし、甘輝を崇明伯となし、その他爵を拜すること差あり。成功所部を分つて、七十二鎭となし、六官を設けて事を理し、永明の號を假り、便宜封拜し、遂に大舉して南京を取らむことを議し、戈船の士十七萬五千を以て、水戰を習はしめ、五萬を以て、騎射を習はしめ、五萬を以て步擊を習はしめ、萬人を以て往來策應し、又鐵人一萬あり、鐵甲を披き、朱碧彫文を畫き、陣前に峙ち專ら、馬足を斫り、矢銃入る能はず。時に張名振すでに死し、張煌言、代つて、其衆を領し、嚮導となりて、浙に至り、溫台を陷れ、羊山に次す。相傳ふ、その下に龍宮あり、震蕩を戒む、と。成功令を下し、各船をして盡く砲せしむ。果然颶發し、雷電を挾んで水起り、立どころに巨艦數十を碎き、士卒數千を漂沒す。成功乃ち師を旋す。その翌十五年、成功、清兵三路より進み、桂王を雲貴に攻むと聞き、乃ち大舉して其虛に乘じ、江南を犯して牽制を圖り、溫州平陽

鄭成功の北上

瑞安ともに陷り、全浙震動す。

この年六月、成功江に入る。時に蘇松提督・江寧提督、兵を分つて、要害を守り、圖山及び潭化洲、皆大砲を設け、金焦二山、皆鐵鎖江に横ふ。煌言、屢ば却いて進まず。人をして、水を泳いて、鐵索を斷たしめ、遂に風潮に乘じ、十七舟を以て、徑に進み、沿江の本城ともに潰ゆ。成功諸將に謂つて曰く、瓜鎮は金陵の門戸たり、須らく先づ之を破るべしと。因つて、諸將に機宜を授け、自ら親軍を督して進む。中提督・甘輝・左提督翁天祐等、大將の旗鼓を建て、直に瓜洲を樹く。清將朱衣祚・左雲龍等、滿漢の騎兵一萬を率ゐて、會戰す。成功軍を麾いて、大に進む。右武衛周全賦、兵を率ゐて、岸に登り、直に清軍を破り、雲龍を橋下に斬り、衣祚城に奔る。正兵鎮韓英、門を奪つて入り、城に登り、幟を樹つ。全賦之を望み、軍を麾いて、疾く進み、西南隅を陷れて入り、清兵を搜殺して、皆盡き、遂に進んで蕪湖を取り、楊子を亂り、鎮江に趨き、銀山に壘す。清兵數萬、萃つて之を攻む。動かず。騎を駐めて射ること、雨の如し。成功令して火砲を發し、鼓を多くして、聲を鈞うし、廊瓦皆動く。清兵大に敗れ、鎮江の屬邑、皆下る。成功乃ち、張煌言・楊朝棟をして、江南江北を招撫せしむ。こゝに於て、當州・徽州・池州・太平・滁

甘輝の建議

鄭成功の敗

和・六合等の州郡、附かむと欲するもの多く、蕪湖縣の清兵、皆遁る。甘輝曰く、瓜鎮は南北の咽喉たり、但だ此に坐鎮し、瓜洲を斷てば、山東の師下らず、南部勞せずして定まらむと。成功聽かず。師を率ゐて、舟に登り、進んで金陵を取らむとして、四方に檄し、八月舟、觀音門に至り、獅子山に軍し、營壘を度り、將士をして、諸山に分屯せしめ、成功岳廟に屯す。甘輝曰く、夫れ兵は先聲を貴ぶ。彼は衆にして、我は寡、その未だ定らざるを擊てば宜しく拔くべし。若し彼集り禦固くば、君必ず之を悔ゐむ、と。成功聽かず。輝退いて人に告げて曰く、吾、こゝに復らず、と。

時に江寧の重兵、移つて雲貴を征して、大半西上し、城の守備空虛、松江提督馬進寶、赴いて援けず。陰に成功に通じ、兵を擁して觀望す。成功檄を遠近に移し、太平・寧國州等、四府三州五十四縣、風を望んで欵を納れ、維揚・常蘇、旦夕變を待ち、東南大に震ひ、軍報阻絶す。世祖六師を集めて、南苑に幸し、親征を議す。兩江總督邱延佐、伴つて、人をして、欵を通ぜしむ。成功之を信じ、兵を儀鳳門外に按す。巡撫蔣國柱・崇明總兵梁化鳳、皆赴き援く。成功の將余新、敵を輕んじて備を設けず、化鳳その營を襲うて、之を擒にす。天日師を出して、儀鳳・鍾阜の二門より、三路その前を攻む。成功親功

を率ゐ、擊つて之を敗る。すでにして、清兵數萬、山後より出て、左前鋒の營に薄り、將士轉戰して、三合三却、遂に敗走し、諸將萬禮・林勝等皆陣沒す。會ま成功、甘輝をして營を守らしめ、自ら江上に出て、舟師を調す。諸營、山上麾蓋動かざるを見て、敢て退かず、又未だ號令を奉ぜざるを以て、相救ふに暇らず。遂に大に潰ゆ。ひとり、甘輝且つ戰ひ、且つ走り、江に至るや、騎能く鬬するもの三十餘人、凡そ擊殺するところ數十百人、馬躓いて獲られ、城南金水橋に至り、金新が方に膝を屈するを見、大に怒つて之を蹋り、戟手罵つて屈せず。死最も烈なり。化鳳復た兵を遣して、海艘五百を燒くや、成功餘艦を以て、帆を揚げて、海に出て、冬十月、島に歸り忠臣の廟を起し、甘輝を以て第一となし、大に悔恨して曰く、吾早く甘輝の言に從へば、此に及ばず、と。張煌言亦た敗走し、錢塘より出て、海に入る。この役、梁化鳳、首功たり、詔して、先づ其形を圖し、以て進む。

清軍海上の敗

この冬、劉之源に詔して、鎮海大將軍となし、鎮江に駐防し、將軍達素等に命じて厦門を攜かしむ。成功自ら諸部を勒し、海門を扼し、令を諸將に傳へ、中流に碇し、軍を按して動かず。清船忽ち至り、諸軍倉卒命を受け、敢て先づ發するなし。清兵之に乘じ、副將陳堯策等、これに死す。時に東風盛猛、清船すでに上流を得たり。成功自ら旗を手にし、師を起し、巨艦を引いて、之を橫擊す。風吼へ、濤立ち、一海皆動く、北人水を諳せず、眩暈して軍する能はず、退いて多く淖に陷り、僵屍海に布き、大敗して、退き、成功の世を終るまで、島を覆ふものなし。

成功海上に崎嶇すること十餘載、進取成るなきを以て、遂に謀りて臺灣を奪うて、之に據る。この時、桂王すでに緬甸に走りて執らへられ、幾もなくして、張煌言、南田に擒へられ、魯王亦た殂し、浙閩の沿海、全く平定し、明の餘黨は、終に大陸の地を失へり。但し成功臺灣占領及び鄭氏三世の始終は、後章に讓るべし。

鄭氏の始終

第三十九章　三藩の叛亂

聖祖の即位

清の聖祖仁皇帝、諱は玄曄、世祖の第三子、母は孝慈皇后佟氏、一等公圖賴の女、順治十一年三月を以て生れ、十八年正月、世祖太漸、立つて皇太子となり、遺詔して、內大臣索尼・蘇克薩哈・遏必隆・鰲拜に命じて、輔佐たらしめ、位に即くや、明年を以て、康熙元年となす。帝、擧止端肅、志量恢弘、語、至誠より出て、切に事理に中る。讀書十行、と

もに下り、略ぼ遺忘せず。五歳より後、學を好んで倦まず、六歳世祖その志を問ふや、對へて曰く、長ずるを俟つて、皇父に效ひ法らむ、と。八歳踐祚、太皇太后、何を欲するかを問ふ。曰く、唯だ願はくは、天下乂安、生民業を樂み、ともに太平の福を享けむのみ、と。康熙六年七月に至りて、政を親らす。この間、明の諸王全く平らぎ、その遺臣及び不逞の徒、各地に割據するもの、相次いで降り、鄭氏の臺灣に據るを除いて、支那本部は、盡く清室の有に歸せり、而かも、幾もなくして、三藩の亂起る。

清初の兵事大なるもの、前三藩、後三藩といふ。前三藩は、明の福王、唐王、桂王にして、後三藩は、平西王吳三桂、平南王尙之信、靖南王耿精忠なり。國家の兵力を語れば、前は甫めて新造、後は全盛に乘じ、戡定の戰功を語れば、前は朽を拉するが如く、後は山を摧くが如く、事倍して功半し、勞佚相百す、勢重ければ藩鎭般頑よりも劇、助少ければ守成創業よりも勞す。はじめ、世祖の鼎を定むるや、東南の地、反側未だ靖からざるを以て、大學士洪承疇に命じて、五省を經略せしめ、而して、定南王孔有德は廣西を徇へ、尙可喜、耿仲明は、廣東を徇へ、吳三桂は四川、雲南を徇へ、皆明の故臣を以て、所部の綠旗兵を領し、外は以てその招來を藉り、外は以て禁旅の逮ばざるを佐く。南方略ぼ定るに及び、洪承疇は、宗室託洛、信郡王多尼と、禁旅を率ゐて、京州に還り、孔有德は、さきに李定國の變に死して後なし。故に惟だ三桂を留めて、雲南に王とし、尙可喜を廣東に王とし、耿仲明の子繼茂を福建に王とし、繼茂の卒するや、その子精忠、封を襲ふ。耿尙二藩、屬するところ各十五佐領、綠旗の兵各六七千、丁口各二萬。三桂は五十三佐領を屬し、綠旗の兵萬二千、丁口計數萬衆。これを三藩幷建の始となす。三藩の中、三桂功最も高く、兵最も强く、朝廷の恩禮を受くること亦た最も侈り、流賊を破つて陝を定め、川を定め、滇を定め、永明王を緬甸に取り、又水西の土司安氏を平らげ、四方の精兵猛將、多くその部下に歸し、五丁に一甲を出し、甲二百に一佐領を設け、積むこと五十佐領、轄するに左右都統を以てし、前後左右の援剿、四鎭を設け、十營に分ち、每營の兵千有二百、吳應麒、吳國貴、夏國相、胡國柱等を以て、都統となし、馬寶、王屏藩、王緒等千人を、以て、總兵となす。その滇に入るの始に方つてや、羽書旁午、朝廷假すに便宜を以てし、雲貴の督撫、成な節制を受けて、人を用ひ、兵吏二部、掣肘するを得ず、財を用ふるや、戶部稽遲するを得ず、その除授するところ、號して西選といひ、西選の官、天下に遍ねし。順治十七年、戶部奏す、雲南省

吳三桂の專恣

の俸餉を計るに、歳に九百餘萬、召還の滿兵を除くの外、議して、綠營兵五分の二を裁せむ、と。三桂、邊疆未だ靖からず、兵力減じ難しといひ、こゝに於て、緬甸水西の各役を唱へ、以て自ら固うし、加ふるに、閩越二藩、運餉歳需二千餘萬を以てす。近省輓輸、給せざれば、一切これを江南に仰ぎ、絀すれば、連章入つて告げ、すでに贏れば復た稽該を請はず、天下の財賦、半ば三藩に耗す。御史郝浴・楊素蘊・慶陽知府傅宏烈、先後その不法を奏劾せしも、朝廷固く之を懷くるに德を以てし、親王に晉封し、子は公主に尙す。康熙六年に及び、三桂はじめて目疾を以て、疏して總管を辭し、その吏を除するの權を罷む。而かも、兵餉は尙ほ貰せず。又自ら以爲へらく、功高くして朝廷終に我が滇を奪はず、と。益す根蔕を固くして、拔くべからずとなし、桂王の五華山の舊宮に踞して、藩府を爲り、侈麗を增崇し、盡く沐氏の舊莊七百頃を括して、藩莊となし、使を蓬額・喇麻に通じ、奏して、茶馬を北勝州に互市す。こゝに於て、西藩蒙古の馬、西藏より、滇に入るもの、歳に千萬匹、渠を濬ひ、城を築くを假りて名となし、廣く開市を徵し、鹽井を搉し、礦を開いて鼓鑄し、潛かに硝礦諸禁物を積み、土司の金幣を重斂し、厚く自ら封殖し、財を散じて士に結び、人人その死力を得、滇中を專

制すること十餘年、日に士馬を練り、器械を利し、水陸の衝要には、徧ねく私人を置き、各省の提鎭、その腹心多く、子は額駙となりて、朝政の纖悉、旦夕飛報し、詭つて蒙古、麗江中甸の地を侵掠すと稱し、兵を調して、往くに及べば、又寇退くと稱し、邊防を挾んで自ら重くす。尙可喜、老病、兵事を以て、その子之信に屬するや、酗虐を以て粵に跋扈し、精忠は稅斂を以て閩に暴し、皆三方の患たり。

この時に方りて、聖祖政を親らすること數歳、春秋日に富み、中外の利害と前代方鎭の得失とを習ふ。尙可喜、その子之信すでに兵柄を掌り、威福を擅にし、一令を出すを得ざるを以て、康熙十二年三月、その客金光の計を用ひ、上書して、二佐領の兵を率ゐて、遼東に歸老せむことを請ひ、帝を見て、自ら陳ずるを得むを冀ふ。部議、休を乞うて、子襲ぐの例なしといひ、請うて十五佐領・綠旗六千、丁口二萬餘を撤して、籍に回らしむ。三桂及び耿精忠、之を聞いて、自ら安んぜず、亦た七月に於て、疏して、兵を撤せむを請ひ、以て朝旨を探る。帝、廷臣に敕して議せしむ。皆徙す勿れといふ。惟だ戶部尙書朱思翰・兵部尙書明珠・刑部尙書莫洛等、力めて藩を徙さむことを請ひ、議政王貝勒大臣に命じて議せしむるに、仍つて兩議を持す。帝念へらく、藩鎭

久しく重兵を握り、勢、尾大を成す、國家の利に非ず、と。又三桂の子・精忠の諸弟、皆京師に宿衛し、諒に能く變を爲すなきを以て、特に其請を允し、藩を山海關外に徙す。時に三桂、朝廷慰留して、明の沐英世、雲南を守る故事の如くせむことを冀ひしに由り、命下るに及びて、愕然たり。こゝに於て、その黨と聚謀し、陰に士馬を勒し、郵傳を禁遏し、惟だ入るを許して出づるを許さず、密に其子應熊を京師より召す。應熊素と謹愿、富貴を保たむことを思ひ、父の異志を知り、日夜涕泣して、行くを肯んぜず、その尚主生むところの子三人、亦た留めて遣らず、使者乃ちその庶子世璠を取りて、滇に歸る。三桂以爲へらく、中朝の諸將、已に當るに足るものなし、と。惟だ兵を擧ぐるの名に難かり、明の後を立て、以て天下に號令せむと欲すれば、緬甸の役、自ら解すべきなく、行いて中原に至りて、腹心に據り、はじめて事を擧げむと欲すれば、日久しく謀泄れむことを恐れ、遂に十一月二十一日を以て、兵を發して反し、巡撫朱國治を殺し、按察以下の屈せざるものを執らへ、檄を遠近に移し、自ら天下招討兵馬大元帥と稱し、明年を以て、周王元年となし、髮を蓄へ、衣冠を易へ、旗幟皆白くす。貴州巡撫曹申吉、貴州提督李本源、雲南提督張國忠、皆賊に從ふ。郎中の黨務禮、薩穆哈といふものあり、黔に在つて、移藩の舟馬を督理す。疾く馳すること十二日、闕に至りて、變を告げ、擧朝震動す。大學士索額圖、諸臣の撤藩を建議せしものを誅せむことを請ふ、帝許さず。惟だ詔を馳せて、閩粵兩藩を撤するなからしめ、吳三桂の官爵を削りて中外に宣示し、その子應熊及び家屬を獄に下し、順承郡王勒爾錦を以て、寧南靖遠大將軍となし、師を統べて、荆州に至らしめ、又滇蜀壤を接するを以て、西安將軍瓦爾喀に命じ、騎兵を率ゐて、蜀に赴かしめ、大學士莫洛、陝西軍事を經略す。三桂、亦た其將王屏藩を遣して四川を犯さしめ、馬寶等、湖南に出て、除夕二十九日、沅州を陷る。

諸方の賊

翌くれば康熙十三年正月、賊將龔應鱗・夏國相・張國忠等の軍、湖南に至り、提督桑額、澧州より夷陵に走り、巡撫盧震、長沙を棄てゝ奔竄し、巴爾布碩・岱珠滿等の兵荆州武昌に駐まり、賊勢の盛なるを畏れて、敢て進まず。こゝに於て、常德・長沙・岳澧衡は、二三月の間、先後賊に陷り、且つ僞劄を散布し、四出誘煽す。之に次いで、襄陽總兵楊嘉來は襄陽を以て賊に應じ、廣西將軍孫延齡・提督馬雄は桂林を以て賊に應じ、四川巡撫羅森・提督鄭蛟麟・總兵譚洪・吳之茂は四川を以て賊に應じ、福建の耿精忠

は之を聞いて、亦た同時に反し、數日にして、六省皆陷る。延齡は孔有德の女婿にして、康熙五年より廣西に鎭守たりしが、部下の都統王と合はざるを以て此に至るといふ。

三桂の進軍

すでにして、三桂親ら常澧に赴いて、戰を督し、工司苗猓を驅つて軍威を助け、點楚の山木を伐つて、樓船巨艦を造り、滇銅を鑄つて錢を爲り、文を利用といひ、川湖の粟を轉じて、軍に餉す。賊將吳應麒、岳州に踞し、城外に三重の濠を濬ひ、陷坑鹿角を設けて、步騎を拒ぎ、洞庭峽口に於て梢樁を攢立して、舟艦を拒ぎ、而して澧州石首華容松滋、皆重兵を布いて、犄角を爲す。清兵、荆襄武昌宜昌の諸郡に雲集するも、敢て江を渡つて、其鋒に攖るものなし。

清廷の出軍

三桂、荆楚の大兵、その前を扼するを以て、乃ち其將をして、道を分ち、一は長沙より江西を窺ひ、一は四川より陝西を窺はしむ。江西の兵は、袁州に入り、萍鄉安福上高を陷れ、耿精忠の兵と合し、連りに三十餘城を陷る。帝、貝勒尙善に命じて、安遠靖寇大將軍となし、順承郡王を助けて岳州の賊を討たしめ、安親王岳樂に命じて定遠平寇大將軍となし、江西に出てしめ、又簡親王喇布を以て、揚威大將軍となし、師を統べて、江南を鎭せしめ、貝勒洞鄂を以て定西大將軍となし、莫洛とともに陝より蜀を攻めしめ、康親王傑書を奉命大將軍となし、貝子傅喇塔を寧海將軍となし、浙より閩を討たしめ、西洋人南懷仁に命じ、多く輕便の火礮を製し、山を越え、水を渡り、以て行軍の用を利せしむ。

王輔臣

この冬、陝西提督王輔臣、陰に異志を生じ、その衆二千を唆して、經略尙書莫洛を寧羌に攻めて之を殺し、降つて、三桂に附き、平凉に據つて、漢中を陷る。三桂之を聞いて、銀二十萬を給犒し、又蜀將王屏藩・吳之茂をして、漢中より隴右に出てゝ援應せしめ、徧ねく僞劄を布き、所在響應、土寇羌番、蜂起す。その翌十四年、秦州・蘭州・鞏昌・定邊・靖邊・臨洮・慶陽・綏德・延安・花馬池、相繼いで失し、輔臣自ら平凉に踞し、その黨をして、分つて各郡に據らしめ、隴右皆賊に陷る。三桂この機に乘じて、路を秦蜀に取り、以て京師を犯さむとせしが、圖海の西下するに及びて、事成らず。

圖海の將略

はじめ、蒙古の察哈爾部、兵を徵さるゝに際し、命を拒んで、亂を爲す。時に京師の禁旅南征し、宿衛悉く空、復た遣るべきものなし。詔して、滿洲八旗の家奴健なるも

の數萬をして、大學士圖海に付して、北征せしむ。圖海、德勝門外に赴き、敖塲に閲し畢り、即日趣して行き、信宿を許さず、過ぐるところ、州縣村堡、驟に掠むるもの、悉く問はず、數日ならずして、塞を出で、賊境に至り、令を下して曰く、察哈爾は元の後裔、數百年の珍寶山積す、爾等能く之を破らば、富且つ此に百倍せむ、とす、と。衆踴躍、一以て、百に當らざるなく、遂に之を破つて歸る。十五年、圖海を以て定遠大將軍となし、往いて、西師に莅ましめ、貝子洞鄂以下、成な節度を受く。三桂方に王屏藩・譚洪・吳之茂を遣し、涼賊と合せむとす。圖海至り、諸將を督し、一戰して、大に賊を平涼城北に破り、その虎山墩を奪ひ、賊の餉道を斷ち、俯して城中を瞰ひ、礮を以て、之を攻む。王輔臣、大に懼れ、六月遂に僞巡撫總兵等を率ゐて降る。王屏藩等、又屢ば敗れ、遁れて漢中に還り、固原慶陽の諸郡、皆復す。

これより先、十三年九月、安親王岳樂、定遠平寇大將軍となり、江西に入り、翌年建昌廣信饒州を復し、三桂西上の時に乘じて、袁州より賊を攻め、奇兵をして、間道より其城を襲破せしめ、遂に澧鄉より萍鄉を攻め、賊萬餘を斬る。夏國相、城を棄てゝ走る。遂に進んで、長沙を攻むるや、乃ち急に松滋より軍を回し、自ら將として、長沙

清兵討賊の一幅

を救ひ、隔江山・嶽麓山に屯し、胡國柱をして城中を守らしめ、馬寶・王緒、城外に營し重濠を堀り、鐵蒺藜を布き、象陣を列し、盡く夷陵南漢の諸賊を調し、力を合せて、拒守す。帝、賊兵を併せて長沙を守り、その湖口各路、守備必ず虛なるを以て、荆岳の兵に命じ、江を渡つて、急に進ましむ。こゝに於て、勒爾錦、賊を公安の虎渡口に敗り、察兒をして賊を澧州の太平街に敗らしむ。尙善、舟師を遣して洞庭に入り、君山に克ち、賊舟五十艘を得たり。時に賊の下游の兵少く、風を望んで潰遁し、苟くも、官兵長驅すれば、澧州・常德・湘陰、刃を迎へて、立どころに解け、以て長沙を夾攻すべし。而して、諸軍遷延して進まず、又力めて虎渡口を拒がず、松滋上游の賊兵、救至るを致す。勒爾錦、即ち大兵街を棄てゝ守らず、潛つて暑潭と稱し、引いて荆州に還る。尙善の舟師、亦た未だ賊の餉道を斷つ能はず、江湖の險、復た賊の據となる。三桂復た賊將高大節をして、醴陵萍鄉より出て、吉安を陷らしめ、以て安親王の後路を斷つ。簡親王、兵を南路に頓して援けず、屢ば之を促し、はじめて、軍に赴く。高大節、驍果にして善く戰ひ、將ゆるところの選鋒四千、少を以て衆を擊ち、清兵輙ち挫く。

耿尚二藩の反正

はじめ、耿精忠の反するや、都統馬九玉・總兵曾養性・白顯忠の三人を以て爪牙となし、三路より兵を出す。十三年六月、康親王傑書を以て、奉命大將軍となし、貝子傅喇塔を以て寧海將軍となし、之を伐たしめ、互に勝敗あり、精忠、臺灣の鄭經と約して、潮惠を掠めしめしが、幾もなくして、隙を生じ、遂に清軍の乘ずるところとなり、仍つて、兩路の兵を失ひ、鄭氏復た虛に乘じて、その後に逼り、漳泉邵汀の諸府を奪ひ、閩地半ば鄭氏に入り、大軍すでに延平に至るや、風を望んで、瓦解し、精忠倉皇、僞すところを知らず、乃ち其子顯祚を遣し、軍前に詣りて、總督の僞印を獻じ先づ范承諾を害して口を滅し、而して後に出でゝ降る。詔して大將軍に隨つて、海寇を防剿し、以て其罪を贖はしむ。これより先、尚可喜晉王に晉封せらる。こゝに至りて、廣東十郡、その四を失ふや、可喜東西敵を受け、力支へず。且つ自ら病に臥し、將に起たざらむとするを陳じ、急に大兵の來り援けむことを請ひ、將軍覺羅舒恕、詔を受けて廣東に赴き、はじめて至る。この年四月、之信その父可喜を幽し、三桂より招討大將軍の僞號を受け、幟を易へ、服を改め、兵を以て其府を守りしが、すでにして、之を悔ゆ、十二月、欵を官軍に通じ、翌年五月、廣東を以て降る。その翌月、可喜憤を發して死せしを以て、之信を以て其封を襲がしむ。こゝに於て、廣東略ぼ定る。廣西の孫延齡も、亦た蒼梧の流寓傅宏烈の言を以て反正し、賊勢漸く衰ふ。

吳三桂の僭號

高大節屢ば官軍を破るや、賊將韓大任、之を胡國柱に構へ、因つて怏々として死し、十六年三月、吉安遂に下る。三桂乃ち胡國柱・馬寶をして、尚之信を韶州に攻めしめしが、九月に亘りて拔く能はず。唯だ吳世琮、桂林に向ひ、十五年十二月、孫延齡を殺し、廣西の大半を略せしのみ。時に三桂年六十七、すでに陝西閩粵の三大援を失ひ、こゝに至りて又江西を失ひ、大兵湖湘の間に雲集し、疆宇日に蹙まり、且つ軍興調發、財用耗竭、川湖の賦稅、兵餉を供するに足らず、四方に輕んぜられ、情竭き勢屈せむことを恐れ、乃ち帝號を竊んで、自ら娛まむと欲し、その下、亦た爭つて勸進す。こゝに於て、衡州兵衙に當るを以て、長沙より徙つて、之に都し、壇を南嶽の麓に築き、十七年三月朔を以て、天に郊して位に即き、昭武と改元し、衡州を改めて定天府となし、百官を置き、諸將を封じ、新曆を造り、雲貴川湖の鄉試を舉げて、遠近を號召し、殿瓦黃を易ふるに及ばず、漆を以て之を髹し、蘆舍萬間を構へて、朝房となす、適ま大風雨、潦草禮を成して罷む。

はじめ、十四年、關陝の變起るや、四方騷繹す。帝親征し、荆州に駐まり、迎に就いて調度せむと欲す。議政王大臣、京師の根本重地たるを以て、車駕遠く出づれば、訛言ありて、奸宄竊に發せむことを恐れ、固く請うて行を止む。こゝに至りて、帝、諸軍の曠日持久を慨し、復た親征の令を下し、王大臣、復た賊勢日に蹙り、遠出を勞するなきを以て請となす。帝の意、未だ決せず。會ま賊、馬寶・王緒・胡國柱を召し回し、銳を悉くして永興に逼る。永興は衡州の門戶、相距ること、わづかに、百餘里、賊の必ず爭ふところ、都統伊里布・副統哈克山、相繼いで、戰沒し、河外の營壘、賊據となる。前鋒統領碩岱等、城に入つて死守し、賊三面環攻、晝夜息まず。簡親王、茶陵に屯して、敢て救はず。穆占郴州より兵を遣して、來り援け、亦た敢て進まず。城、礮に壞たれ、土を甕にして、且つ築き、且つ戰ひ、凡そ二十一日、危に瀕するもの數ばなり。八月二十一日、忽ち營を拔いて去る。蓋し此月十七日、三桂病んで死せしを以てなり。諸賊召されて皆衡州に赴く。この月、諸王奏聞し、帝、はじめて親征の議を罷む。

三桂の死

三桂の兵を擧ぐるや、諸將或は言ふ、宜しく疾行して江を渡り、全師北に向ふべし、と。或は言ふ、宜しく直に金陵を下し、長淮を扼して、南北の還道を絕つべし、と。或は言ふ、宜しく巴蜀に出て、關中に據り、殽函を塞いて、自ら固むべし、と。三桂年すでに老ひ、事を更ふること多く、因つて、萬全に出でむと欲して、滇黔の根本を棄てず。はじめて湖南を得るや、即ち令を諸將に下し、江を過ぐるを得るなからしめ、以爲へらく、事縱ひ成らざるも、長江を盡して國すべし、と。故に兵を用ふること數歲、未だ嘗て東北に長驅せず、大兵四に合し、境蹙まり、身死するに及び、諸賊聚謀、出づるところを知らず。夏國貴、復た滇を棄てるの議を倡へて謂ふ、今日の計、進死あつて退生なし、宜しく湖南を棄てゝ顧みず、北向して天下を爭ふべし。一は陸軍荆襄に出てゝ、蜀賊に合し、直に河南に趨き、一は水軍武昌に下り、舟艦を掠めて、江左を順撼せむと。諸賊ともに滇を棄つるを重かり、馬貴首として梗議す。蓋し賊、この時南北ともに已に戒嚴し、大兵鼓行して、その前後に隨ひ、たとひ死を冒して衝突するも能く爲すなきを知ればなり。こゝに於て三桂の孫世璠、滇より衡に至り、はじめて喪を發して僭號し、洪化と改元し、喪を迎へて滇に歸る。

賊軍の謀策

時に安遠靖寇大將軍貝勒尙善、すでに歿し、多羅貝勒察尼を以て、之に代らしめ、

十八年正月、岳州を復すや、諸賊震恐す。勒爾錦、亦た舟師を率ゐて荆州より江を渡り、夷陵澧州の賊、皆舟師を以て降る。安親王、長沙より衡州に進むや、吳國貴・夏國相亦た遁れ、國貴は馬寶とともに武岡楓木嶺の天險を扼し、胡國柱は辰州に踞し、ともに黔に入るの峽口を守る。安親王、武岡に至り、國貴を破殲し、貝勒察爾、間道より辰州の辰龍關を攻めて、國柱を貴陽に走らす。これを湖南より滇に入るの師となす。この年七月、吳世琮、亦た廣西に敗死し、大將軍子貝塔賴、南寧より雲南に進み、連りに賊を破る。これを粵より滇に入るの師となす。提督趙良棟・王進寶は十八年十月を以て漢中を定め、進んで四川に入り、翌年正月成都を復し、進寶をして四川の餘賊譚洪等に備へしめ、良棟、雲貴總督となり、川師を統べて進擣す。これを蜀より滇に入るの師となす。三路の官兵、すでに境に臨み、滇中の平らぐ、將に日あらむとす。

三路の官兵

吳世璠の死

この年三月、安親王岳樂、久しく外に勞して強寇を殲克せしを以て、先づ大兵の半を率ゐて凱旋せしめ、貝子彰泰を以て、代つて定遠平寇大將軍となし、進んで雲貴を取らしむ。十月に至り、大軍平陽より貴陽に趨き、翌二十年二月、雲南に入り、賴塔の軍と合して、大象と戰ひ、遂に五華山の宮城を環つて長圍を爲す。これより先、賊將胡國柱・馬寶等、蜀に出でゝ牽制を圖りしが、省城の急なるを聞いて皆回り救ふ。世璠地を割いて師を西藏の達賴喇嘛に乞ふ。その書、清軍に得られて達せず。九月、趙良棟、蜀より滇に入り、兵を分つて國柱等を追ひ、包圍の師に合す。十月城中食盡き、援絶え、南門を守るの賊、內應をなし、門を啓いて、師を納る。二十五日、世璠及び郭壯圖、皆自殺し、夏國相・馬寶等、俘にせられ、雲南・貴州・湖南の地、悉く平らぐ。三桂の骸骨を折じて、海內に頒示す。諸將爭つて子女金帛を取る、惟だ趙良棟、嚴に軍士を禁じ、幷せて藩產を簿籍して獻ず。

三藩の平定

これより先、尙之信の降るや、仍ほ兩端を懷くを以て、詔して、宜章を授け、韶を授け、梧を授け、永興を授くを趣かすも、皆故に托して行かず。三桂の死するや、はじめて、調遣を聽き、旋つて廣州に回り、巢穴に踞す。巡撫、その不法を劾す。後、遂に變を謀り、詔して自盡を賜ふ。大軍の粵に入りし時、可喜の棺を啓く、冠服皆國制に遵ふ、故に全家族籍に歸るを得たり。耿精忠、亦た諸弟部將の爲に、その逆志を首せられ、遂に磔死す。

三藩の逆魁、皆すでに誅死し、明の餘孽は、ひとり臺灣の鄭氏あるのみ、而して、その討剿、亦た十年を出てず。

第四十章　臺灣の鄭氏

鄭成功、臺灣を收む

順治十七年、鄭成功の敗れて江南より歸るや、乃ち臺灣を奪うて、窟穴となす。當時臺灣は荷蘭人の有に屬せしが、適まその會計主任、二十萬の負債あり、發覺して償ふなからむことを恐れ、乃ち走つて成功に投じ、鄉導たらむことを請ふ。成功地圖を覽て、歎じて曰く、これ亦た海外の扶餘なり、と。十八年、先づ百艘を以て澎湖に泊し、鹿耳門に進む。門外に膠淺數十里あり、海舟岸に近づくを得ず、荷蘭人又大艘を沈めて港口を塞ぐ。こゝに及びて、潮驟に漲ること丈餘、數百艘、忽ち岸に抵り、荷蘭人、倉卒支へず。六月遂に赤嵌城に克つ。こゝに於て、蘭人安平城を守る。その城、亂石砌を疊み、火煆灰を成し、融して石城となし、堅凝にして礮を受けず、半載まで下らず。

蘭人臺灣を拋棄す

この年十月、清廷、鄭芝龍を柴市に棄て、子孫京に在るもの、皆之を戮し、各省沿海邊界の居民を遷し、以て接濟を絶つ。成功安平を圍んで去らず。知事コエット急を告げ、兵船十隻、兵士七百バタヤより來着し、攻守の勢や、一變せむとす。然れども成功之を擊つこと愈よ急らず、時に清將喜をコエットに送り、兵を合せて鄭氏の殘兵、大陸沿岸の地に在るものを驅り、次いで、その本隊を擊たむとす。蘭人乃ち兵艦五隻を派して、之を助く。成功この機に乘じ、三面より鋭を盡くして肉薄し、その水源を塞いで、之を困しめ、又風に因つて火を縱ち、その夾板を燒き、蘭人に告げて曰く、この地は迺ち先人の故物、珍瑤は不急の物、悉く聽るして歸らしめむ、地は我に歸せ、と。蘭人重圍に在ること九月、兵士千六百を失ひ、遂に大船を以て去り、全く其地を放棄す。臺灣の占領、三十八年といふ。

鄭氏臺灣の治

成功、すでに臺灣を有し、據るところの金厦二島と相犄角し、諸土酋、皆約束を受く。こゝに於て、臺灣を改めて、安平鎮となし、赤嵌城を承天府となし、總じて、東都といひ、縣を天興萬年といふ。成功すでに、清の遷界命下るを聞き、嘆じて曰く、吾をして、諸將の意に狥ひ、自ら斷じて、東征し、一塊の土を得ざらしむれば、英雄武を用ふるの地なからむ。沿海萬里、盡く之を委棄し、田廬丘墟墳墓をして、主なからしめ、寡

婦孤兒をして、天末を望哭せしむ。惟だ吾が故を以てなり。今披猖と雖も、亦た復た何ぞ用ひむ、但だ餘燼を收拾し、鋒を銷し、燧を灌し、兵を息み、農を休め、天下の清を待つ、未だ晩からざるなり、と。こゝに於て、處士陳永華を禮して謀主となし、屯墾を闢き、戰備を修し、興法を立て、職官を定め、學宮を興し、池館を起し、丁男を計り、老幼を養ひ、土方を物し、明の宗室遺老の來り歸するものを待ち、臺人大に集り、鄭氏遂に安し。

清廷すでに堅壁清野の計をなし、構陷を杜ぎ、兼ねて鄭氏をして寇を爲すなからしむ。張煌言、書を成功に貽つて曰く、この十數萬の生靈を棄てゝ收めず、何すれぞ、夷島を爭ふや、一隅に苟安すれば、金厦亦た守る能はざるに至らむ、と。然れども、成功の本意は、根據を堅くし、然る後、徐に恢復を計るに在り。その康熙元年、使を比律賓列島に派し、參勤朝貢を西班牙の總督に求めし一事を以てするも、その志を知ること難からず。この年五月、明の延平郡王、招討大將軍朱成功、臺灣に卒す。年三十九。蓋し憂憤狂を病んで此に至るなり。臺人その弟襲を奉じて、經略となす。十月に至り、成功の長子鄭經、師を帥ゐて、臺に往く。黃昭、襲を奉じて、之を拒むや、經、昭を

鄭成功卒す

射つて殪し、遂に臺に入り、主謀者を收殺し、餘は寘いて問はず、襲を待つこと初の如し。

この年、監國魯王、臺に卒し、翌二年、桂王緬甸に執らへられて、雲南に殂せしも、經なほ永曆の正朔を奉ず。これより先、蘭人すでに臺灣を去りしも、報仇の心、なほ止まず、將官ボルト、在バタヴィア評議員會の命により、十二隻の兵艦を以て、閩江の口に着し、厦門を奪はむとし、其地の清將に輔助を求めしも、應せざりしを以て、城を襲ひ、火を縱つて去り、この年、又十七隻を引率して、臺灣海峽に至る。耿繼茂、之と合し、金門を奪ひ、次いで厦門を陷る。こゝに於て、福建全省、清の有となり、蘭人は、その報酬として、遂船二隻を得、進んで、臺灣を克復せむとせしが、鄭經の爲に迎へ擊たれ、敗れてバタヴィアに歸り、遂に志を臺灣に絕つ。その翌三年八月、張煌言、懸山花學に在り、清軍の爲に擒にせらる。

蘭人の寇

鄭經、事を以て、鄭泰を殺すや、その子纘、弟鳴駿、亡げて清に歸し、將士清に歸するもの多し。こゝに於て、清主南征に銳意、將士をして、道を分つて、疾く進ましむ。經、死

陳永華

鄭經、沿海に寇す

士を分部して、之を禦ぎしも、衆寡敵せず、退いて銅山を守る。清兵島に入り、兩城を陷し、其地を棄て、その寶貨婦女を收めて北し、兩島の民、燬す。これより後、親族の兵將、大抵皆清に降り、ひとり、陳永華・馮錫範等あり、經の臺に還るに及び、大小の庶事、悉く永華に委す。永華政を爲す、頗る儒雅を雜へ、民と休息し、東都を改めて、東寧となし、諸將に土地を分ち、苑囿を修め、西する意なきを示す。康熙四年、清、水師提督施琅をして、臺灣を攻めしむ。船、外洋に至り、颶風の爲に飛散し、克たずして還る。八年清主、人をして、經を招諭せしめしが、從はず。清亦た敢て兵を加へず。經、その將をして島上に往來して、互市せしめ、浙閩の沿海、全く事なし。

三藩の事起るや、耿精忠、援を鄭氏に乞ひ、漳泉二府を約す。すでにして、精忠約に背き、二府を割かず、閩中故と鄭氏の舊部曲多く、海澄總兵趙得勝、その屬劉國軒廣東總兵劉進忠、皆叛いて經に降り、泉漳潮、皆經の有となる。吳三桂、使を遣し、耿鄭を平げしめむとせしが、成らず。精忠、前後に敵を受けしを以て、十五年、清に降り、康親王傅貝子の師を導き、鄭氏を攻め、翌年漳泉以下の諸州を復す。十八年、經、劉國軒に中提督を授け、道を分つて入寇し、六月海澄を降し、漳泉に逼り、漳平長泰同安惠安等を取る。耿精忠、漳城を棄て、其鋒を避けむとす。すでにして、巡撫吳興祚・將軍貝子賴塔等、泉州の圍を解き、總督姚啓聖・提督楊捷等、漳州の江東橋に克つ、國軒海澄に據り、相持すること一年、下す能はず。時に吳三桂、すでに死し、湖南平らぎ、水師事なきを以て、十九年、清主、萬正色に詔し、大に舟師を會し、海上より、閩に赴き、姚啓聖・吳興祚とともに荷蘭人の助を借り、往いて島を攻めしめ、進んで海壇に逼る。經、林陞・朱天貴等に命じて、之を禦がしめしが、清軍の衆を畏れて退き、風を望んで潰え、海上の諸鎮、多く清に降る。こゝに於て、鄭經・劉國軒、遂に金厦二島を棄てゝ、臺灣に歸る。

賴塔の招降

十九年八月、康親王、京師に還り、兵を留めて、金厦二島を守らしむ。こゝに於て、貝子賴塔、書を鄭經に與へて曰く、海上兵を用ひてより以來、朝廷屢ば招撫の令を下し、而かも議終に成らず、皆封疆の諸臣、削髮登岸に執泥し、彼此齟齬するに由る。臺灣は本と中國の版籍に非ず。足下父子、自ら荆榛を闢き、且つ勝國を睠懷し、未だ嘗て吳三桂の僭妄の如くならず。本朝亦た何ぞ海外一彈丸の地を惜み、田橫壯士の

鄭克塽

其間に逍遙するを聽かざらむや。今三藩殄滅、中外一家、豪傑時を識れば、復た已に灰にするの焰を噓して、瘡疾の民を毒するを思はざらむや。若し能く、境を保ち、兵を息むれば、此より必ずしも岸に登らず、必ずしも薙髮せず、必ずしも衣冠を易へず、臣と稱して入貢するも可なり。臣と稱せず、入貢せざるも亦た可なり。臺灣を以て、箕子の朝鮮となし、徐市の日本となす、世に於て患なく、人と爭ふなければ、沿海の生靈、永く荼毒を息めむ、惟だ足下之を圖れ、と。經、報書して、約の如くせむといひ、惟だ海澨を留めて、互市の公所となさむと欲す、總督姚啓聖、可かず、議遂に格ず。

康熙二十年、延平郡王の世子朱經、臺灣に卒す。凡そ經位を嗣いで十九年、永曆の正朔を奉じ、招討大將軍の印を佩び、世子と稱して、命を受くるところなきなり。長子克壓は、螟蛉子なり、原姓は李、經の嬖妾林、之を養ふ、經知るなきなり。經の西するに及び、克壓を監國となす。克壓長じて才あり、嚴毅頗る成功に倣ひ、諸弟之を畏る。經が敗れて東に還るに及び、國を以て、克壓に付す。幾もなくして、經卒す。諸弟揚言して曰く、克壓は吾が骨肉に非ず、一旦志を得れば、吾が屬、遺類なからむ、と。侍衛馮錫範、先づ計を以て、陳永華の兵柄を罷め、克壓助を失ふ。經の母董氏、間言を入れ、命

施琅の水軍

じて、監國の印を收めしめ、克壓を別室に幽殺し、次子克塽を立て、延平王を襲がしむ。克塽幼にして、髮はじめて額を覆ふ。劉國軒に武平侯、馮錫範に忠誠伯を授け、事皆錫範に決し、鄭氏遂に敗る。

この年、姚啓聖奏す、鄭經死し、子少く、國內亂あり、時失ふべからず。二十二年六月、萬正色を以て陸路提督となし、施琅を以て水師提督となす、將に師を出さむとするや、啓聖北風を候して、直に臺灣を取らむと欲す。琅、南風に乘じて、先づ澎湖を取らむと欲し、奏して言ふ、澎湖取らざれば、臺灣取るべき理なし、澎湖失へば、臺灣攻めずして自ら潰えむ、請ふ戰艦三百、水師三萬を以て、獨り討賊に任ぜむ、と。之に從ふ。時に劉國軒、精兵二萬を督して、澎湖を守り、林陞、丘輝、衆二萬を約して、雞籠嶼に集り、守禦甚だ嚴にして、舟泊するを得ず。清軍、七單灣に次す。會ま颶風夜發し、怒濤山立、清の舟師、前鋒飄散し、賊艦四面圍攻す。矢、琅の目に集つて退き、甲裳を以て首を裹み、諸將を集めて、軍令を申べ、總兵より以下、皆按ずるに失律の罪を以てす。諸將蒲伏して祈請し、功を立て、自ら贖はむことを請ひ、兵氣復た振ひ、虎井嶼を陷れ、乃ち師に誓ひ分つて八隊となし、琅自ら一隊を統べ、中に居て調度す。國軒火矢を

鄭氏の降服

發して噴筒し、燔焰怒張す。清兵銳に乘じて夾擊し、辰より午に至り、兵氣益す厲、國軒の軍敗れ、林陞・丘輝等、皆戰死し、大小戰艦二百餘艘燒亡し、餘衆多く清に降る。國軒勢の敵せざるを知つて、急に走舸に乘じて逸し去る、澎湖すでに陷る。琅、降卒四千餘人に給するに饟米を以てし、傷いて未だ死に及ばざるものは、醫治して送還す。臺灣大に震ふ。明の寧靖王術桂、自ら以へらく、明家の龍種、義として、辱しむべからず、と。乃ち冠服を具へ、臺人を招き、從容別飲し、環を投じて死し、諸姬皆殉す。臺人爲に流涕す。

清兵勝に乘じて、臺灣に進み、鹿耳門に至る、膠淺入るを得ず。海中に泊すること十有二日、潮至らず、忽ち大霧、潮の高さ丈餘、舟師浮んで入る。鄭氏皆戒めて曰く、先王臺灣を得るや、鹿耳門漲る、今復た然り、天なり、と。七月使を遣して、降を議す。施琅、姚啓聖、奏聞し、八月敕至る。こゝに於て、國軒及び馮錫範・何祐・鄭克塽を以て降り、成功受くるところの明の延平郡王・招討大將軍の金印各一、公侯伯及び將軍都督等の銀印五を繳上し、土地戶口府庫軍實を籍して獻じ、臺灣平らぐ。その秋、詔して、琅を靖海侯に封じ、克塽には公爵を授け、國軒・錫範、皆伯爵たり。鄭氏は、成功より三世に傳へ、凡そ割據すること三十有八年、永曆の平朔を奉ずること二十年。克塽位に即いて二年、時に年十五といふ。

成功の歸鄭

はじめ、黃梧の降るや奏して言ふ、鄭氏石井山の祖墓、形勢昌雄、宜しく之を剉して、その王氣を泄らすべし、と。こゝに於て、晉江縣の大覺山・南安縣の覆船・橄欖・金坑の諸山、五墓皆毀つ。唯だその石井山の祖墓、五馬奔江と號するものは、所在を知らず。こゝに於て、克塽請うて成功及び經の喪を以て、南安に歸葬せむとす。世祖、成功は明の遺臣、吾が亂臣賊子に非ざるを以て、之を許して、田橫の故事の如くせしめ、因つて盡く其地を收め、臺灣府・諸羅・臺灣・鳳山の三縣を置き、西を澎湖廳と稱し、總兵、水陸の兵八千、澎湖副將、水師二千を轄し、その後、復た萬有四千を增して、重鎭と稱す。

臺灣交通の利

さきに清廷、滿州の大人を差し、海疆を閱視せしめ、沿海奸民、逋逃の寇に通ぜむことを恐れ、遂に壁を堅うし野を清むるの計をなし、沿海の居民八十八堡及び海澨邊境の人民を內地に移し、凡そ二三百里、棄てゝ甌脫となり、畜牧を荒し、廬舍を

臺灣歴史の眞相

焚き、百姓盡く徙つて內地に入り、臺寨を築いて、界となし、此を過ぐるものは、命じて透越となし、立どころに斬つて赦さず。閩中魚鹽の利、天下の最たり。百姓藉つて生をなすも、旨を奉じてより、片板海に下るを許さず、蕩析流離、又海上魚鹽の利を失ふ。こゝに於て、范承謨、再疏して、之を復す。臺灣すでに服するや、猶ほ商舶の洋に出でゝ互市するを禁ず。施琅等、屢ば議して之を開く。

臺灣の地、はじめに倭寇に屬し、蘭人の占領に歸し、次いで鄭氏の根據たりしが、こゝに至りて、清國の管轄に屬し、我が明治二十八年、日本に割讓るまで、凡そ二百十二年、その所有權を永續せり。而して、この間、同島の歴史は、天變地異を除いて、盡く內亂の事に係る、その最たるものは、康熙六十年の朱一貴と乾隆三十五年の林爽文とあり。之に就いては、後章便を以て記入するところあるべきも、その以後の叛亂は、土寇の類にして、大局に關するところ少きを以て、特に詳述するを須ゐざるなり。

清室の盛世

（五）清の盛世及び疆外經略

第四十一章　露國東方侵略の權輿

長白山邊、僻遠の區より起りしツングスの族の一派は、首に塞外の蠻族を征服し、蒙古の南侵、倭寇の剽略、流賊の蜂起に惱みたる明室を倒し、半世紀を出でざるに、東方亞細亞の曠土を掩有し、聖祖即位、三藩の叛亂を靖んじ、外は臺灣を下し、清室の基業、漸く固し。然れども、清初の英主は、宋明二代、ひとり中原を領して、足れりとなせしに似ず、大に塞外を經略し、たとひ、元室の盛に及ばずと雖も、當時の功業、頗る赫灼たるものあり。聖祖在位六十年の後を承けて、世宗の世十三年、而して、高宗亦た六十年の長祚を亘り、前後通じて百三四十年間は、東方帝國最後の極盛期に屬し、康熙乾隆の二代は、ひとり文運の盛を誇るのみならず、武略頗る稱すべく、北は西比利亞及び中央亞細亞よりせる露國の侵略に對し、南は印度及び東南亞細亞よりせる英人の東漸に對し、その交渉の結果、忽ち世界的大局の變化を惹起し、延いて今日に及ぶ。その討究、固より徒爾ならざるなり。

露國の勃興

はじめ、欽察汗國の中葉以後、莫斯科の太公宜萬一世、全國徵稅の大權を附せらるゝや、漸次勢を得たること、かつて前に述べしが如く、宜萬三世に至りては、東羅馬皇帝の末裔たる公主を娶り、遂に欽察汗國と絕ち、其兵をヲガ河畔に敗り、俄羅斯の諸公を併呑して、獨立を恢復せり。

欽察汗國の滅亡

さきに、コイリジヤクは、帖木兒の後援を得、トクタミシユに代りて、欽察汗國に主たりしが、帖木兒が印度を討たむとして、師を退くるやトクタミシユの黨、復た集つて、叛をなし、白黨汗と哥里米汗とは、爭鬪止むときなく、哥里米汗ウルグ、ムハメッド、一時欽察汗の位を占めしが、幾もなくして、白黨汗クチユク、ムハメッドの爲に敗られウルガ上游の不里阿兒の地に遁れ、喀山汗の祖となる。クチユク、ムハメッド死するや、その子アーメッド嗣ぐ。この時、欽察汗國は、殆んど分崩して、復た收拾すべからず。汗の號令は、わづかに國都薩萊の近傍に行はるゝのみ。北には喀山汗あり、西南黑海の濱には哥里米汗あり、東南阿拉海附近には、月即別族蕃殖し、東方吉利吉思荒原には、古しへの黠戛斯族、跋扈するあり。王氣すでに衰へ、復た之を奈かむともするなし。宜萬三世、機乘ずべしとなし、喀山・哥里宋の二汗と結び、アーメッドに背くアーメッドは、俄羅斯の怨敵たる波蘭と結びて、之を伐ちしが、反つて陣沒し、欽察汗國、こゝに亡び、俄羅斯は、新に勃興せり。

露國の統一

欽察汗國、すでに亡びしと雖もアーメッドの子孫は、仍ほドン・ウラル兩河流域を占領して、大斡兒朶汗國を建て、アーメッドの從子等は、オルガの下流に阿斯坦拉汗國を建て波蘭と通じて、宜萬を防ぎ、宜萬は、喀山・哥里宋の二汗國と結びて、之に當り、餘威遠く西伯利汗・畏吾兒汗の諸國に及ぶ。すでにして、哥里米汗メングリギライ、遂に大斡兒朶汗國を滅し、國勢日に振ひ、その子ムハメッド、ギライに至り、喀山汗の王統、絕えしを以て、其弟を推して、之を承けしむるや、宜萬三世の子ヴアシリ四世は、哥里米の强大にして、已に利あらざるを恐れ、之を絕ち、喀山汗國は黨を分つて兩國に與し、然る後、喀山汗・阿斯坦拉汗の哥里米に通じて、專ら俄羅斯に當るや、ヴアシリ四世の子宜萬四世、遂に喀山汗を滅し、次いで阿斯坦拉汗を併せ、ひとり其地に雄たり、時は東方支那に在りては、明の嘉靖の末、諸達倭寇の警、日に迫り、淸の太祖、漸く武を用ひむとする頃なり。こゝに於て、欽察汗國の舊土、悉く俄羅斯に入りしが、ひとり哥里米、なほ下らず、却つて土耳其に屬して、その後援を仰

ぎ、仍つて後年露土交戰の遠因をなせり。

露國東侵の因

宜萬四世、さきに皇帝と稱し、すでに蒙古族の諸汗國を併せしを以て、更に轉じて東方に向はむとす。偶まドン河畔の哥薩克部長エルマルクといふもの、その部下を率ゐて投降し、西伯利亞遠征の軍に從ふ、これを露國東侵の始となす。

哥薩克の語源は、韃靼語に出で、元と盜賊の義なりしが、又山賊の意をも有するに至れり。その住地は、露西亞・波蘭の南部、人烟稀疎の區より始めて、土耳其・韃靼の境に亘り、人種も亦た純ならずして、小露西亞人・波蘭人・韃靼人・大露西亞人等の雜種なり。その族に二あり、一はドン流域に住し、一はニーベル流域に住す。宜萬四世、その暴横を憤り、兵をドン河邊に遣し、之を剿平せむとす。その長エルマルク、膽略あり、その露人に敵せざるを見、揚言して曰く、今日の計、唯だ進むあるのみ、宜しく命を天に委し、韃靼人の疆土に闖入せむ、と。これより先、金黨汗國の衰へて、欽察汗國の分裂するや、月即別族は、阿拉海・裏海の北邊一帶の地に割據せしが、昔班の後裔に吉利吉思汗庫程といふものあり、今のトボルスク附近の月即別族を服して、自ら

西伯利汗國の滅亡

西伯利汗と號し、露西亞への納貢を絶ち、西伯利府城を修めて、附近の諸汗を羈屬し、勢を負うて、屢ば露西亞の邊境を侵す。こゝに於て、哥薩克のエルマルクは、千五百八十年の頃より、連りに其地を侵し、八十一年（明の萬曆九）の冬、庫程を破りて、之をイシムの曠野に走らし、西伯利城に入り、韃靼・俄斯札庫窩克爾の諸族を服し、其地を宜萬四世に獻じ、前罪を償はむことを請ふ。宜萬四世、之を嘉し、エルマルクを封じて西伯利公となし、その部下の哥薩克人、賞賜各差あり。

西伯利亞の經略

千五百八十三年、宜萬四世はボルホフスキーを以て、西伯利將軍となしグルホフを以て事務官となし、西伯利城に入りエルマルクに代つて民政を總轄せしめ、後各府に將軍を置き、兵民兩政を掌り、調稅財賦を轄せしめ、各自獨立して、羈束するところなく、唯だ莫斯科に西伯利政廳を置くのみ、こゝに於て、將軍の權力、異常にして、自ら弊害なき能はず。

韃靼人の退却

エルマルクの韃靼征服は、益す其歩を進めしが、千五百八十四年、庫程汗の部下たりしカラチアの爲に敗られてクルチス河に沒し、露兵は西伯利城を棄てゝ、莫斯科に退却せり、然れども、その翌八十五年に至り、露將マンストロフは西伯利に

至りイルチス・トボル兩河の會點にトボルスク城砦を創め、八十八年に至り、將軍チウルニフ、カラチア等を捕へて、莫斯科に送致し、韃靼人は、遂に西伯利城を棄てその地荒廢して、住民なきに至れり。こゝに於て、トボルスクを以て、全州の首都となり、各地に城砦を增建せり。

千六百十三年、露國王室の革運に際し、現代帝室の鼻祖ミケール三世、貴族等に推れて、位に即くや、大に意を東方に鋭にしペートル、アリプチア、也尼塞（エニセイ）河畔に城堡を建て、はじめて、ツングス族と戰ふ。時に清の太祖天命二年にして、露清の關係漸く相近かむとするを知るべし。後十年を經、千六百二十八年、露將ドウベンスキーはクラスヤルスク（紅巖）砦を築き、昂古拉（アンゴラ）河岸にルイビン砦を興し、翌六年、也尼塞將軍ヤーコフはバイカル湖南の地を探りて布里雅特（ブリヤト）人を擊ち三十二年ペケトフ、レナ河を下りてヤクートスク砦を築き、三十五年には、哥薩克ヲレクミンスク河口に一塞を構へ、三十八年には、ヤクートスクの哥薩克マクシム、ペルフイリエフ、はじめて黑龍江の探險を企圖し、三十九年には、露人遠征して、西伯利亞極東のラホータ海岸に達せり。その翌四十年には、將軍ゴローキン、ヤクートスクに赴任し、四十三年ボヤルコフに命じて、黑龍江の遠征をなさしめレナ河よりアルタン河に出て、カナート河に出て、舟を棄て、橇に駕し、スタノヲイ山脈を越え、ブリヤンダ河の上流に出て、ゼーヤ河岸に達し翌四十四年（順治元年）の春、はじめて黑龍江に達し、更に小舟を造りて江を下り、松花江の會點を過ぎ、アムグエ河口に冬を送り、翌年ヲホータ海岸に沿うて北航しウヂ河口に達し、その翌年の秋ヤクートスクに歸り、復命して曰く、過ぐるところの地、タウル人及び毀牙喀人の部落あり、精兵三百、以て之を征略すべし、と。ボヤルコフの黑龍江遠征は、三年の久しきに亘り、道程七千吉米に及び、將來露國が黑龍江河城占領の動機となれり。後二年、也尼塞將軍の使者、庫倫に至りて、蒙古の車臣汗に謁し、はじめて、その清室を奉戴するを知り、清の世祖も、亦た蒙古の外、古しへの俄羅斯が、すでに遠く來りしを知れり。これを露清兩國衝突の權輿となす。而して、ハバロフの黑龍江遠征は、實にその導火線に外ならざるなり。

ハバロフ、人と爲り、沈毅大略あり、ボヤルコフが黑龍江探險の報告を聞くや、はじめて遠征の志あり、上書して、露帝に請ひ、千六百四十九年（順治六年）志士七十を

募りて、ヤクートスクを發し、翌年黑龍江に達し、その十一月、索倫部長を破りて、雅克薩を占領し、翌年再び到り、其地に阿爾巴青城を築き、流に循つて東進し、烏蘇里江の會點に達し、阿榆部を掠略す。阿榆部、その敵せざるを見、援を滿州に請ふ。滿州兵、之を救うて破らる。五十四年（順治十一年）露人ステパノフ、黑龍江地方の哥薩克を統轄し、糧食を得むと欲して、江を下り、清國都統明安達禮の爲に敗らる。この間、露人の侵略、なほ止まず。西伯利亞の內地、探險して、殆んど剩すところなし。五十五年（順治十二年）明安達禮、兵を以てコマル塞を攻めしが、餉乏しきを以て還る。その翌五十六年（順治十三年）ステパノフ、屢ば出てゝ、剽略せしが、江岸の住民、すでに清國の命を受けて、滿州の內部に移りしを以て、到るところ、人烟を絕ち、復た掠奪を擅にする能はず。八十五年（順治十五年）也尼塞將軍フバシコフ、黑龍江略取の策を建て、尼布楚將軍に補せられ、ステパノフに命じて、滿州に入りて、掠奪することなく、哥薩克をして、專ら農事に務めしむ。ステパノフ、命を奉ぜず、五百の哥薩克を率ゐて、滿州に入るや、寧古塔都統沙爾呼達の爲に敗られ、部下二百七十名、とともに戰沒す。清廷、朝鮮の兵を調し、又數ば大臣を遣し、兵を督せしめしも、餉繼がざるを

露人の滿洲侵入

以て、半途にして返る。順治十二年及び十七年、露國兩たび貿易商人に附して、北京に至り、信問を通ぜしも、絕えて邊界の事に及ばず、而かも、ともに和親を通ずるの目的を達せず。之を要するに、當時の清廷は、南方の經略に忙しくして、北顧の暇なく、滿州の守備兵、往々にして、哥薩克の慓悍に敵せず、屢ば敗衂を被り、因つて、他日の患を貽せしなり。康熙元年、清廷、奉天將軍寧古塔將軍を置き、十年に至りて、後者を吉林に徙せり。

清使露都に至る

康熙六年（一六六七）に至り、通古斯汗罕帖木兒、清廷の待遇を屑しとせず、滿州を去り、アルグン河を渡り、露國に歸化して、インコタ流域の地に住す。清の聖祖、使を莫斯科に遣し、罕帖木兒を交付し、且つ黑龍江各地の抄掠を禁ぜむことを請ふ。當時莫斯科には、一人の清國文字を解するものなかりしを以て、スパトリを使節となし、十四年、清使とともに北京に來り、國書を呈せしが、清廷は罕帖木兒の引渡を終るに非ざれば、境界の紛議、貿易の約定等、すべて、協議すべきに非ずと明言し、斷然之を却けしを以て、談判全く不調に了れり。

この間、露國の東方侵略は、益す、步武を進め、蒙古との境界は、殆んど現今の位置

露領の版圖

に及びしも、唯だ薩彦山・阿爾泰山の地方は、諸種族との葛藤、未だ靜定せず、イルチス河畔に於ては、準噶爾人等の襲擊を受くるあり、極東は未だ堪察加半島に及ばず。時に清廷は、天下全く統一し、三藩戡定、臺灣亦た下るに及び、はじめて北征の兵を派遣せり。

清露の交戰

康熙二十一年(一六八二)聖祖、副都統郎坦に命じ、黑龍江畔雅克薩城の形勢を偵察せしめ、その守兵少きを知るや、戶部尚書伊桑阿に命じ、寧古塔に赴いて船艦を製造せしめ、嫩江の沿岸に、墨爾根・齊齊哈爾の二城を築き、黑龍江將軍薩布素をして、愛琿に駐劄せしめ、又蒙古の車臣汗に令して、露國との通商を絕たしむ。二十四年に至り、都統澎春等、水軍五千、陸軍一萬を以て、雅克薩城に至り、守將トルブチンを敗り、之を尼布楚に退く。未だ幾ならずして、トルブチンは、援兵を得て、再び雅薩克城の墟に至り、土壘を築いて、防禦の備をなす。聖祖急に取らざれば、他日の患を貽すとなし、薩布素をして、之を攻めしむ。その兵、凡そ八千人、大砲四十門あり、而して露兵は僅に七百三十六人のみ。トルブチン、彈丸に中りて死し、ペイトン代りて衆を統べ、堅守して下らず、清軍乃ち長圍を築く。すでにして、城兵或は戰死し、或は病死し、剩すところ、わづかに六十六人のみ。命、旦夕に迫る。會ま露清媾和の議あり、二十七年八月、清兵圍を解き、愛琿及び墨爾根に歸る。

露國媾和の使節

これより先、荷蘭の貢使、北京に至るや、聖祖之に托して、書を露國に轉達して、境界を定めむことを求む。時に露帝ミハイルの子アレクシスは、すでに殂し、彼得大帝、位に在るも、兄姉と合はず、且つ西鄰諸國と事多きを以て、二十六年(一六八七)公使ゴロヴィンを遣す。聖祖乃ち內大臣索額圖・都統佟國綱・尙書阿爾尼を以て公使となし、張鵬翮を參贊とし、北京在留の宣敎師ゲルビロン(張誠)ペレーラ(徐日昇)を隨へ、之と色楞河地方に會せしめむとせしが、會ま準噶爾喀爾喀と戰ひ、外蒙古の地、大に亂れ、路梗がりて通ぜざるを以て、空しく歸る。二十八年に至り、聖祖、ゴロヴィンが尼布楚に赴くを聞き、再び索額爾に命じ、中途より其地に至りて、會議せしめ、都統郎坦に命じ、一萬の兵を以て之を援護せしむ。

尼布楚條約

尼布楚條約は、清露二國國際上交涉の第一步にして、東洋史上、特に記憶すべき重大事件なり。されば、當時談判の狀況に就いて、稍や詳細に記するところあらむ。

會議の狀況

清國大使索額圖は、この年八月二日を以て、同地に着して、砦外の郊地に駐屯し、ゴローウインは十日を後れ、同月二十四日、城外の帳裡に於て、相見ることゝなし、ゴローウインは、副使尼布楚將軍ウランフとともに、書記を從へて臨み、索額圖は、自餘六名の全權委員とともに、宣教師を率ゐて來會し、兩國の兵、各二百餘、皆刀槍を持し、帳中に羅列して護衛す。ゴローウイン、先づ黑龍江を以て、兩國の境界となし、江の以北を露領となし、江の以南を清領となさむことを要求す。索額圖、之を遮つて曰く、東は雅克薩城より、西は尼布楚及びセレンギンスクに至るまで、悉く之を清國に讓與すべし、と。然れども、翌日に至り、少しく讓歩し、尼布楚を以て分界となさむことを發言す。ゴローウイン、之を不當として、議熟せず、仍つて、その後は、正式の會議を開かず、專ら宣教師をして、中に居つて斡旋せしむ。清廷すでに尼布楚を得むと欲し、因つて、アルグン河畔の城砦を左岸に移さむことを請求せしも、ゴローウイン可かず。乃ち談判を中止し、兵を以て、尼布楚を圍まむとす。ゴローウイン、止むを得ずして、清國の要求によりアルグ河の右岸及びゴルヒツア河の一線を讓與す。後三日、索額圖、更に議を立て、後貝加爾より、チウニツト岬に至る一帶の山脈を以て、疆界となさむとするや、露人その無法に近きを以て、怒つて答へず。隨行の宣教師輩、亦た不可を陳し、強ゐて止めしむ。こゝに於て、疆界の談判、全く調ひ、次いで、兩國葛藤の張本たる罕帖木兒の事に及びしが、その莫斯科に赴き、希臘教徒となりしを聞き、之を求めずして止む。

條約の要領

九月九日、兩國公使、その國語を以て記せし條約書に、羅甸語の譯文を添へ、交換を了る。羅甸の譯文は、兩國語の文意相異なるとき、以て證左に充てむが爲なり。この條約は、凡そ七條より成るものにして、支那の歐洲諸國と條約を締結するの嚆矢たり。その要領、全く第一第二の兩條に在り。先づ黑龍江の支流阿倫穆河に近き格爾必齊河を以て界となし、この河に循ひ、上流不毛地の右、大興安嶺より海に至るまで、嶺南一帶、黑龍江に入るの溪河は、盡く清國に屬し、嶺北一帶の溪河は、盡く露國に屬し、次に黑龍江の支流額爾古納河を以て界となし、河の南岸は清國に屬し、河の北岸は露國に屬し、從來南岸の眉勒爾喀河口に在りし露國の房舍は、盡く北岸に遷徙す。その餘は、雅克薩城の毀廢・疆境の禁・逃亡の還付・通商の許可等にし

て、この年秋より實行することゝなし、滿・漢・羅甸・蒙古・露西亞の五國文字を以て、之を石に刻し、聖祖は又銅柱を勒して、界碑を格爾必齊河の東岸及び額爾古納の南岸に建設し、露人の南下を豫防せむが爲にゼーヤ河岸に屯田兵を置けり。康熙英主の遠圖、さすがに偉なりといふべし。

清初外交談判の強硬なること、此の如く、幾んど一百年來、貪饕以て其性となせる露人が、險を冒し、兵を損して、僅に贏ち得たる西伯利亞極東の一大曠土を擧げて、之を清廷に割讓するの止むを得ざるに至らしむ、豈に快事ならずや。これより後、半世紀の間、露國の清廷に對するや、一に善鄰の主旨に本づき、條約を遵守し、公使及び語學生を北京に駐劄し、時に商隊を派遣するに過ぎず。然れども、惜いかな、後嗣の清帝は、此土を經營して、その發祥の故土を守護するを知らず。康熙時代の屯田兵は漸を以て衰頽し、又黑龍江岸の殖民に留意せず、怠慢の極、露人に敵せず、遂に之を割讓し、飜つて、遼瀋の野に及び、封豕長蛇をして、極東の天地を窺ふに至らしむ、その禍、彼自ら取るのみ、嘆ぜざるべけむや。

露清の關係

衛拉特の四部

宗喀巴の黃教

第四十二章　準噶爾の征定（上）

黑龍江上に於ける露清二國の交渉、正に迫るの時、西には喀爾喀・準噶爾、二大部の抗鬪あり。二部ともに蒙古の餘孽。喀爾喀部は韃靼遼延汗の末子格埒森札、賚爾の後にして、準噶爾は衛拉特部長額森の後なり。はじめ、額森その下に弑せられ、その子姪、韃靼部長保喇に逐はるゝや、その部、久しく振はず、或は月即別族に西邊を襲はれ、或は土默特部に東境を援されしが、明末清初、蒙古諸部の衰へたるに乘じて、再び勢を得、漸次強大なり。その部、凡そ四に分れ、伊犁には準噶爾部あり、厄爾齊斯河上には都爾伯部あり、塔爾巴哈台には土爾扈特部あり、烏魯木齊附近には和碩特部あり。和碩特部は、後に西藏を幷せ、その勢威、三部に雄たり。

はじめ、元の世祖、拔思巴を帝師に拜せしより、その後嗣、世世西藏の喇嘛を總管し、その衣帽、紅色を尙ぶを以て、之を紅教喇嘛といふ。その教旨、專ら密咒を旨とし、妻子を蓄へ、弊害少からず。殊に元末明初に至りては、頗る華侈に流れたり。この時に方り、宗喀巴の出でゝ革新を唱ふるあり。宗喀巴は西寧の人、明の永樂十五年を

以て生る。元と蒙古種に屬す、幼名は阿劫。その生るゝや、異相奇面、滿月の如し。八歲にして出家し、二十六歲、西藏に赴き、シャキャシリー喇嘛に就いて比丘戒を受けニホングーカーパ喇嘛に從つて、般若等の經典を講習し、三十四歲チユボーラハ喇嘛に從つて、秘密法を學習す、この時、紅教の腐敗を見、その改革を以て、自己の使命となし、その教理の決して釋迦宣說の正意に非ざることを闡明し、菩薩大戒は如來の正法にして、六波羅密の持攝性修は、如來金剛の秘密圓滿の直下に頓速菩提を證悟すと喝破し、幻術を排して、妻帶を禁ず。その徒、すべて黃帽黃衣を着けしを以て、黃教喇嘛の名あり。黃教は幾もなくして、大に世人に歡迎せられ、やがて紅教と相頡頏するに至れり。宗喀巴、遂に甘丹寺に於て得道し、明の成化十四年に至りて示寂す。その教理を知らむと欲するものは、遺著藏文宗喀巴經を觀るべし。二弟子あり、一を達賴喇嘛といひ、西藏の首府拉撒に居らしめ、一を班禪喇嘛といひ、拉撒の西札什倫布に居り、以て黃教喇嘛を分管せしむ。宗喀巴、すでに妻帶を非認せしが故に、特別なる相續法を創設し、達賴・班禪の兩喇嘛は終死せず。唯だ呼畢爾罕、即ち化身をなして轉々出現し、衆生を濟度するものと定め、二人皆死して、道を

紅教の敗亡

失はず、自ら轉生するところを公言し、弟子輙ち迎へ立て、世々例となすといふ。

黃教漸次その勢力を振興し、殊に三世達賴喇嘛立つに及び、高德の譽ありて、蒙古諸部の尊信を得、遂に諳達黃台土等の懇請に從ひ、親ら漠南蒙古に布教を試みたり。諳達の曾孫、之に繼いで、四世達賴喇嘛となり、黃教は益す盛行し、內外蒙古及び伊犂地方に被及し、土拉河畔の庫倫に大喇嘛を置き、その地方の教務を辨轄せしむるに至れり。こゝに於て、紅教喇嘛は、決して袖手傍觀せず、愈よ嫉妬の念を高め、遂に西藏西界拉達克の酋長藏巴汗を引いて、黃教喇嘛を抑壓せむことを企てしを以て、五世達賴喇嘛は、和碩特部を招致して、之を拒がしむ。和碩特部長固始汗は、成吉思汗の弟哈薩爾第十九世の孫なり。こゝに於て、自餘衛拉特三部の後援を得、襲うて青海に據り、西藏に入り、藏巴汗を擊つて之を殺し、紅教喇嘛を、南、不丹・泥波爾地方に逐ひしを以て、西藏全土を舉げて、黃教喇嘛に歸し、固始汗の子孫は、爾後青海地方を根據として、西藏兵馬の權を掌握し、崇德二年を以て、使を清に遣し、七年又達賴喇嘛とともに入貢す、これを青海蒙古、清に通ずるの始となす。

達賴・班禪の兩喇嘛は、唯だ宗教上の事務を總裁するのみにして、一切の世務は、

第巴と稱する一種の喇嘛に委ねて、毫も關係せざりしが、五世達賴の近親桑結といふもの、第巴となるに及びて、勢威頗る強く、和碩特部の干渉を脱せむとし、窃に準噶爾部を招いて、之に當らしむ。

噶爾丹の征服

はじめ、和碩特部の固始汗の青海に據るや、衛拉特四部の一たる綽羅斯特部は、伊犂に據りて、近傍を蠶食せしが、巴圖爾渾台吉に至り、部を準噶爾と稱し、他の二部土爾扈部、都爾伯部を征服し、勢威愈よ強し。康熙中、その子僧格嗣いで立ち、幾もなくして、叛者の爲に斃れ、僧格の子索諾木阿拉布坦立つ。僧格の弟噶爾丹、喇嘛となりて、西藏に在り、桑結第巴と親交ありしが、本部の變を聞いて、急に還り、その姪索諾木阿拉布坦を殺して自立し、準噶爾部長となる。時に清の康熙十二年、吳三桂亂を始めしと相當る。噶爾丹、すでに父祖の後を承けて、衛拉特の三部を併せ、更に和碩特部を收めむと欲し、桑結の招に應じ、和碩部が己の叛衆を納れたるを名とし、遂に固始汗の子達顏汗を破り、悉く青海西藏の大封疆を幷せ、衛拉特四部に君臨せしも、なほ足れりとせず、天山南路を兼有せむと欲し、伊犂より東して、阿爾泰山に徙り、都爾伯の部衆をして、屯田し、且つ耕し、且つ牧し、以て時機を待たしむ。

天山南路の形勢

天山南路の地は、さきに帖木兒に服屬せしが、その殁後、中央亞細亞の騷擾せるに乘じ、喀什噶爾汗アーメッド、ミルザの孫アブヅル、ラシッド立ちて、頻りに地を東方に開き、殆んど全土を統一せしがラシッドの死とともに、喀什噶爾の勢威、一朝にして地に墮つ。はじめ、喀什噶爾の盛なるや、中央亞細亞回教の貴僧、天山南路に來往する者、頗る多く、之を和卓といひ、ラシッドの尊崇を受け、領地を得しを以て勢威日に隆にして、こゝに喀什噶爾の衰へたるに乘じて、代りて天山南路の政權を掌握せり。和卓カリヤンの徒弟を白山派といひ、その弟メサクの黨を黑山派といひ、歲月を經るに從つて、軋轢愈よ甚しく、喀什噶爾汗イスマイルは、黑山派たるを以て、白山派の和卓アバクを逐ふ。アバク乃ち西藏に走り、援を五世達賴に求む。こゝに於て、準噶爾部長噶爾丹は、達賴の命を奉じて、天山南路に入り、イスマイルを擊破し、アバクを喀什噶爾に擁立して、其地を幷せ、爾後八十年間、永續せり。噶爾丹の威望、今やその頂點に達し、中央亞細亞を震駭し、因つて兵を東し、先世の仇讎たりし韃靼の喀爾喀と搖着し、延いて清國との衝突を馴致せり。

喀爾喀三部

韃靼の形勢は、さきに述べしことありしが、こゝに其要を撮すれば、明の中世以後、その地、大別して三地となり、科爾沁部は、蒙古の東部、興安嶺附近に居り、成吉思汗の弟搠只の後裔、こゝに君臨し、その西北、今の外蒙古一帶は、漠北蒙古部、即ち喀爾喀部と漠南蒙古部との二に分れ、ともに多くは、成吉思汗後裔の君臨するところに係る。清の起るや、科爾沁部は、先づ歸服し、漠南蒙古部察合爾の林丹汗は破れ、その子孔果爾額哲、傳國の璽を奉じて、清に降りしが、ひとり喀爾喀は、未だ降服せず。喀爾喀は、元と韃靼の大汗達延の末子格埒森札賚爾の封地にして、後更に分れて三部となり札薩克圖部は西部に在りて、杭海山の西麓一帶を占め、土謝圖汗は中部に在りて、土拉河の流域を占め、車臣汗は、東部に在りて、克魯倫河の流域を領す。故に全部の地、東は黑龍江より、西は厄魯特に至り、北は露領西伯利亞に接し、南は瀚海に至り、東南は清國に接し、西南は準噶爾部に鄰りて、尨然たる一大國をなせり。清の太宗の漠南蒙古を平定するや、崇德三年、親征して、九日の貢を上らしめしが、後八年を經、順治三年に至り、內蒙古の蘇尼特部長騰機思反して、喀爾喀に投ずるや、清の豫親王多鐸、揚威大將軍となり、世宗の命を奉じ、大兵を率ゐて、之を討滅し、土謝圖汗の軍を敗りしことあり、各汗大に懼れ、表を上りて罪を請ひ、九日の貢を復して、盟を乞ふ。康熙二十三年に至り、土謝圖汗、他の二部と隙を生じて、相攻爭し、遂に準噶爾の乘ずるところとなれり。

噶爾丹、喀爾喀を討つ

喀爾喀部の西、天山北部一帶の地は、衛拉特部に屬し、兩部土壤相接するを以て、素より相善からず。準噶爾の噶爾丹、すでに衛拉特を統一するや、之を見て、好機乘ずべしとなし、康熙二十七年、勁騎三萬を以て、杭愛山を踰え、急に其幕を襲ひ、蒙古地方の喇嘛、蜂起して、之に應ずるや、喀爾喀全部大敗し、皆漠南に入る。三汗相議して、露國に投せむとせしが、大喇嘛胡土克圖、宗教風俗言語を異にするを以て、勸めて、東に徙らしめ、途にして、清使索額圖の露使に會見せむとして、其地を過ぐるに遇ひ、內蒙古に入りて、清國の保護を求む。時に、內蒙古四十九旗をして、其地を略取せしめむとする議ありしが、聖祖許さず。食儲を發し、牲畜を給し、且つ科爾沁部の地を割與して、游牧をなさしめ、又噶爾丹に命じて、其衆を帥ゐて、西歸し、喀爾喀の侵地を還さしむ。噶爾丹、命を奉ぜず、却つて喀爾喀を追ふと稱し、二十九年六月、銳を盡くして、東侵し、烏爾會河に至る。尙書阿爾尼、蒙古の兵を以て之を邀へしも利

あらず、噶爾丹、勝に乘じて進み、內蒙古、大に震ふ。噶爾丹、又露國の使を見、雅克薩の恢復を勸めしも、露國は之に應ぜず、滿州各地の自由貿易を清廷に求めしを以て、聖祖之を嘉し、一意西方經略に從事するを得たり。

烏蘭布通の戰

この時に方り、朝廷すでに三藩を平らげ、隴蜀を定め、臺灣を收め、露國と和し、天下無事なり。聖祖以爲へらく、噶爾丹、勢熾にして、すでに入寇す。その志、決して小に在らず、且つ喀爾喀游牧の地なかるべからず、と。六月詔を下して、親征せむとし、撫軍大將軍裕親王福全に命じて、左翼となし、皇子允禎、之に副とし、古北口より出で、安北大將軍恭親王常寧、右翼となり、喜峰より出づ。右翼の兵、賊に烏朱穆秦に遇ひ、戰復た利あらずして軍を收む。噶爾丹、遂に勢に乘じ、長驅して南し、深く烏蘭布通に入り、京師を去ること七百里、乃ち止る。右翼の兵、改めて、康親王傑書に命じて、歸化城に屯し、その歸路を要す。八月朔、撫軍大將軍、賊に烏蘭布通に遇ひ、翌日進擊して、大に戰ふ。賊騎數萬、山下に陣し、林に依り、山に阻し、萬駝を以て足を縛して、地に臥せしめ、背に箱垛を加へ、蒙らすに濕氈を以てし、環列して柵の如く、士卒垛隙に於て、矢銃を發し、鉤鉅を備へ、之を駝城といふ。清師河を隔てゝ陣し、火器を以て、前列となし、遙に中堅を攻め、聲天地に震ひ、哺より暮に至り、駝、礮に斃れ、頹れ且つ仆れ、陣斷つて二となり、步騎先を爭つて陣を陷れ、左翼又山を繞つて橫擊し、遂に其壘を破る。賊夜に乘じ、走つて高險を保ち、翌日西藏の喇嘛僧を遣し、來つて和を請はしむ。詔して云ふ、速に兵を進めて、賊の計に墮るなかれ、と。而して、噶爾丹、報を待たずして、營を拔き、什拉穆楞河より木を伐せて、橫に渡り、大磧山峭を越え、過ぐるところ、皆燒荒し、以て追騎を絕つ。清兵輕騎之を追へども、すでに及ばず。噶爾丹、中途より使を遣し、書を獻じ、誓つて犯さずといひ、幷に具疏して罪を謝す。科爾沁の土謝圖親王、之を羈留せむことを謀る。而して、噶爾丹、走つて止まず、且つ盡く負駝を失ひ、輜重なく、絕漠に狂奔して北し、沿途死亡多く、科布多に還るを得しもの、わづかに數十人といふ。時に聖祖偶ま不豫、博洛河屯より回鑾し、諸將進止を奉ずるに及ばずして、歸化城に還り、西路の兵、科爾沁諸蒙古の兵は、裕親王講和の令を奉ずるを以て、遂に復た邀へ擊たず、信郡王、裕親王が勝に乘じて、追剿せず、且つ檄して、蘇爾灘の兵を進むるを止め、衆寇を竄逸せしを劾す。聖祖、功過相乘ぬるを以て、

火器の使用

その罰を輕くし、八月、遂に師を班へす。

その翌三十年、聖祖又塞を出でゝ、多倫泊に至り、喀爾喀各汗の來朝を受け、その三部を以て三十七旗となし、內札克蒙古に比し、彙宗寺を建てゝ、その喇嘛を安んじ、前に準噶爾を征せしとき、火銃便利なりしを以て、火器營を立て、朝鮮國王、鳥銃三千桿を獻ぜしを以て、詔して、永く朝鮮の黃金及び藍靑紅木綿等の貢を免ず。

噶爾丹の反覆

その後、噶爾丹、使を遣し、歸化城に至り、入貢すと聲言し、男女踵を接して至るもの、幾千人。將軍費揚古、兵を遣して迎詰し、且つ之を遏め、詔して、其使を責め還す。三十三年に至り、噶爾丹に約して、來會せしめしも、報ぜず、而かも、兵を遣して、喀爾喀を侵掠すること益ず甚しく、且つ清の使臣を害し、又陰に使を遣し、內蒙古の各部を誘ひ、叛いて己に歸せしむ。聖祖以爲へらく、さきに烏闌布通の役、賊幾んど滅すべかりしも、我が師、坐に機會を失せり、と。因つて、復た其來るを致し、一戰して之を覆さむと欲し、乃ち土謝圖、科爾沁の諸親王をして、僞つて內應せしめ、而して、預め士馬芻糧を調して待つ。

噶爾丹、大に前敗に懲る

三十四年に至り、噶爾丹、果して三萬騎を率ゐて入寇し、克魯倫河に沿うて下り、侵掠して、巴顏烏闌に至り、秋より冬に至るまで、之に踞して去らず。然れども、亦た漠南を侵さず、使を遣し、往いて之を激せしむ。賊、使者をして、徒步して、歸らしめ、大言すらく、俄羅斯の鳥銃六萬を借り、將に大舉して內犯せむとす、と。蓋し前敗は火器中國に如かざりしに由るを以ての故に、西洋火器を假ると佯り、以て其軍を張りしのみ。その實、露國寇を助くるに意なく、且つ噶爾丹、前敗に懲りて、未だ敢て深く入らず。

聖祖の親征

三十五年春、聖祖親征、皇太子京師を留守す。將軍薩布素に命じて、東路より出ていゝ、其衝を遏めしめ、大將軍費揚古、振武將軍孫思克等は、寧夏の西路より出ていゝ、その歸るを邀へしめ、帝親ら禁旅を統べ、獨石口より中路に出づ、皆瀚海以北、期を約して夾攻す。沙磧礮に宜しからず、乃ち大礮を留め、惟だ子母礮を駄して行き、營を下す每に、帝親ら士卒を拊し、水草を相す。軍瀚海を行くや、泉溢れて、草生ず。五日遂に科圖より進んで、賊境に逼る、而して、東路の軍、未だ尙ほ至らず。西路の軍、亦た奏して言ふ、賊盡く草地を焚き、我が軍、道を迂して、馬に秣ひ、糧運雨に阻まれ、師行七

昭莫多の戰

十餘日、士馬饑困、乞ふ、軍を緩うして待て、と。帝顧みず、遂に兵を率ゐて疾く克魯倫河に趨く。噶爾丹、はじめ親征を信ぜず、北孟納蘭山に登り、御營の黄幄龍纛、環らすに幔城を以てし、又外に網城を爲り、軍容山立するを望見して、大に驚き、營を拔いて宵に遁れ、翌日大軍河に至れば、北岸すでに一帳なし。帝その能く爲すなきを知り、遂に親ら前鋒を率ゐて躬追すること三日、拖諾山に至りしも及ばずして還る。賊奔馳すること五晝夜、拒戰せむと欲せしも、衆奔つて止むる能はず、適ま西路の兵、之を昭莫多に迎ふ。昭莫多は、蒙古語、大樹林なり。即ち成吉思汗、阿魯台を破るの地、平曠にして、水草多く、回望すれば大嶺千尋、屏の如く、古しへより漠北の戰場たり。時に敵軍至るもの、わづかに萬餘、然れども、皆百戰の餘たり。清兵飢疲、馬は其半を僵れ、士は多く徒步たり。費揚古等、議して云ふ、馬力馳擊する能はず、客を反して主となし、佚を以て勞を待つに非ざれば、不可なり、と。敵を距ること三十里、即ち止つて營す。その地に小山あり、三面皆河に阻し、林木茂蓊、伏を設くべし。先づ前鋒兵四百を遣し、且つ却いて敵を誘うて、昭莫多に至らしめ、費揚古、左右の翼を率ゐて、先づ小山に據り、東に陣し、餘は土腦河に沿うて、西に陣し、兼ねて林中の伏賊に備へ帝の授けしところの方略に遵ひ、各兵皆馬を下つて步戰し、約して角聲を聞いて、はじめて馬に上らしむ。將軍孫思克、綠旗步兵を以て中に居り、山頂に據り、之に臨むや、賊、山頂を爭うて銳甚し。清兵險に憑つて俯擊し、拏銃迭に發し、藤牌之に繼いで進み、毎に拒馬木を以て、前に列して自ら固うす。賊、矢銃を冒し、鏖戰日暮に至るも退かず。人々怒虎の如く、林木皆震ふ。費揚古、遙に賊の陣後を望むに、人馬動かず、必ずその婦女駝畜なるを知り、乃ち沿河の伏騎を麾き、一は横に衝いて、陣に入らしめ、一は其後の輜重を襲ひ、山上の軍、奮呼夾擊、賊はじめて潰散す。夜に乘じて北ぐるを追ふこと三十餘里、天明軍を收め、數千級を斬り、并せて、その可敦阿奴を殪す。可敦阿奴は、準噶爾部、その汗の妃を稱するなり。頗晳にして敢戰し、銅甲を披き、弓矢を佩び、異獸に騎す、駝に似て駝に非ず、精鋭悉く麾下に隸す。こゝに至りて、亦た礮に斃る。噶爾丹、數十騎を以て遁れ、提奏御營に至る。費揚古に命じ、科圖を留防せしめ、喀爾喀游牧の地を護し、帝親ら銘を撰し、察罕の拖雷山及び昭莫多の山に勒して還り、歸化城に次し、躬ら西路凱旋の師を犒勞し、膳を輟めて大に士を享し、厄魯特の俘を獻じ、彈箏笳歌するもの、畢く集る。一老胡あり、笳に工にして、口辯

噶爾丹の窮困

膽氣あり、乘ねて漢語を能くす。帝之に運酒を賜ひ、技を奏せしむ。音調悲壯。歌に曰く、雪花如血撲戰袍、奪取黃河爲馬槽、滅我名王兮虜我使、歌、我欲走兮無駱駝、嗚呼黃河以北奈若何、嗚呼北斗以南奈若何、と。遂に地に伏して謝す。帝大に笑ひ、手書して、皇太子に告げ、六月駕京師に至る。

はじめ、噶爾丹、喀爾喀を破つより、漠北の地を戀ひ、久しく伊犂に歸らず。舊部落、盡く兄の子策妄阿布坦の幷すところとなり、阿爾泰山より以西、皆その有に非ず。又連年中國と戰ひ、精銳喪亡、牲畜皆盡き、回部、青海、哈薩克、皆隔絕して、叛き去る。乃ち去つて、西、伊犂に歸らむと欲すれば、策妄阿布坦の逼るを畏れ、南、烏斯藏に投ぜむとすれば、道遠くして至る能はず、北、露國に赴かむとすれば、拒んで受けず、こゝに於て、杭愛山の西、翁金河に清の餘糧あるを聞き、兵を遣して、之を掠めしが、その副都統の敗るところとなり、喀爾喀都の游牧を掠めむと欲せしも、備あるを聞いて、亦た敢て犯さず。その西藏に遣せし使、又青海副都統の擒にするところとなり、所屬の部落、從者或は僅に千人、或は數百人、皆老羸、自ら羊馬を相盜む。帝その窮蹙に乘じて、之を降さむと欲し、九月駕再び歸化城に幸し、驛を鄂爾多斯に駐め、青海諸台吉と策妄拉布坦とに諭し、幷せて噶爾丹を擒にせむとし、使を遣す。準噶爾諸部、絡繹來り降る。噶爾丹、盡く羽翼を喪ひ、乃ち使を遣して、鄂爾多斯の行在に詣り、清廷の意を探らしむ。詔して、その汛界を犯すの罪を數へ、又許すに喀爾喀を待ちし恩例を以て、之を招撫せむとす。ずてにして車駕京師に旋る。而して、噶爾丹、偏强卒に至らず。

噶爾丹の死

その翌三十六年二月、帝復た黃河を渡つて、寧夏に至り、馬思哈費揚古に命じて、兩路より兵を進めしむ。噶爾丹、子塞卜騰巴珠をして、糧を哈密に徵せしが、回人の禽獻するところとなり、薩克呼里の地に獵するも、野獸すでに盡く。左右の親信、大兵の將に至らむとするを聞き、先後風を望んで款附し、密に大兵を嚮導して深く入り、策妄那阿拉布坦、亦た强兵を擁して、阿爾泰山に伏し、將に擒にして獻ぜむとす。噶爾丹、進退地なく、計を爲すところを知らず、每夕或は數ば驚き、至るところ、頻りに怪異に逢ひ、烈風淫雨、之に隨ふや、自ら人呼き、天亡ぼし、旦夕必ず俘に就くを知り、遂に藥を仰いで死し、所部盡く降る。こゝに於て、阿爾泰山より以東、皆版圖に隸し、喀爾喀の西、境を拓くこと千餘里、四月帝復た銘を狼居胥の山に勒して還る。

朔漠平いて京師に至るや、門に御して、賀を受け、又親ら碑銘を撰じて、石を大學に勒す。古しへの帝王武功、或は將に命じ、或は親征するも、惟だ廟社に告ぐるのみにして、未だ先師に告ぐるものあらず、泮に在つて獻を獻じ、古制に復せしは、聖祖より始まる。

聖祖六十の萬壽節

こゝに於て、喀爾喀三汗、復た舊牧に歸り、因つて、その部屬を增編して、五十五旗となし、固始汗の子達什巴圖を封じて、和碩親王となし、青海全部を綏服せしむ。然れども、聖祖が連勝の威に乘じて、阿爾泰山西に及ばざりしは、その失計にして、後に準噶爾再び勢を逞うし、再征を煩はしめたり。

準噶爾平定の後、聖祖の治世二十年、或は索爾哈濟に幸し、或は南巡して河を閱し、明史、佩文韵府、淵鑑類函、康熙字典等、大部頭有用の撰述は、すべてこの間に成れり。五十二年、聖祖の實算六十に及び、萬壽の嘉節には、各省の大臣官員、士庶九十以下六十以上の者を暢春園に宴し、太平を謳歌せり。然れども、晩年に及びては、西に準噶爾の再征あり、南には臺灣朱一貴の亂あり、時に或は紛擾を極めむとせり。

桑結の跋扈

はじめ、西藏の桑結第巴は、噶爾丹の力を假りて、和碩部を滅ぼせしが、康熙二十一年、五世達賴の寂するや、秘して喪を發せず、僞つて入定し、高閣に居つて人を見ずといひ、是より益す横にして、準噶爾を教唆し、西北擾攘數十年、二十九年、遂に漠南に入寇す。三十五年、聖祖の親ら噶爾丹を征して、克魯倫河に至るや、噶爾丹、敗績し、その下を慰めて曰く、この行、我が意に非ず、乃ち達賴喇嘛、南征すれば大吉といひしに因り、深く入りしなり、と。帝、達賴存せば必ず此事なきを思ひ、乃ち使を遣して、書を桑結に賜ひ、之を責め、使をして達賴と相見るべしといふ。桑結大に惶恐し、明年奏して言ふ、第五世達賴は、壬戌の年を以て示寂し、靜體に轉生し、今すでに十五歲、今當に丑年十二月二十五日を以て、定を出て、牀を定むべしと。三十六年、青海の固始汗卒し、拉藏汗嗣ぐや、噶爾丹の敗に乘じて、父祖の遺業を恢復せむとし、四十四年、拉撒に入りて、桑結を殺し、その立てしところの假達賴を廢し、執らへて京師に獻じ、道にして死す。こゝに於て、博古達山の伊西嘉穆錯を立てゝ六世達賴となす。青海蒙古、之を奉ぜず、而して別に裏塘の噶爾藏嘉穆錯を奉じて、眞達賴となし、宗喀巴の胞衣を瘞めたる塔爾寺に居らしむ。康熙四十七年を以て、轉生し、二歲

策妄西藏に寇す

靈異を著はし、こゝに至りて十歳、諸蒙古、迎へて青海に至り、牀に坐し、策印を賜はむことを請ひ、藏中奏するところと互に相是非し、爭議未だ決せず、而して、策妄藏を援すの事新に起る。

策妄阿拉布坦は雄略ありて、大志を懷き、先づ土爾扈特部阿玉奇汗入清の道を阻み、兵を哈密の北境に出して、五塞を侵掠し、又拉藏汗の姉を納れ、且つ其子丹衷を伊犂に迎へて、女婿となし、歸國を許さず、はじめ、帝、衛拉特の狙詐を以て、拉藏を勅戒せしも、拉藏耆にして酣飲し、以て意となさず。布達拉は、西、後藏に接し、周回數千里、その北岸は大山横亘し、準夷藏に入る必由の路たり。鐵索橋あり、天險なり、一夫拒隘、萬衆趦趄、更に傍徑なく、拉藏之を守らざるなり。五十五年十月、策妄、拉藏の守備怠るに乘じ、大策零敦多布に命じ、精兵六千を以て、丹衷の歸國を送ると稱し、險を涉り、瘴を冒し、次年七月、はじめて藏界に達し、騰格里海の險を踰え、唐古特の兵を破つて、布達拉を圍む。城中內應して、門を開くものあり、遂に拉藏汗を殺して、その妻子を虜にし、各廟の重器を伊犂に送り、新達賴を幽す。西安將軍額倫に詔して、特に軍數千を以て赴き援けしめ、先づ河を渡つて瘋拉嶺の險を扼せむと欲す。

西藏の平定

賊衆數萬、その半を以て河に據り、其前を拒ぎ、而して兵を分つて其後に出て、餉道を斷ち、相對すること月餘、糧盡き、矢竭き、九月清師擊り、賊氣益す熾なり。青海蒙古、皆藏に進むを憚り、而して王大臣、前敗に懲り、皆藏地險遠、兵を進むべからずといふ、帝以爲へらく、西藏は青海滇蜀を屏蔽す、苟くも準夷盜據せば、將に邊寧日なからむとす、且つ賊能く雪を衝き、險に縋して至る、何ぞ況んや我が軍をや、と。こゝに於て、十四皇子允禵に命じて、撫遠大將軍となし、青海の木魯河に屯して、兵餉を治めしめ、將軍傅爾丹・富寧安、分れて巴里坤・阿爾台に出て、以て其北を獵り、而して將軍噶爾弼は四川に出て、將軍延信は青海に至て、兩路藏を擣く。五十九年正月、延信青海より進み、二月噶爾弼、進んで、察木多に至り、大將軍の檄を奉じ、期を俟つて並に進ましむ。噶爾弼、期久しく糧匱しきを恐れ、副將軍岳鍾琪、番を以て番を攻むるの計を用ひ、即ち土司を招いて前驅となし、皮船を集めて河を渡り、直に西藏に趨き、番兵七千を降し、兵を分つて險を塞ぎ、賊の餉道を扼す。而して、青海の軍、亦た三たび賊を敗り、厄魯特は進退敵を受け、遂に大に潰え、敢て藏に歸らず、即ち舊路より北竄し、崞嶇凍餒、伊犂に還るを得るもの、半に及ばず。こゝに於て、西寧の達賴六

世を立て、宏法覺衆を加封し、九月に於て座に登り、甚く厄魯特喇嘛の逆を助けしものを誅し、蒙古兵二千を留め、拉藏の舊臣貝子康濟鼐を以て前藏を掌らしめ、台吉頗羅鼐をして、後藏を掌らしめ、三十餘年の擾亂、こゝに至りて始めて定る。

こゝに於て、清威西藏に振ひ、聖祖は將に大舉して準噶爾を伐たむとせしに、その翌年、忽ち臺灣朱一貴の亂あり。

朱一貴

はじめ、知府王珍、稅歛苛虐、結會及び山木を私伐せし民二百餘を檻捕し、淫刑以て逞うす。鳳山の奸民黃殿・李勇・吳外等、民の忍びざるに因り、又臺吏の文弊武嬉を窺ひ、遂に變を謀り、一貴が朱姓にして明裔に托すべきを以て、之を奉じて、亂を爲し、五月朔、臺灣府を陷れ、倉庫を掠め、復た蘭人樓を開き、鄭氏舊貯の砲械礦鉛鐵を得たり。こゝに、於て一貴は、中興王と僞稱し、永和と號し、大に群賊を封じ、公侯太師將軍總兵、千を以て計る。民謠うて曰く、頭冠明朝冠、身衣清朝衣、五月稱永和、六月還康熙、と。蓋し人心賊に附かざるなり。水師提督施世驃、厦門に在り、先づ澎湖に至り總兵藍廷珍の至るを待ち、六月十日、澎湖を發し、十三日、賊を破り、官兵安平鎮に入り、次日世驃亦た鎮に至り、これより風ば賊を敗る。時に賊中閩人粵人相鬩ぎ、又各地に義民の起るあり、賊勢漸く衰ふ。廷珍世驃と先づ賊兵を破りて、安平を取り、十九日、北ぐるを逐うて府城に至り、賊數萬皆逃れ、村民一貴を擒獻し、臺灣全く平らぐ。廷議、或は臺政の革新を言ふものあれども、廷珍力爭して不可とし、仍ほ總兵をして臺を鎮し、副將をして澎湖に駐らしめ、特に滿漢の御史、各一員に命じて、歲ごとに臺灣を巡り、民の疾苦を察せしむ。その後、乾隆に及び、分つて彰化縣を立つ。

聖祖の殂落

その九月、聖祖驛を熱河に駐め、十一月初七日、不豫、南苑より回り、暢春園に駐り、十三日疾大漸、命じて、速に四皇子を南郊齋所より召さしめて曰く、皇四子某、人品貴重、深く朕の躬に肖たり、必ず能く大統を克成して著さむ。朕に繼いで基に登り、皇帝の位に即け、と。この日崩ず。景陵に葬る。在位十一年、壽六十九。曾國藩、之を稱して曰く、凡そ前聖稱するところの至德純行、殆んど一として備へざるなく、上にして天象地輿數算音樂考禮行師刑律農政、下にして射御醫藥奇門壬遁滿蒙西域、外洋の文書字母に至るまで、殆んど一として通ぜざるなく、且つ一として新法を創立し、別に律途を啓かざるなく、後來高才絕藝、終にその範圍より出づるなし。然ら

ば、雍乾嘉道累葉の才、聖祖敎育して成るといふも、誰か然らずといはむと、

第四十三章　準噶爾の征定（下）

世宗の即位

世宗憲皇帝、諱は胤禎、聖祖の第四子、即位の明年、元を雍正と改めしを以て、世に雍正帝といふ。

羅卜藏丹津の叛

これより先、策妄の準噶爾部を有するや、噶爾丹の爲せしところに效ひ、衛拉特四部を呑併して、一となさむと欲す。この時、惟だ準噶爾のみ、桀横にして、和碩特は馴擾なり、故に清廷特に準噶爾を捍ぎ、和碩特を扶植す。こゝに至りて、青海復た和碩特固始汗羅卜藏丹津の反あり。はじめ、青海の大喇嘛を察罕諾們汗といひ、西藏より分支して塔持寺に住持とし、黃教の宗となり、番夷信向す。丹津、術を以て之を誘掠して、己に從はしめ、又準噶爾の策妄と通ず。こゝに於て、遠近風靡し、游牧番子喇嘛等二十餘萬、同時に騷動して西寧を犯し、牛馬を掠め、官兵に抗す。雍正元年十月、川陝總督年羹堯に命じて、撫遠大將軍となし、西寧に駐まり、四川總督岳鍾琪を以て、奮威將軍となし、軍務に參贊せしむ。これを大臣駐藏の始となす。年羹堯、兵を

烏蘭の戰

分つて、その內犯を防ぎ、賊の入藏の路を扼し、又請うて、敕してその準噶爾に通ずるの路を截り、諸將を遣して、分つて西川歸德等の堡を攻めしめ、その黨羽を潰す。羅卜藏丹津、はじめて懼れ、罪を請へども許さず。

二年五月、年羹堯、兵二萬餘を調して、西寧等、四路より進み、羅卜藏丹津を烏蘭に攻む。岳鍾琪、以爲へらく、青海寥濶、番衆尙ほ十萬に下らず、我が兵、深く入り、賊もし散じて、我を誘ひ、此を擊てば、彼を失ひ、四面に敵を受く、これ詭道なり。如かず、春草未だ生ぜざるに乘じ、精兵五千、馬は之に倍し、兼程その不意を擣かむと。世宗之を壯なりとし詔して、鍾琪に專任す。二月師を出し、途にして野獸の群奔するを見、前途に賊の偵騎あるを知り、亟かに兵を麾いて進み、果して、賊數百に遇うて、之を殪し、又夜その哈達河を守るの賊を襲ひ、奔るを追ふこと、一晝夜、士馬飢渴、塞外嚴凍、鍾琪天に禱るや、忽にして湧泉溪を成し、萬馬飲し、遂に追うて宗山に入り、賊二千を殲す。こゝに於て、賊に哨探なく、蓐食枚を銜んで宵に進む、百有六十里にして、黎明その帳に抵れば、賊尙ほ未だ起きず、馬は皆銜勒なく、倉皇大に潰ゆ。羅卜藏丹津、番婦の衣を衣、白駝に騎して遁る。官兵窮追、日に三百里、數日にして、桑駱海に至

る、紅柳天を蔽うて、目望極らず、路盡きて返る。賊、北、準噶爾に投じ、その母弟妹等を俘にし、賊を斬ること八萬。師を出してより、賊巢に至るまで、凡そ十五日、往返兩月、俘を京師に獻ず。詔して、年羹堯を一等公に、鍾琪を三等公に封ず。羅卜藏丹津の敗れて、準噶爾に投ずるや、策妄阿拉布坦、之を納る。清廷使を遣して、獻ぜしむるも、詔を奉ぜず。而かも亦た敢て邊を犯さず。清廷乃ち西藏の鎮撫、喇嘛の保護を名とし、蒙古兵二千を派駐し、正副駐藏二大臣を拉撒に置いて、之を鎮撫せしむ。

露人、中央亞細亞侵略の嚆矢

準噶爾部長策妄阿拉布坦は、さきに西藏に敗れし後、復た清を爭はずと雖も、却つて、露國と兵を交へたり。さきに、昔班の疎族イルバルスといふもの、基華國を立てしが、その地、もと蒲華汗國の版圖たりしを以て、獨立の後も互に相和せず。基華汗國、しきりに利を失ふに及びて、屢ば使を露國に遣して、その援助を乞ふ。はじめ露國と中央亞細亞とは西伯利城略取の當時より、通商の關係ありしが、未だ詳細なる探究を着くるに及ばず。此頃韃靼人ホッジャ、チフエスといふもの、露廷に至り阿母河、即ち古しへ謂ゆる嬀水の流域、沙金に富むを說きトボルスクの鎮將プガーリンも亦た小布哈爾（東土耳其斯坦）に沙金多きを奏す。こゝに於て、彼得大帝は、意を決し、千七百十四（康熙五十三）年、二隊の探檢隊を派出す。これを露人中央亞細亞侵略の嚆矢となす。

西方に於ける露清の疆界

すでにして、その一隊は、基華に向ひ、國人の爲に疑はれて、忽ち襲殺せられしが、この時、露國は波斯に事ありしを以て、之を顧るの暇あらず。而して、他の一隊は喀爾瑪克、準噶爾の大兵と戰ひ、幾もなくして、準噶爾が清國と爭ひ、邊境の備なきに乘じて額兒底石河上に出て、當初の目的たりし沙金發掘は、その結果、觀るべきものなかりしが、唯だ同河流域を占領して歸れり。この前後、一方に於ては、準噶爾の爲に逐はれし吉利吉思族、西走して、烏拉兒河邊に至り、露國の保護を請ひ、他方に於ては、喀爾喀、清に服し、準噶爾、全く敗れしを以て、露清の二國は、ひとり黑龍江地方に於てのみならず、西域の舊地に於ても、亦た壤を接し、將來愈よ多事なるべき趨勢に達着せり。

恰克圖條約

千七百十一（康熙五十）年、露國の勢力は、西伯利亞の極東に及びて、堪察加半島を占領し、我が北門の警、漸く迫らむとし、彼得大帝は、遂に西伯利を以て、全國八州の

一となし、將軍を改めて知事となせしが、十九(康熙五十八)年に及び、西伯利亞全部を分ちてトボリスク、エニセイスク、イルクートスクの三省となし、イスマイルを正使とし、ランゲを副使とし、清廷に遣して、通商條約の改正を請求せしも、使命を全うするを得ずして還り、皇后カザリン位に即くや、二十七(雍正五)年ラグジンスキーを以て、使節となし、北京に至りて、條約改正を請求し、且つ蒙古の疆界を議定せむとす。世宗その條規に違ふことありしを以て、北京に於てするを許さず、外蒙古の郡王策凌・内大臣四格・侍郎圖理琛等を派遣し、後貝加爾の布拉河上に會同して、商議せしめ、兩國各調査委員を派出して、境界を査定し、八月、新約十一條を議定し、その翌年、兩國政府の批准を經たり。これを布拉(ブーラ)條約一に恰克圖(キャクタ)條約と稱す。

その要領

今、その要領を擧ぐれば、逃亡人は、兩國ともに搜索して之を還附し、恰克圖に貿易場を開設し、アルグン河岸よりチイクチランに至るまでは、チユク河を以て界となし、以西はボモシヤナイ嶺を以て境となし、烏特(ウト)河地方を中立地となし、通商の規定を改め、北京に敎會堂の設立を許可する等なり。これより後、露國は、北京貿易の不利なるを以て、之を廢し、專ら恰克圖に於てすることゝなし、その清國に屬する市場を買買城と稱す。

和通泊の敗

この年、準噶爾部長策妄阿拉布坦死し、その子噶爾丹策零嗣いで立ち、狡黠にして、兵を好むこと其父の如く、屢ば邊を犯す。七年、世宗、傅爾丹を以て、靖遠大將軍となし、阿爾泰山に屯し、北路に出でしめ、岳鍾琪を寧遠大將軍となし、巴里坤に屯し、西路に出で、以て準噶爾を征す。帝、太極殿に御し、授鉞の禮を行ひ、遂に長安門外の黃幄に御して、親視す。大將軍、馬に上つて、啓行するに、大雨注ぐが如く、旌纛皆濕ひ、識者以て不祥となす。四月、傅爾丹、科布多に城づく。六月、噶爾丹策零、大小數多ト策零を遣し、兵三萬を以て、北路を犯し、先づ諜を遣し、佯つて清兵に獲られ、詭言すらく、衛拉特の大隊、未だ至らず、その前隊千餘駝馬二萬、博克托嶺に在り、清軍を距ること三日程。と傅爾丹、勇にして謀寡く、遽かに之を信じ、即ち兵萬餘を以て往いて襲ふ。副都統定壽・永國海籌等、交も諫むれども聽かず、賊、步兵牲畜を以て、清兵を誘ひ、而して、兵二萬を谷中に伏せ、俄にして、胡笳、遠く作り、鎧裘四合、高に乘じて、突衝し、遂に清軍の前鋒四千を和通泊に圍む。萬矢雨集、衆寡敵せず、傅爾丹、後軍を以て

往いて援く。賊、すでに清の參贊の師を潰し、直に大營を犯す。傅爾丹、索倫蒙古の兵に命じ、先づ之を禦がしむ。科爾沁蒙古は紅纛を樹て、先づ靡いて遁れ、土默特蒙古は白纛を樹て、奮つて、賊壘を摩す。索倫の兵、但だ蒙古兵の敗るゝを知るのみ、誤り呼んで曰く、白纛の兵、賊隊に陷る、と。諸軍遂に大に潰え、終夜甲仗の聲絶えず。唯だ滿兵四千、輜重を衛り、且つ戰ひ且つ退き、哈爾納河を渡りしのみ、副將軍巴賽查納弼以下、皆戰死す。七月朔、科布多に還るを得るもの、わづかに二千人、賊の清兵を獲るや、皆脛を穿ち、盛るに皮囊を以てし、馬後に繫ぎ、胡歌を唱へて還る。蒙古科爾沁王、崔苻の中に匿れて免る。傅爾丹、反つて、其言を信じて、白纛の兵先づ敗れたりとなし、土默特の公沙津を執らへて之を斬り、士卒憤怒す。詔して、傅爾丹を降して、振威將軍となし、順承郡王錫保を以て之に代らしむ。

噶爾丹策零、すでに清軍を敗り、越えて三年、十年七月に至り、北路より、國を傾けて入寇し、潛に杭愛山に至る。これより先、喀爾喀土謝圖汗の隷部に札賚爾の曾孫丹津喇嘛諾們罕の後、策凌といふものあり。その先、かつて黄教の爲に力を盡し、達賴三世より三音諾延の號を得しが、策凌幼にして北京に長じ、公主に尚し、聖祖以

鄂爾昆河の戰

來、數ば準噶爾征討に從つて、大功あり。雍正三年以後、色楞迦河域を領して獨立す。こゝに於て、策零、その本博圖山に赴くを探知し、遂に突いて其帳を塔密河に敗り盡く子女牲畜を掠む。策凌、中途にして之を聞き、髮及び乘るところの馬を斷ち、天に誓ひ、旆を反して馳せ救ひ、幷せて急に順承親王に報じ、師を請うて夾攻す。策凌の部下に脫克渾といふものあり、晝夜行くこと千里、高峰の巔に登る毎に兩手を以て其衣を張り、皂鵰翼を鼓して立つが如くす。故に賊遠く望めども覺らず。盡く賊の虛實を得て歸り報じ、遂に嚮導す。蒙古の兵二萬、間道を繞りて、山背に出て、黎明天より下り、風の如く、雨の如し。賊、夢中に起き、人は弓に及ばず、馬は甲に及ばず、因つて之を喀喇森齊泊に追擊し、大に戰ふこと二日、賊大に敗る。而して、西路の援師、至らず。沿途轉戰十餘次、追うて、鄂爾昆河の杭愛山に至る。その地、右は山に阻し、左は水に偪り、道狹くして、大衆を容れず、又横亘するに大喇嘛寺を以てす。賊、走路なく、清兵暮に乘じて、險に薄り、之を蹴し、呼聲大漠に震ふ。賊三萬ばかり、擊つて其半を斬り、擠墜溺死、亦た其半、河水爲に赤し、清兵わづかに十餘を傷けしのみ。然れども、兵の夾攻するなきを以て、噶爾丹策零、夜に乘じ、圍を突き、山を繞つて遁れ、河

に推し、悉く輜重牲畜を棄てゝ、山谷に塞滿し、以て清兵を阻む。策凌、急に馬爾賽に拜達里克河に檄し、その歸路を邀へしむ。時に拜達里城中、兵萬有三千、もし數千の兵を以て邀へ擊たば、賊の一騎を以て返らざらしむべし。副將軍達爾濟、兵を整へて發するを待ちしが、馬爾賽、許さず、副都統傅鼐至り、跪いて求むるも、亦た應ぜず。將士城に登りて望見し、敵騎過ぐるもの、皆燒荒して追兵を絕ち、復た行列なし。翌日將士、將軍の令を待たず、自ら城を開いて之を追ひ、千許を擊斬す。而して、賊酋すでに前隊に從つて過ぐ。事聞こゆるや、馬爾賽等を斬る。はじめ、賊の北路を犯すや、順承親王、備なく、奏して萬人を調して、烏遜珠勒に赴いて、邀へ擊つといひ、實は止だ三千のみ。又領兵の將軍傅爾丹を大營に留め、賊をして直に險を越えて東に趨かしむ。次いで策凌兵を請ふの信に接するに及び、はじめ丹津多爾濟を遣せしも、十里ならずして止つて營し、策凌をして賊と戰ふこと二日、援なくして軍を收めしめ、鄂爾昆河の大堤に及び、賊幾んど盡きむとするや、丹津兵二萬を擁し、すでに山北に夾攻せざるのみならず、又山南に追擊せず、觀望却避、反つて飾り奏し、功を冒して、智勇親王墨根巴圖魯の號を賞せらるゝを得たり。こゝに至りて、發覺するや、皆爵を黜けらる。凡そ北路兩たび準夷を創けしは、皆策凌の功、晉めて和碩超勇親王に封ず。

策零と和す

後二年、準噶爾、使を遣し、和を請ふや、策凌に詔し、京に來つて王大臣と之を議せしむ。莊親王、允祿兩將軍と皆追討を主とす。大學士張廷玉等曰く、且つ之を撫せよ、若し順ならざれば追討せむ、と。兩議上る。世宗かつて先帝の密諭を奉じ、以爲へらく、賊巢遯遠、我が師往かば我勞し、賊師來らば賊困しむ、惟だ兵を嚴にして、誘致して、邀擊するを萬全の策となす。而して、賊、上年大創より後、すでに遠く從つて、敢て深く犯さず。我が兩路の大兵暴露久し、と。乃ち旨を降して、征を罷め、侍郎傅鼐及び學士阿克敦を遣して、之に報ぜしめ、先づ兩路の兵を量撤し、北路は城を鄂爾昆河に築き、兵を留めて屯田防秋せしめ、西路は哈密巴里坤に戍す。策零、阿爾泰山の故地を得むと欲せしも、廷議許さず。使令往復二歲、はじめて議を定め、阿爾泰山を以て界となし、術拉特游牧界東を過ぐるを得ず、喀爾喀の游牧、亦た界西を過ぐるを得ざらしむ。

雍正十三年八月二十三日世宗崩ず。在位十三年、五十八歳、皇太子弘曆立つ、これを高宗純皇帝となし、明年を以て乾隆と改元す。その十年、準噶爾の噶爾丹策零死し、三世梟雄の覇略、忽にして衰へ、所部俄に亂る。策零三子あり、中子那木札爾、その母貴きを以て汗位を嗣ぎしが、狂暴にして、其下に弑せられ、庶兄喇嘛達爾札立つ。宿將諸臣、その弟策妄達什を擁立せむとするや、喇嘛達爾札、之を知り、策妄達什を殺し、多く宗族を誅除す。こゝに於て、西藏丹衷の子にして、策妄阿拉布坦の外孫たる阿睦爾撒納は、狼戾の資を以て、大に爲すあらむとし、急に精兵を率ゐて伊犁に歸り、襲うて喇嘛達爾札を殺し、策妄阿拉布坦の從孫達瓦齋を立て、功を恃みて、驕暴なるを以て、達瓦齋、遂に之を逐ふ。

高宗の即位

阿睦爾撒納

乾隆十九年、阿睦爾撒納は、班珠爾納默庫、二台吉とともに、所部を率ゐて、清朝に內附し、熱河に入覲し、伊犁を取るの方略を說く。すでにして、準噶爾の驍將瑪木特以下、諸部將來歸するもの多く、爪牙心腹、盡く至り、その形勢、盡く露はる。こゝに於て高宗大舉し、翌二十年二月、班第を定北將軍となし、阿睦爾撒納、之に副とし、永常を定西將軍となし、薩賴爾、之に副とし、烏里雅蘇台・巴里坤の兩路より進み、攻むるや、部落風を望んで降り、五月一日、兩軍、約を誤らずして、博羅塔拉河に會す。達瓦齋は、はじめて驚き、兵を率ゐて、格登山に據り、清兵伊犁河を渡りて來り迫るを見、戰はずして逃れ、冰嶺を踰えて、回疆に走り、烏斯城に投ぜむとせしが、城主霍吉斯、之を執らへて獻じ、同時に青海の叛賊羅卜藏丹津、亦た虜となる。高宗その死を赦し、班第を誠勇公に、薩賴爾を超勇公に、阿睦爾撒納を雙親王に封じ、その後、達瓦齋・霍吉斯、亦た皆親王郡王に封ぜられて旗籍に入り、天山南北二路、刃に血らずして平定し、清威大に西に震ふ。

天山南北兩路の平定

然れども、阿睦爾撒納、狼戾にして清朝に服するの意なく、すでに雙親王に封ぜらるゝや、更に衛拉特四部の盟主となり、西域を總制せむとし、自ら總汗を以て居り、高宗の之を許さゞるを憤り、清軍の東歸するを待ち、この年八月、入覲の途に於て、烏隆古河より北に逸し、兵を天山北路に舉ぐ。時に伊犁留駐の清兵、わづかに五百人、班第等、路梗り、力戰して死す。これより先、天山南路は準噶爾の策妄阿拉布坦志を得るや、黑山派興りしが、達瓦齋の時、準噶爾亂るに乘じ、和卓等、浩罕・蒲華の後援を得て、獨立を圖り、準噶爾の守兵を逐ひしが、こゝに至りて、阿睦爾撒納は、白山

阿睦爾撒納の叛

派の布羅尼特を擁立して、喀什噶爾の主となし、和卓を率ゐて清兵に抗せしめ、兩路再び亂る

阿睦爾撒納の死

さきに三音諾顏の親王策凌死し、その世子成袞札布、父に嗣いで、定邊左副將軍となり、賊を擊つて、驛站を復し、左副將軍兆惠、寡軍を以て、伊犂に轉戰して功あり。二十二年三月、高宗、衛拉特四部、終に德を以て懷づくべからざるを知り、成袞札布をして北路より、兆惠をして西路より進擊せしめ、大に賊を剿す。會ま諸部落、自ら亂れて、互に呑噬し、痘疫亦た盛に行はれて、死亡相望む。兆惠、長驅して、諸部の酋長を斬獲し、六月、阿睦撒爾納を追うて、左哈薩克に至る。哈薩克汗阿布賚、使を遣して入貢し、阿睦撒爾納を擒にして獻ぜむとす。阿睦撒爾納、大に驚き、走つて露領に入り、幾もなくして痘を病みて死す。露國、清廷の移照に應じ、其屍を邊界に移す。こゝに於て、成袞札布に命じ、歸つて烏里雅蘇台に鎖せしめ、兆惠、復た餘逆を討ち、準部全く平定す。

天山南路再度の平定

天山南路は、布羅尼特の弟霍集古、伊犂に在りて、清兵に抗し、軍敗れて喀什噶爾に逃るゝや、兄に勸めて自立し、庫車を奪ひ、巴圖爾汗と號さしめ、自ら葉里羌に據つて犄角す、清兵之を攻めて利あらず。雅爾哈善以下の諸將、皆誅せらる。兆惠の準部を平定するや、請うて南征し、葉里羌を攻め、黑水河を隔てゝ戰ひ、對陣三月に亘り、副將富德の援兵を得、夾攻して之を破り、兩軍會合、振旅して、阿克蘇に入る。二十五年六月、兵二萬、馬三萬、駝一萬、皆阿克蘇に集りしを以て、兆惠は、喀什噶爾に向ひ、富德は葉爾羌に向ふ、賊大に恐れ、城を棄て、人畜を驅り、葱嶺を踰えて、西に赴く。前鋒の將明瑞、葱嶺の嶺、霍斯庫嶺に戰ひ、勝に乘じて進み、七月七日、阿楚爾山に至り、斬獲甚だ多く、又三日にして、巴達克山國の界、伊西洱庫河に至り、回衆一萬二千人を降す。布羅尼特、兄弟妻孥、巴達克山に走る。その地の酋長、之を阿爾渾楚嶺に迎へ擊つて捕へ、後、清將の檄に應じて、其尸を贈る。天山南路、全く平らぎ、二十五年八月、捷奏北京に至るや、兆惠・富德以下、諸將の功を賞し、喀什噶爾を以て參贊大臣建牙の所となし、南路の各城を治め、城の大小に依りて、辦事大臣・駐防大臣、或は嶺隊大臣を置く。

こゝに於て、清威遠く葱嶺以西に及び、哈薩克・布魯特・浩罕・巴達克山・愛烏汗の諸國、皆來貢服屬す。その詳は、こゝに贅せず。元の世祖以後、東方老帝國の勢威、久しく

中央亞細亞に及ばざりしが、こゝに至りて復た此の如く、清初の盛、想見するに堪へたり。而かも、この多事の際に方り、清室は又南方の經略を爲すに怠らず。

鄂爾泰

第四十四章　苗疆の剿治

西南の地は、明末流賊の亂より、清初三鎮の變に及び、その地僻遠、その民悍強、清に服屬すること、最も晩し。雍正四年鄂爾泰、奏疏するところあり、世宗、その才、必ず寇を辨ずべきを以て、詔して、東川・烏蒙・鎮雄三土府を以て、改めて雲南に隸し、後復た三省總督の印を鑄り、鄂爾泰をして、廣西を兼制せしむ。こゝに於て、四年より九年に至るまで、蠻悉く流を改め、苗亦た化に歸す。はじめ、鄂爾泰、兵を貴州に閲するや、游擊哈元生の才を奇とし、携へて、東川に赴き、委ぬるに烏蒙鎮雄の事を以てす。元生固より、材武、膽略人に絶つ、爾泰の知遇に感じ、奮つて矢石を冒し、屢ば功を立てゝ、大將に至り、西南夷を平らげ、其力多し。その川邊諸土司を治むるや、兵を用ふること最も先たり。兩土府、旬日にして皆平らぐ、烏蒙を以て、府を設け、鎮雄に州を設け、又鎮を烏蒙に設け、三屬を控制し、その鎮邊の諸夷を治むるや、先づ土司を革めて、後に猓夷を剿し、その黔邊の諸夷を治むるや、首尾兵を用ふること、凡そ五六歳、古州に終つて廣順州の長寨に始まる。寨は、各苗の腹に據り、一方に獷獷たり。副將劉業浚、三の剿すべからざるを言ふや、鄂爾泰、駁するに三の剿せざるべからざるを以てし、總兵石禮哈をして、搜討せしめ、盡く首徒を殲し、弓弩四千三百餘、毒矢三萬餘、盔甲刀標各數百を勒繳し、參將營を立て、險要を分扼す。こゝに至り、黔邊の東西南三面、廣順、定番、鎮寧の生苗六百八十寨、鎮寧、永寧、豐永、安順の生苗千五百九十八寨、地方千里を招服す。清水江・九股河・大小丹江の沿岸數百里、皆その巢窟、直に粵界に抵る。古州八萬、土沃にして夷淳、諸苗に隔りて、化に向はず。三省中に梗す。こゝに於て、山を伐り、道を通じ、窟宅を窮搜し、神焦鬼爛、百里内外、咸な震つて兢兢、弩を負うて路に迎へ、古州大に定まる。その卑夷を治むるや、先づ土司を改め、次に土目を改む。こゝに於て、三省邊防、皆定まる。西南夷、稍や肩を息め、汗菜を墾闢し、山林を焚烈し、久荒の土畝、收數倍、古州丹江の禾、長さ八尺、穗五六岐、豆の大なる粟の如し。苗疆戡定するや、世宗、鄂爾泰の勞を嘉し、襲勤伯に封じ、世襲替るなく、九年入つて武英殿大學士となる。

黔苗の變

十二年、哈元生、新闢苗疆圖志を進む、尹繼善を以て、雲貴を督せしむ、しかも、復た黔苗の變あり、はじめ、苗疆地を闢くこと二三千里、幾んど貴州全省の半に當り、營を增し、汛を設け、凡そ腹內郡縣の防兵、大半移つて新疆に戍し、又鄂爾泰の兵を用ひて招撫するや、止だ古州清江に止まり、未だ台拱の九股苗に及ばず、有司、台拱內屬を願ふと稱す、巡撫元展成、苗疆を易視し、遽かに十年に於て、營を設け、兵を駐む。時に秋稼未だ穫らず、苗伴つて版築を聽るして、日夜刈穫し、市めて昇るや、即ち傳へて、上下九股數百寨を集めて叛し、大營を圍み、并せて排略大關の險を扼し、以て餉道を阻し、營中樵汲皆斷え、草根を掘り、死守彌月、援至つて始めて解く。

征苗全局の變

十三年春、苗疆の夫徵、稅善からざるを以て、遠近各寨蜂起し、徧ねく土刻を傳へて、妖言四煽す、省城の大吏、尙ほ之を信ぜず、總兵韓勳、賊を古州に敗る、賊復た清江台拱の間に聚集し、號召日に衆し、巡撫元展成、苗事を易視して、哈元生と合はず、倉卒兵五千を調し、盡く副將宋朝相に付し、之を領して、赴き援けしむ、賊、その虛を窺うて深く入り、黃平以東の諸城を破り、逆氛四に起り、徵調殆んど盡き、奔救遑あらず、驛路四に隔り、省城戒嚴す、四月、哈元生、親兵三兵を以て、自ら出で、師を督すや、賊敢て平越都匀以上を犯さず、六月、詔して、滇蜀楚粵六省の兵を發して會剿せしめ、時に哈元生に揚威將軍を授け、湖廣提督董芳、之副たり、元生、兵を三路に分ち、以て八寨を援けしむ、而して、八寨協副將馮茂復、降苗六百餘及び頭目三十餘を誘殺して、功を貪る、こゝに於て、苗逃れ歸り、徒黨に播告し、詛盟益す堅く、多くは妻子を手刃し、而かる後に、出でゝ官兵に抗し、蔓延して招撫すべからず、刑部尙書張照、撫定苗疆大臣となりて、其地に至るや、地を棄つるの議を倡へ、且つ董芳に祖し、專ら招撫を主とし、哈元生と齟齬す、こゝに於て、己進の兵、紛紜改調、互換し、而して二人遂に村寨道路を以て、盡く上下界を韭せむとし、文移辨論、大兵雲集、數月曠久、功なきを致す、賊、間に乘じて、復た出て、清平、黃平、施秉の間を焚掠し、紛紛警を告ぐ、官軍此を顧れば、彼を失ひ、奔命に疲る、この冬、湖廣總督張廣泗奏す、善後宜しきを失ふは、皆臣の罪、願はくは、職を革めて、力を軍前に效さむと、許さず、鄂爾泰、疏して伯爵を辭し、并せて、任を解いて調理せむことを請ふ、之を許す、この時に當り、中外事を畏るもの、爭つて、これより、前、苗疆の闢くべからず、目前苗疆守るべからざるを咎め、前功幾んど失ひ、全局幾んど大變せむとす。

張廣泗

十月、張廣泗に七省經略を授け、張照・童芳・哈元生及び元展成を逮して罪を治む。廣泗乃ち全黔の兵を調して、鎮遠に集り、以て雲貴往來の大路を通じ、將士を簡選し、而のあたり、方略を授け、精兵四千餘を以て、上九股を攻め、四千餘を以て、下九股を攻め、而して、自ら五千餘を統べて、清江下流の各寨を下し、この冬、期を刻して、並に擧げしむ。號令嚴明、向ふところ、克勝す。乾隆元年春、復た兵を出し、八路に分れ、抗拒の逆寨を排剿し、焚蕩剷削せざるなく、盡く牛皮大箐、箐國に竄す。苗巢の中、盤亘數百里、北は丹江、南は古州、西は都匀八寨、東は清江台拱、危巖雲を切り、老樹空を蔽ひ、漏天泥濘、蛇虺の國するところ、近地の苗蠻と雖も、亦た能くその窔邃を悉くし、その荒阻を窮むるものあらず、故に群怒萬慝、咸な其中に藪伏し、官兵の萬至る能はざるを恃み、軍退くを俟つて、復た出沒を圖る。廣泗、諸軍に檄し、分つて、箐口を扼し、以て之を坐困し、又傍ら奇兵を箐外に張り、以て逋逃を截ち、重重合圍、漸を以て進み偪る、四月より五月に至るまで、將士瘴癘を犯し、榛莽を冒し、洞谷を彈し、魑魅蛇虎と錯行し、火烈隨つて刋し、神號鬼泣、羅天井地、飛走皆窮り、その俘斬の外、飢餓して厓谷に殞死せしもの、萬を以て計る。蓋し開闢以來、人跡至らざるの區、天日臨まざるの地を窮め、而かも、大蒐深く入り、山澤汙を匿す能はず、從來鬼方の撻伐、未だ滌蕩廓清、かくの若きの烈しきものあらざるなり。六月復た兵威に乘じて、逆に附きし熟苗を搜剿し、首惡・次惡・脇從の三等に分ち、秋に涉り、暑を徂し、先後掃蕩ともに千有二百二十四寨を燬除し、三百八十有八寨を赦免し、陣斬萬七千六百有奇、俘二萬五千有奇、銃礮を獲ること四萬六千五百有奇、刀矛弓甲等十四萬八千有奇、その叛俘を宥るし、その叛產を收め、九衛屯田を設け、兵を養うて之を戍る。詔して、盡く新疆の餞粮を豁にし、永く徵收せず、以て官胥の擾を杜ぎ、その苗認は仍ほ苗俗に從つて處分し、律例に拘らず。廣泗を以て貴州を總督せしめ、巡撫の事を兼ぬ、これより南夷遂に反せず。鄂爾泰、乾隆十年に卒す。西南夷を開きし功を以て、太廟に配享す。鄂爾泰、世宗曠世の知を受け、功、西南に在り、今に至るまで、百年、その利を享く。

金川は、小金沙江の上游なり、一を大金川となし、一を小金川となす、皆河に臨み、山に金礦あるを以て、名を得たり、即ち漢の冉駹の外徼なり。萬山叢蠭、中に洶溪を

莎羅奔

廻らし、皮船笮橋、曲折一綫、深寒にして雨雪多く、土番驚悍にして、死戰を好み、居皆石碉なり。康熙五年、その土司嘉勒巴、内附して、演化禪師の印を給し、その衆を領せしむ。その庶孫莎羅奔といふもの、土舍の將兵を以て、將軍岳鍾琪に從ひ、西藏の羊峒番を征して功あり、雍正中、奏して金川安撫司を授けらる。莎羅奔、自ら大金川と號し、而して、舊土司澤旺を以て、小金川となす。莎羅奔、澤旺を劫かして、その印を奪ふや、四川總督、檄して、之を諭し、はじめて、澤旺を故地に還へす。十二年、華布什札等を攻むるや、巡撫紀山、將を遣して、弭治するも、約を奉ぜず。反つて、官兵を傷つく。紀山奏して進剿を請ひ、高宗、雲貴總督張廣泗、苗を征して、功あるを以て、調して四川を督せしむ。廣泗、奏して、兵三萬を調し、兩路に分れ、險を阻して前まず、復た請うて兵萬を增す。十三年春、諸將多く事機を失ふ。高宗、乃ち大學士公訥親に命じ、往いて師を視せしむ。訥親至り、鋭意賊を滅し、令を下し、三日を限りて、噶爾厓を取る。總兵參將等、戰死す。これより敢て政を專にせず、仍ほ張廣泗に倚つて、賊を辨ず。この年五月、兵を進めてより、八月に至るまで、未だ寸進を得ず。方に拉底山を攻む。賊噪いて下り、清兵三千皆潰ゆ。詔して、岳鍾琪、傅爾丹、皆宿將を以て、廢棄の中より起り、未

莎羅奔の誅戮

だ一謀を發し、一策を出せしを聞かざるを責む。鍾琪・訥親・廣泗を劾奏す。高宗、逮して京に入らしめ、之を斬す。大學士傅恆に命じ、訥親に代らしめ、訥親は軍前に於て死を賜ふ。十二月、傅恆軍に至り、良爾吉等を斬り、以て內應を斷じ、鄰省の兵を增調し、期を刻して進剿せしむ。尋いで、傅恆、前將討卒の顧る方を失するを疏し、大兵齊しく集り、四面布置するを俟つて、その不意に出で、直に巢穴を搗き、その渠魁を取り、四月の間に於て、捷を報ぜむといふ。はじめ、帝、土司小酋、師を勞すること五載、兩大臣を誅し、文任舉の良將を失ひしを以て、ずでに懷に釋せず。ずでに及びその地險にして力艱、師旅を殫くすに足らざるを聞くや、益す訥親・張廣泗の早く實を以て聞せざりしを恨み、且つ屢ば皇太后・武を息め、邊を寧ずるの諭を奉じ、遂に傅恆に命じ、師を領して、朝に還らしむ。傅恆復た奏し、方略を陳して云ふ。番に形勢を憑るに、賊碉盡く道に當るに非ず、その巢穴皆老弱、但だ碉を含いて、直に中堅を搗かば、賊亦た必ず碉に出でゝ內顧し、分れて我が兵を拒がむ。且つ戰酣且つ前み、一面は間に乘じて碉を奪ひ、一面は各兩旬の乾糧を携へ、昔嶺・中峰より直に噶爾厓に抵らば、實に破竹建瓴の勢あり、今功成るに垂んとするに在り。之を棄つるは、惜む

べし、且つ臣命を受け、兵を調して、大舉し、若し穴を掃ひ渠を檎にせざれば、亦た何の顏か、以て內地に返らむ。然らざれば、賊震へて降を乞ひ、軍門に匍匐せば、機を相して擒獻し、亦た凱を奏すべし、と。帝すでに計を決して、兵を罷め、傅恆が將外に在れば君命も受けざるところありといふ說を守り、堅く功を成さむと欲するを恐れ、復た寄諭反復數千言、且つ謂ふ、戩爾たる土司、即ち穴を掃し庭を犂くも、武を示すに足らず、且つ果して俘を獻ずれば、必ず首を藥術に懸く、以て孚降の信を示す所以に非ず、もし此時すでに執に就かば、一たび四川に回り、中途にして釋して、故巢に歸らしめよ、と。時に傅恆及び岳鍾琪、兩路連りに碉上下に克ち、軍聲大に震ひ、

莎羅奔の降降

莎羅奔父子、大に怖れ、人を遣して鍾琪に詣つて降を乞はしめ、惟だ死を畏れて、敢て出てず。はじめ、鍾琪、川陝總督となり、時に金川と沃日各土司と界を爭ふの事を勘し、盡く年羹堯の前失を反し、區畫甚だ公。莎羅奔、故に土舍を以て、鍾琪の麾下に隸し、土司の印を給せられ、甚だ之を德とし、こゝに至りて、降を鍾琪に乞ふ。鍾琪輕騎、徑に其巢に抵るや、賊その親ら至りしを見て、大に喜び、悉く約束を聽き、佛經を頂にして誓を立つ。次日莎羅奔父子、鍾琪に從つて、洞を出て、大軍に詣り、先づ番人

郎卡

索諾木

をして、軍前に詣らしめ、地を除して壇を爲り、行幄を設け、期に至りて、賊首、壇前に泥首す。傅恆幄に升りて、その抗命を責む。莎羅奔、叩頭六事に遵ひ、土司の侵地を歸し、凶首を獻じ、軍械を納め、兵民を歸し、番役を供することを誓ふ。乃ち詔を宣べて、其死を赦す。諸番、香を焚いて樂を作し、金佛を獻じて謝す。二月四日、奏聞するや、詔して傅恆を一等威武公に封じ、岳鍾琪、三等威信公を復し、碑を大學に立て、鍾琪の經略を佐けしを以て、李愬の裴度に於けるに比すといふ。

金川すでに定まりしが、幾もなくして復た亂る。莎羅奔の兄の子郎卡、土司の事を主るや、漸く桀驁鄰境を侵し、て已まず。三十一年、總督阿爾泰に詔し、九土司に檄し、環つて之を攻めしむ。而かも、阿爾泰、姑息にして、但だ諭して諸土司の侵地を反さしめ、即ち安撫司の印を以て、郎卡に給し、且つ綽斯甲と婚を結ぶを許し、而して、澤旺の子僧格桑に妻はす。阿爾泰、その黨與を離すを知らず、反つて、仇を釋き、約を結ぶを許す。これに由つて、兩金川、狼狽して奸を爲し、諸土司皆敢て抗せず、而して、邊釁棘たり。郎卡旋つて死し、その子索諾木、僧桑格と鄂克什土司の地を侵し、官兵

木果木の戰

と戰ふ。事聞するや、阿爾泰に死を賜ひ、大學士溫福に命じて、雲南より四川に赴かしめ、尚書桂林を以て、阿爾泰に代つて、總督たらしめ、ともに賊を討ち、三十餘年十月、遂に直搗賊巢を搗くや、僧桑格、竄して、大金川に入る。溫福剛愎にして、廣く方略を咨はず、士心解體す。こゝに於て、木果木の難作る。[illegible]僧桑格、小金川の頭目等をして、美諾溝より出でゝ、故の降番を煽動して、復た叛せしむ。諸降番、大軍久頓して、進まざるを以て、遂に蠭起して、之に應じ、先づ攻めて提督董天弼の營を陷れ、次に糧臺を劫し、即ち兵を潛め、木果木を襲ふ。溫福、遽に浮山險の要隘を嚴備せず、賊突いて大營に薄り、先づ破局を奪ひ、汲道を斷つ。時に大營なほ萬餘、會ま運夫役卒數千、避けて大營に入る。溫福、壘門を堅くして、納れず、聽いて潰え、壕塹を塡すが如し。こゝに於て、軍心益す震ひ、賊、四面より蹂入し、溫福、鎗に中つて死し、各卡の兵風を望んで潰散す。海蘭察、營を開いて、進き擊け、衆を殿として、間道より退出し、潰卒を收め、尚ほ萬有數千あり、その戰沒せしものの、三千餘、小金川の地、復た賊に陷る。こゝに於て、阿桂に定西將軍を授け、豐神額埒亮を副將となし、赴いて剿せしめ、遂に盡く小金川の地を復す。詔して、更に小金川の師を移し、進んで、

大金川の平定

大金川を討たしむ。阿桂力めて身を以て之に任ず、而して、大金川の地、十二三年より以來、全力抗守、壘を增し、險を設け、嚴密なること、小金川に十倍す。これに嗣いで、王師三路より進み、攻め、復た兩戰餘を閱し、はじめて克復す。

時に賊巢二あり、一は勒烏圍、一は噶爾厓。その勒烏圍は、羅博瓦山を以て門戶となす。阿桂、海蘭察・額森特・海祿をして三路より進ませ、福康安・成德・特成額をして、三路より仰いで其前を攻めしむ。黎明、その險を盡くし、進んで、那穆山に營す。賊、全力之を守る。六月、色淜普嶺に間道あり、繞つて那穆山の後に出づべきを偵知し、退いて薩斯甲嶺を守り、防禦益す嚴。惟だ迤西の最高峰に兩大碉あり、削絕壁立、我が兵至る能はざるを料り、未だ甚だ備へず。七月諸軍をして、各碉寨を分攻せしめ、數十道、並び進む。而して、海蘭察は死士六百を率ゐて、最高峰の削壁より攀引して上り、趾頂相接し、明くる比、その一碉に及び、一躍して入り、盡く之を殲す。數十里の各寨、之を聞いて、皆氣を奪はれ、遂に同時に破る。因つて勝に乘じて、直に遜克宗の壘に臨む。賊震懾し、索諾木、すでに僧格桑を戕殺して其尸を獻じ、軍に至りて、

己の罪を赦されむことを乞ふ。阿桂、京師に檻致す。十月大兵墨格山に克ち、勒烏圍を距ること二十餘里、守愈よ堅く、兵を頓することと兩月、明年春力めて攻めて之に克つ。賊、復た朗噶寨を守る。はじめ、明亮の南路を攻むるや、庚額山に阻せられ、天險進む能はず。阿桂軍を移し、宜喜當西路より、攻めて色沏普嶺に克たしむ。時に南路の軍、亦た雨を冒して、宜喜の七碉を破り、十月琅谷に克ち、遂に大軍と河を隔つ。阿桂、河東に軍し、明亮河西に軍す。乃ち明亮に約して議し、兩路より並び進み、賊をして抽調して我を禦がしむ。會ま連雨數旬、兵未だ進む能はず、番地もと少晴多雨、賊の喇嘛、又能く札答の邪術をなし、以て雨雪を致し、泥潦膝を沒す。四月中、はじめて霽るゝや、阿桂先づ海蘭察・福康安をして、河を渡つて西し、明亮を助けて宜喜を攻めしめ、甲索わづかに賊の老弱ありて防守するを偵知し、襲うて、十碉を破り、遂に兵を六路に分ち、連りに各寨に克つ。五月、阿桂河東の軍、連りに朗噶寨・昆都喇嘛寺を破り、七月勒烏圍に抵る。その官寨、碉堅く墻厚く、兩つながら、大河に臨み、迤南に轉經樓あり、官寨と相犄角し、木柵石卡、長さ里許、その東、山麓を負ひ、崖あり八層、層ごとに各碉を立つ。清兵先づ卡柵を破り、以てその犄角を斷ち、八月十五夜、進んで、

金川征討の困難

賊巢を擣き、兩賊巢すでに其一を破る。而して、莎羅奔兄弟及び頭目、先に已に遁れて、噶爾厓に赴く。十二月、三路の軍、皆噶爾厓に會し、長圍を築き、大礮を以て、晝夜震擊し、至るところ、墻壁數重を洞す。索諾木、窘急し、その兄をして、營に至つて哀を乞はしめ、而して、自ら病と稱し、堅碉中に匿れて、敢て出でず。番俗最も自戒を忌むを知り、外圍益す急なり。索諾木、果して莎羅奔及び頭目妻子を從へ、番衆二千餘を挈へて、寨を出で、印を奉じて、軍門に獻じ、金川平らぐ。四十一年正月、阿桂師を率ゐて凱旋し、功を以て誠謀英勇公に封ぜらる。

はじめ乾隆二十年、準回兩部を平らげ、地を闢くこと、二萬餘里、兵を用ふること五年、帑銀三千萬餘兩を用ふ。金川の地は、わづかに千里、準回兩部、十の一二に及ばず、而して、兵を用ふること亦た五年、帑銀七千萬餘兩を用ふ。功半にして事倍するものは、天時の多雨久雪と、地勢の萬夫前むなしと、人心の同惡死を誓ふと、三難を兼ねて、之あるを以てなり。その征伐の艱苦、知るべきのみ。然れども、金川すでに平らぎしを以て、清威は、自然の勢、その南、はるかに暹羅・緬甸等、東南亞細亞の諸邦に及べり。

第四十五章　東南亞細亞の形勢

新緬甸

緬甸は、明の中葉以後、一時大に衰へ、ペングタリ、明の桂王を清に致してより、功を恃みて、清に貢せず、雍正十年、東隣景邁を攻め、內亂相繼ぎ、その南方白古部、之に乘じて、獨立し、勢日に强く、乾隆十六年、遂に國郡阿瓦を陷れ、その王莽達剌を殺し、伊羅瓦底河上游の諸蠻部、多く羈屬せしが、ひとり阿瓦の北境、木疏の部長甕籍牙（オンガセヤ）之に抗し、乾隆十九年、阿瓦を恢復して、新緬甸國を建つ。雍氏は、漢代印綬を受けて より、こゝに至るまで千六百九十三年、一姓相傳ふといふ。こゝに於て、遂に白古部を征服し、更に兵を移して、阿撒毋（アッサム）を降し、又暹羅を伐つ。

暹羅

暹羅は、さきに緬甸の明に敗られしに乘じて、その羈絆を脫し、地を拓きしが、王位相續法、兄弟相及ぼすこと多きを以て、內亂絕えず。從つて、外國人その地に流寓するもの、機に乘じて、風雲の會をなし、高官貴爵を得るもの多く、我が山田長政の如き、その最たるものなり。但し、其詳は、こゝに述べず。長政王事に勤め、暹羅の危亡を濟うてより後五十年、希臘人コンスタンチス、フォールコンといふもの、亦た此國に來り、日本婦女を迎へて室となし、亦た、暹羅王の信任を得、軍國の大權を握り、大に耶蘇教の傳播に從事し、又自己の位置を鞏固にせむが爲に、數ば王に說いて、遙に佛蘭西王の保護を乞はしむ。佛蘭西王ルイ十四世大に悅び、兵を暹羅に送る。暹羅の國人、固より耶蘇教を好まず、且つ佛兵の派遣、その意の在るところを疑懼し、叛黨並び起りて、コンスタンチスを殺し、佛兵を境外に驅逐せり。然れども、これ佛人東方侵略の端緒にして、その後、暹羅の國威、復た振はず。緬甸の新に興るや、常に其兵を被り、漸く危亡に瀕せり。乾隆二十五年、甕籍牙殂し、その子孟駁（ムンダ）、嗣いで立つや、三十一年、復た暹羅を攻めて、國都猶地亞を圍み、翌年之を陷れ、守兵を置いて凱旋せり。

緬甸邊に寇す

緬甸の起るや、桂家・木邦の二土司、抗して服せず、兵を起して敗死す。こゝに至り、て、緬酋益す忌憚なく、雲南の南疆、耿馬・孟連の諸土司に及ぶ。はじめ諸土司の緬に近きもの、皆緬に私幣を輸せしが、その元と等夷なるを以て、復た餽獻せず。こゝに於て、緬酋兵を遣して、勒索すること急なり。而かも、清の邊夷、之を扶植せず、反つて爲に助けて己の忌むところを剪るや、漸く內屬の諸土司に及ぼし、遂に孟養の酋

應琚

を嗾して內犯せしめ。袞龍江を渡らむと揚言し、總督巡撫、手を束ねて策なし、時に乾隆三十年なり。大學士應琚に詔し、陝甘より移つて雲南を督せしむ。應琚事機の順利なるを見、密に緬甸取るべきの狀を奏し、移つて永昌に駐まり、文を移して、緬に檄し、威を以て之を服さむとす。緬賊之を聞くや、乃ち大に兵を出し、木邦を攻め、景線を攻め、皆之を陷る。副將趙宏榜、蠻酋の新街を襲ふ。新街は阿瓦の上游にして、賊必爭の地なり。緬人善く舟を操り、舟の頭尾に多く大礮を置き、旋轉して飛ぶが如し。清兵敗れて潰え、鐵壁關に還る。賊數萬、尾して入る。應琚憂甚しく疾作る。兩廣總督楊廷璋に詔して、之に代らしむ。總兵朱嵩、進んで新街を守る、賊佯つて人を遣して、欵議し、而して、兵を分ち、繞つて萬仞關に入り、永昌各邊を圍み、清の聲勢、復た振ふに及ぶや、復た降を乞ひ、以て師を緩うし、間に乘じて、猛卯城を圍む。副將哈國興、之を救うて、土司と拒守すること八晝夜。援兵はじめて至つて、賊潰走す。時に是年正月なり。廷璋、任に至り、賊事の未だ竣り易からざるを見、應琚病すでに痊へたりといひ、專に歸らむことを乞ふ。帝、召して京師に至らしめ、明瑞に詔し、將軍を以て、兼ねて雲貴を督せしむ。明瑞伊犂に在つて、未だ至らず。先づ鄂寧を以て之に代らしむ。鄂寧、應琚の失狀を奏し、仍つて、應琚を逮し、京に至つて、死を賜ひ、詔して滿州の兵三千及び雲貴四川の兵二萬餘を以て、大舉して緬を征せしむ。

明瑞

明瑞、木邦よりし、參贊等、孟密よりし約して、阿瓦に會せしめ、九月二十四日を以て啓行し、十二月十日、木邦に至り、其地を略し、兵を留めて之を守らしめ、自ら兵萬二千を率ゐて、浮橋を爲り、錫箔江を渡る。緬、素より兵を養はず、事あれば兵を所屬の土司より召し、惟だ阿瓦に勝兵萬人を蓄ふのみ。戰に每に、土司、濮夷をして前に居らしめ、勝兵をして後を督せしめ、又騎兵を以て兩翼となし、戰すでに合すれば、兩翼分れ、繞つて進み、未だ勝つべからざるを度れば、急に柵を樹てゝ、自ら環らし、而して、連環鎗礮を以て、之を蔽ひ、烟開く比、柵すでに立ち、入つて拒守す。その兵法、かくの如し。こゝに至りて、天生橋の南岸を砦守す、清師、淺渡を繞つて、之を潰し、數日にして、蠻結に至る。賊軍二萬、十六柵を立て、深溝を環繞し、象陣を列して待つ。賊、柵甚だ固し。その法、互木を立てゝ柵となし、兵を其中に聚め、敵の鎗礮、わづかに其柵に及ぶのみ。而して、賊は柵より敵を擊つて、輙ち中る。これ賊の長技なり。清軍先